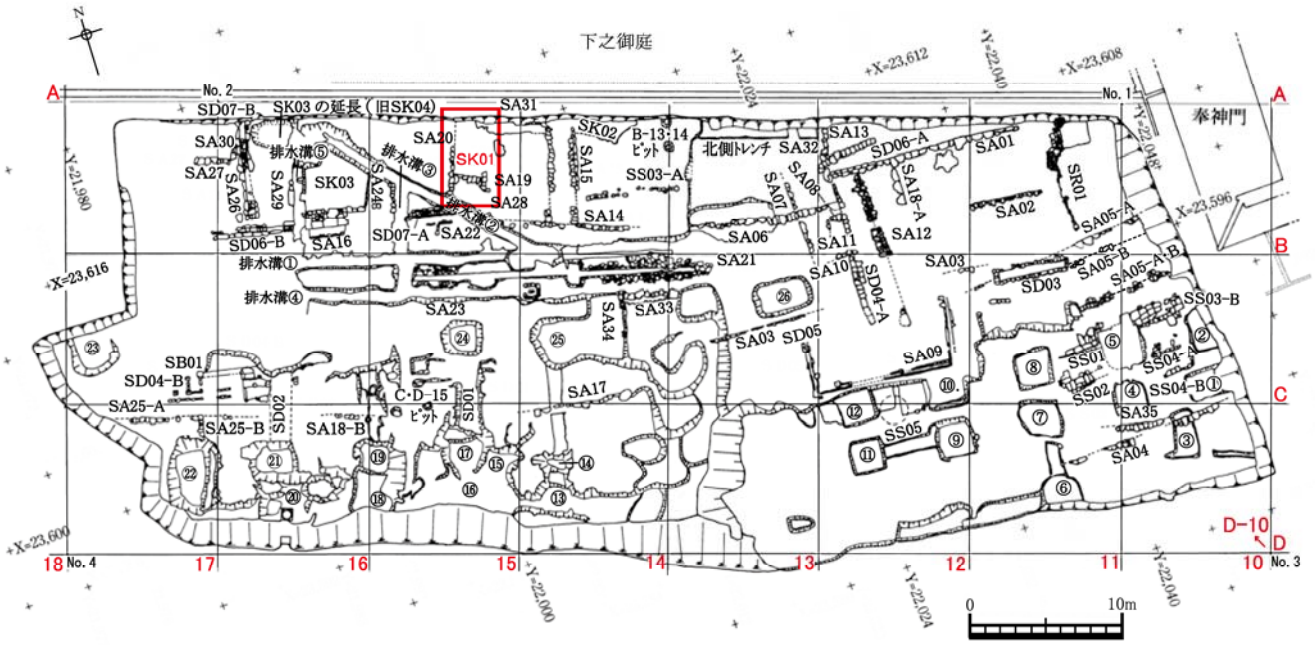
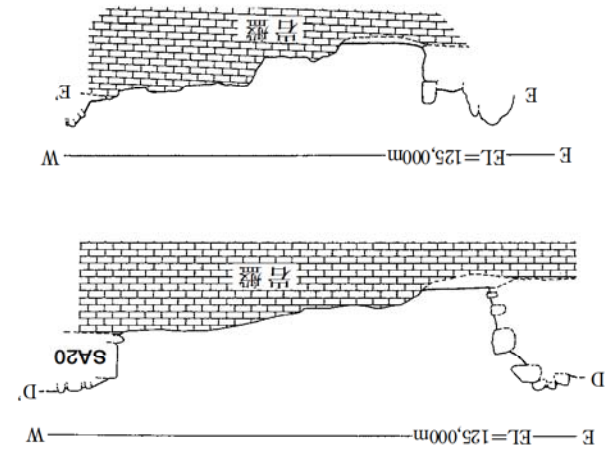


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

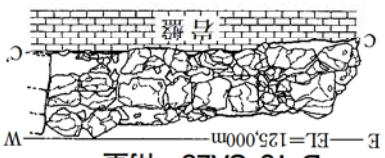
第 21 表　第Ⅲ期　SK01（SA19・SA20・SA28）　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－15 SK01 第32・44図	2m90cm 2m47cm 深さ 45cm	琉球王国時代の倉庫の一部で、火災により一括で焼けた多量の遺物が堆積。倉庫の平面観は南側に階段を設置した歪な「h」の字状。岩盤を平坦（起伏があり雑な仕上げ）に成形した面となっている状況やSA19の石積み直下の栗石から判断すると床下となる可能性が高いものと思慮される。1459年の失火による火災で機能を終える。	南北の主軸はSA19とSA20の方位と同じ。東西はSA28の方位と同じ。	—	—	SA19（階段の東側側面石積み）、SA20（倉庫の西壁）、SA28（階段）を当初個別の石積みとして発掘調査を実施した結果、倉庫跡と判断された為、最終的に倉庫内部より出土した遺物を正確（周辺遺構から遺物の混入防止の為）に把握する目的で、SK01として名称を付した。
B－15 SA19 第32・44図	1m17cm 39cm 65cm	琉球王国時代の倉庫階段の東側側面の縁石。南北方向に短く残る。岩盤上に基礎となる野面石や栗石を敷いてから石積みを設置。15C中頃。	N24° 15′ E	切り石積み 90°	22～36cm 20～26cm 34～39cm	SA20（倉庫の西壁）とほぼ同一方向にある階段の東側側面の石積み（SA28）。SA20、SA19と関連。
B－15 SA20 第32・44図	3m17cm 50cm 63cm	琉球王国時代の倉庫西側の壁の石積み。南北方向に延びているが、両端が欠落。岩盤の一部を成形した後に、直接岩盤上から石積みを施す。石積みは小振りの切り石を多用し、石積みに横目地がとおる箇所が存在する。15C中頃。	N22° 15′ E	切り石積み 90°	14～51cm 8～33cm 27～39cm	SA19（階段の東側側面石積み）、SA28（階段）と切り合って併存。SA19とほぼ同一方向。SA20の壁石積みは火災で火熱を受けて脆くなり、橙色に変色する石が目立っている。
B－15 SA28 第32・44図	2m25cm 1m03cm 47～70cm	琉球王国時代の倉庫へ下って入るための階段。岩盤や造成土の上から小振りの粗加工の切り石を用いて階段の踏み石とする。階段の段数は三段を数えた。SA28の階段は現存する最上段でSA20（壁石積み）とは直角の関係にあり、かつ、SA19ともほぼ直角の関係にある。計画的に設計された倉庫とみられる。15C中頃。	N64° 00′ E	切り石積み 90°	24～36cm 15～25cm 24～42cm	SA19（階段の東側側面石積み）・SA20（倉庫の西壁）と直接関連。階段の二段目の勾配は7° 外側に傾く。

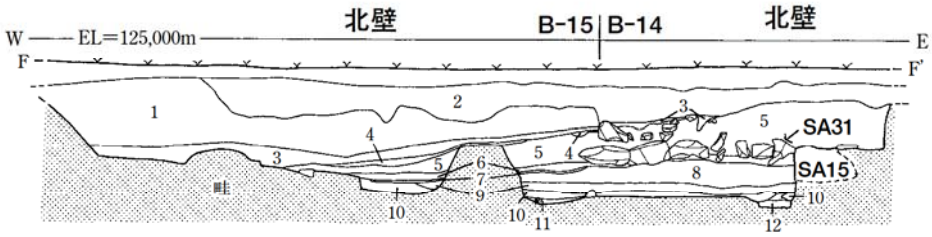


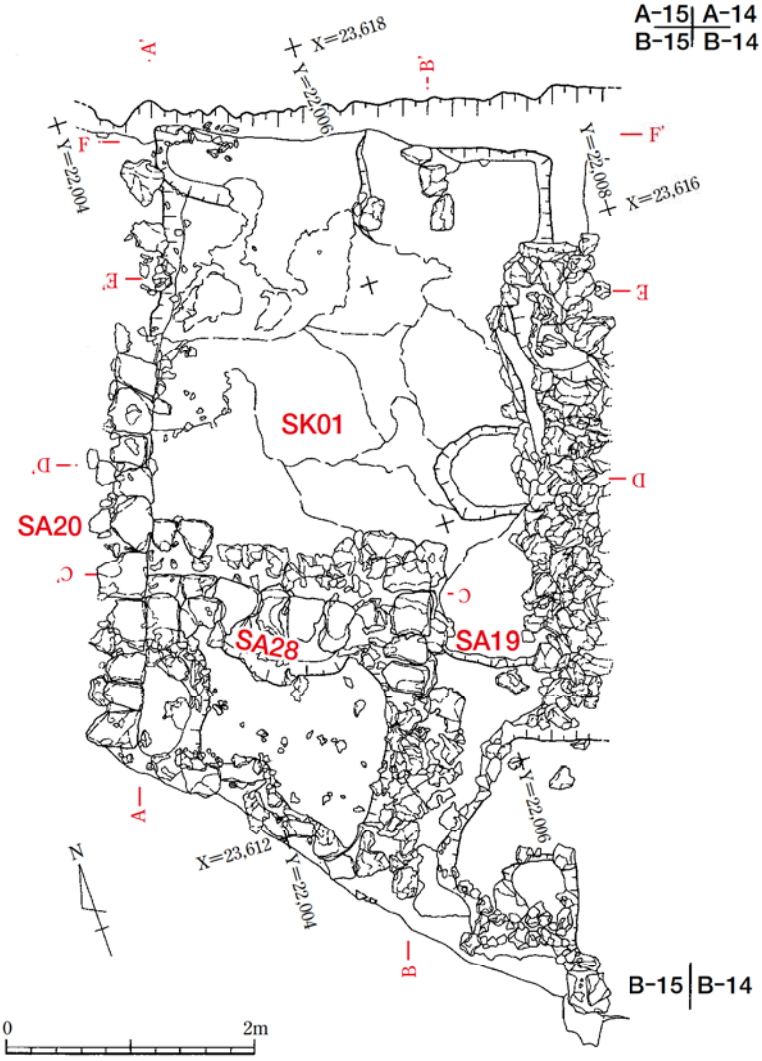
B-14・15 グリッドの層序　北壁

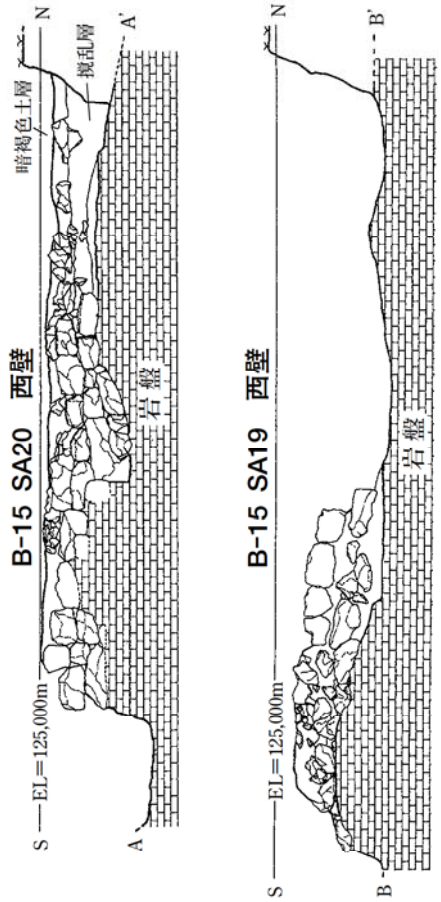
表土層・・・ 芝及び腐葉土
第1層・・・ 淡褐色混歴土層(客土)
第2層・・・ 暗褐色混歴土層(客土)
第3層・・・ 白色砂層(平成2年の客砂)
第4層・・・ 暗褐色土層
第5層・・・ 茶褐色混歴土層
第6層・・・ 暗褐色混歴土層(SA31の基礎土盤)
第7層・・・ 赤色土層(造成土)
第8層・・・ 黄褐色礫層(SA15の根石を安定させた土盤材および基礎土盤)
第9層・・・ 黒褐色土層(高麗瓦の破片を多く含む包含層)
第10層・・・ 暗褐色混礫土層(第2層より黒味を帯びた土層で本層をSK02と仮称)
第11層・・・ 暗褐色土層
第12層・・・ 赤褐色土層(地山)



B-15 SA28　南壁







第44図　B-15 土壙SK01(石積みSA19・20、SA28) 平面及び層序

図版 49　上：B-15 SK01 ほかを西側上空より望む
下：同上　SK01 を西側上空より望む

図版 50　上：B－15　SK01（発掘前の状況）　北より南側を望む
　　下：同上　SK01（発掘前の状況）　東より西側を望む

図版 51　上：B-15 SK01　西より東側を望む
　　下：同上　SK01　北より南側を望む

二．第Ⅳ期（15 世紀後半～ 16 世紀初頭）・（第 45 図）

Ⅳ期は石積みと建物に伴う遺構の二種類が存在するようである。石積みはＳＡ 04、ＳＡ 35（第 46 図・第 22 表。図版 52 ～ 54）、ＳＡ 05 －Ｂ（外面）・（内面）。ＳＡ 05 －Ｂ（外面：切り石積み。内面：野面積み。第 47 図・第 23 表。図版 55 ～ 57）、ＳＡ 07・ＳＡ 12（野面積み）、ＳＡ 11（第 48 図・第 24 表。図版 58 ～ 64）、ＳＡ 14（第 49 図・第 25 表。図版 65）、ＳＡ 27・ＳＡ 30（第 50 図・第 26 表。図版 66 ～ 68）の 10 基であり、ＳＡ 05 －Ｂ（内面）とＳＡ 12 を除いた８基は切り石積みであった。これらの石積みで両面（外面・内面）が確認されのは、ＳＡ 05 －Ｂ（外面）・（内面）とＳＡ 07・ＳＡ 12 の４基（内外面の２基で、一組の石積みが成立したと考えた場合。２基で一つの石積みとなる）が確認されている。その他、６基の石積みは片面のみ残存するものであった。

これらの石積みについて、方位軸で考えると東西方向に延びた石積みは５基〔ＳＡ 04、ＳＡ 05 －Ｂ（外面）・（内面）、ＳＡ 14、ＳＡ 27〕であった。その内のＳＡ 05 －Ｂ（外面）・（内面）を１基と数えると実質的に４基となる。

南北方向に延びる石積みについてはＳＡ 07・ＳＡ 12、ＳＡ 30 の３基が検出されている。その内、ＳＡ 07・ＳＡ 12 は２基で一つの石積みとなる事から実数は２基となる。

参考までに上記した石積みの中でＳＡ 14 は次の第Ⅴ期まで使用されている可能性が高い。

次に構築物の縁石や礎石を石敷きで回廊様に敷き並べて遺構がこの時期に２基存在（第 51 ～ 55 図・第 27・28 表。図版 69 ～ 73）し、遺構が重複（層位による新旧関係が確認された事から）して存在する。構築物に伴うこれらの遺構を便宜的に石敷きⅠ期とⅡ期の二時期（第 51 ～ 54 図・第 28 表）に分けた。石敷きⅠ期（第 52・53 図）の遺構はＳＳ 01・ＳＳ 03 －Ｂ、ＳＳ 02・ＳＳ 04 －Ａの４基であるが、後者のＳＳ 02・ＳＳ 04 －Ａは石敷きⅡ期（第 52・54 図）でも再度使用している。石敷きⅡ期（第 54 図）がＳＳ 02・ＳＳ 04 －Ａ、ＳＳ 04 －Ｂの３基である。

当該遺構の検出直後は、ＳＳ 04 －Ｂ（第 54 図）を石列ＳＲ 02 と考えＳＲ 02 は建物のコーナー部分の縁石と捉えて、石敷きは建物中央に敷かれている事などから屋根の在る渡り廊下などの施設（註 11・12）を考えていたが、今回の整理・検討の結果、石敷き遺構は独立した単体のものが重複し、二時期に分けられることが確認された。

当該石敷き遺構の用途は不明である。当該遺構の類似例の報告がないため判断に苦慮するところであるが、構築物の規模（第 28 表）などから推定すると南北軸の礎石間の距離が 65cm（石敷きⅠ期）と 95cm（石敷きⅡ期）と幅が狭い事などから礎石に梁や桁を通した盆栽棚（礎石を単独に使用する場合は盆栽台）。或いは、儀式や催事の際に使用する石火矢の発射台などを考えているところである。

なお、石敷き及び礎石の中には鑿痕や刻印（第 55・56 図）が施されているものがあった。石敷きの鑿痕は第 56 図１～３・５・６・８の６点、石敷きへの刻印が第 56 図４の１点。礎石への刻印は１点（第 56 図７・第 51 図）であった。

註および引用文献

註 11. 沖縄県文化財調査報告書第 132 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998 年３月。

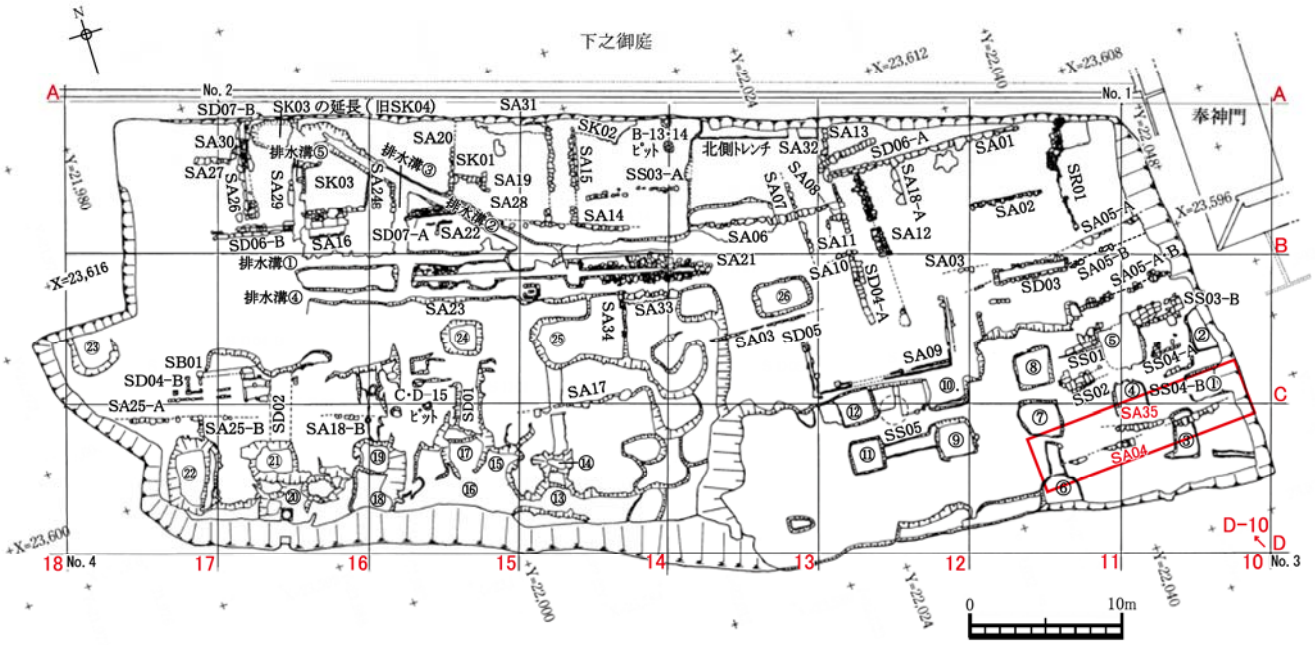
註 12. 伊從 勉（第四節 京の内・書院鎖之間の遺構）「第５章 遺構からみる古琉球の首里城」『沖縄県史』各論編 第三巻 古琉球 沖縄県教育委員会　2010 年２月。

第Ⅳ期（15 世紀後半～ 16 世紀初頭）
石積みSA04（外面）、SA05-B（内面・外面）、SA07（外面）・SA11・SA12（内面）、SA14、SA27（外面）、SA30（外面）
石敷きSS01（石敷きのみ）、SS02（石敷きと縁石）、SS03-B（石敷き、縁石、礎石）、SS04-A・B（石敷き、縁石）

第45図　京の内北地区第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）遺構の推定復元

庭
SA11
SA12
（内面）
SA07
（外面）
SA05-B（外面）
SA05-B（内面）
SS01
SS02
SS03-B
SS04-A
SS04-B
SA35（外面）
SA04（外面）
奉神門
A-14
A-13
A-12
A-11
B-10
C-10
D-14
D-13
D-12
D-11
Y=22,008
Y=22,012
Y=22,016
Y=22,020
Y=22,024
Y=22,028
Y=22,032
Y=22,036
Y=22,040
Y=22,044
Y=22,048
、SA35（外面）
0
5
10m

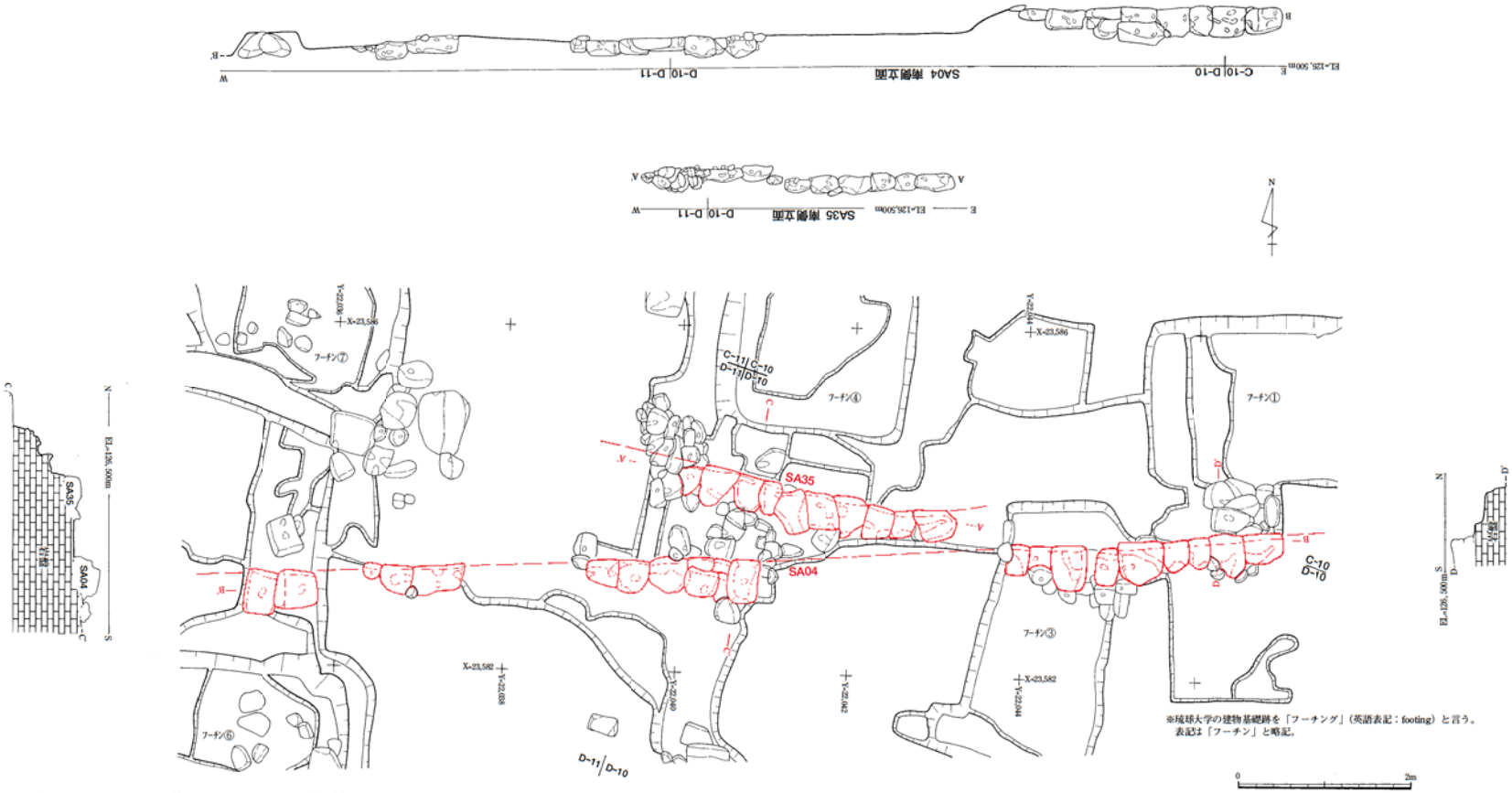
Ⅳ期



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 22 表　第Ⅳ期　SA04、SA35　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D－10、 D－11 SA04 第45・46図	18m55cm 85cm 30cm	東西方向に途切れながら残存する琉球王国時代の区画石積み。造成土の上から石積みを設置。比較的小振りの切り石を用いる。布積み崩れ。15C末～。	N93°　30′　W	切り石積み 81°	25～56cm 12～18cm 30～52cm	一番石は78°の勾配。SA35の上位にSA04が存在する。SS01～SS03－B、SS04－A・B、とほぼ平行関係に在る石積みで、時期も近く、時間差があまりない同時期のものとみられる。
D－10・11 SA35 第45・46図	3m63cm 44cm 14cm	東西方向に存在した区画石積み。造成土の上から小振りの切り石を設置。15C末～。	N77°　10′　W	切り石積み 88°	19～44cm 14～18cm 15～50cm	当該石積み（SA35）の下位にSA04の区画石積みが存在する。周辺の他の遺構（SA04、SS01～SS03－B、SS04－A・B）と主軸方向が異なっている。

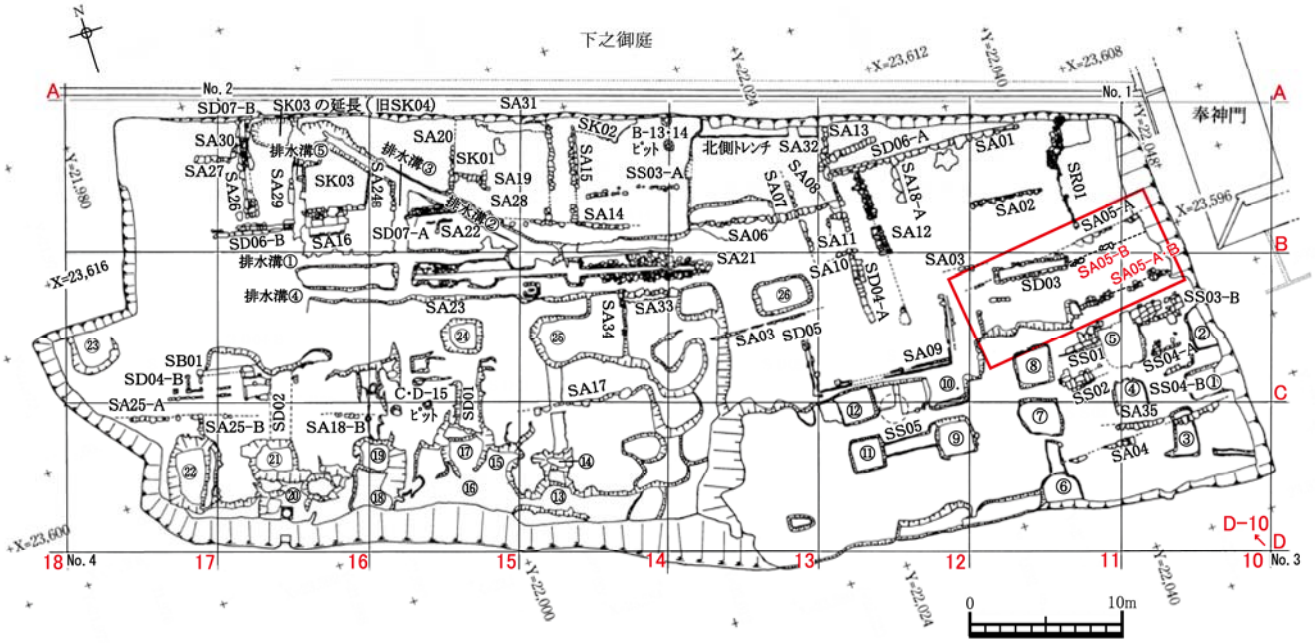


第46図　C・D-10、D-11 石積みSA04・SA35　平面及び立面

図版 52　C･D－10、D－11 SA04、SA35 を西側上空より望む

図版 53　上：C･D-10、D-11　SA04、SA35　西より東側を望む
　　下：　　同上　　SA04、SA35　南壁(北より)

図版 54　上：C･D－10、D－11　SA04、SA35　東より西側を望む
　　下：　　同上　　SA04、SA35　南より北側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 23 表　第Ⅳ期　SA05-B　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B・C－10・11 SA05-B （外面） 第45・47図	3m16cm 44cm 25cm前後	第Ⅱ期のSA05－A（第30図）の外面から内側に向かって1m前後の箇所から遺構検討の際に新たに確認された琉球王国時代の区画石積み。東西方向に延びるが第Ⅵ期のSD03（第79・80図）を構築した際に石積みの大半が除去されたものとみられる。	N86°　30′　E	切り石積み。 — —	14～48cm — 14～44cm	第Ⅱ期のSA05－A（第30図）、第Ⅳ期SS01～SS03－B、SS04－A・B（第51～54図）、第Ⅵ期のSD03（第79・80図）。
B・C－10・11 SA05-B （内面） 第45・47図	6m40cm 二列一組 石積み （最小35cm ～最大76cm） 1m	第Ⅱ期のSA05－A（第30図）の外面から内側に向かって4m前後の位置から検出され二列一組の石積みで、東西方向に延びる。石積みは削平された岩盤の上から野面石を積み上げている。石積みは南側に傾斜した状態で検出されている。第Ⅱ期のSA05－Aの内面石積みであると同時に当該Ⅳ期の時期にも利用された。遺構検討の際に新たに確認された上記、区画石積みの内面を有無確認で周辺遺構や岩盤の高さなどを検討した結果、第Ⅱ期のSA05－A（内面）を再度利用しているものと判断した。	N85°　45′　E	野面石積み。 二列配置。 64°	14～40cm 18～26cm 20～44cm	第Ⅱ期のSA05－A（第30図）、第Ⅳ期SS01～SS03－B、SS04－A・B（第51～54図）、第Ⅵ期のSD03（第79・80図）。

B・C-10　SA05-A・B(外面) トレンチ内層序

第1層…淡褐色混礫土層
第2層…黒褐色土層(炭を多く含む)
第3層…暗褐色混礫土層(炭を僅かに含む)
第4層…橙褐色土層
第5層…灰褐色土層

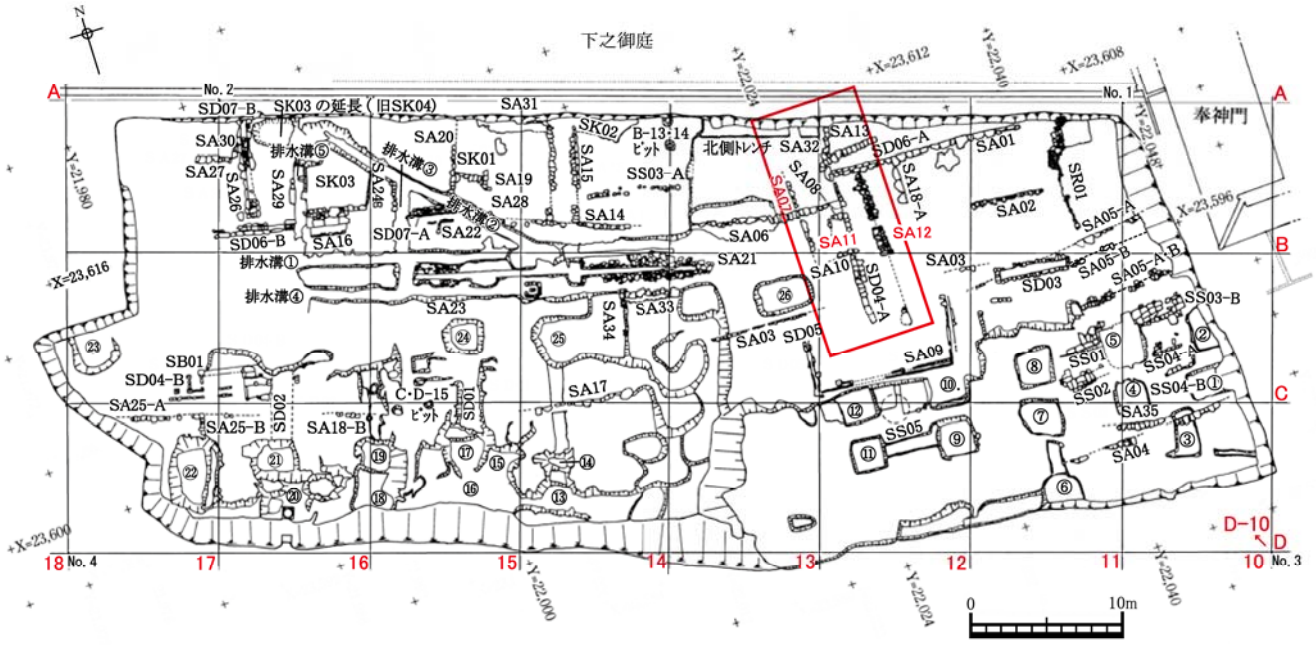
造成土1…茶褐色混礫土層。「造1」で表記。
造成土2…淡褐色混礫土層。SA05(外面) トレンチの第1層と同一層。「造2」で表記。
造成土3…灰褐色混礫土層。「造3」で表記。
造成土4…明褐色混土礫層。「造4」で表記。

第47図　B・C-10・11 石積みSA05-B(外面)・SA05-A・B(内面)　平面及び層序

図版 55　上：B･C－10･11　SA05－B ほかを南側上空より望む
　　下：　　同上　　SA05－B　南より北側を望む

図版 56　上：B･C－10･11　SA05－B　西より東側を望む
　　下：　同上　　SA05－B　北より南側を望む

図版 57　上：B･C－10･11　SA05－B　北より南側を望む
　　下：　　同上　　SA05－B　東より西側を望む

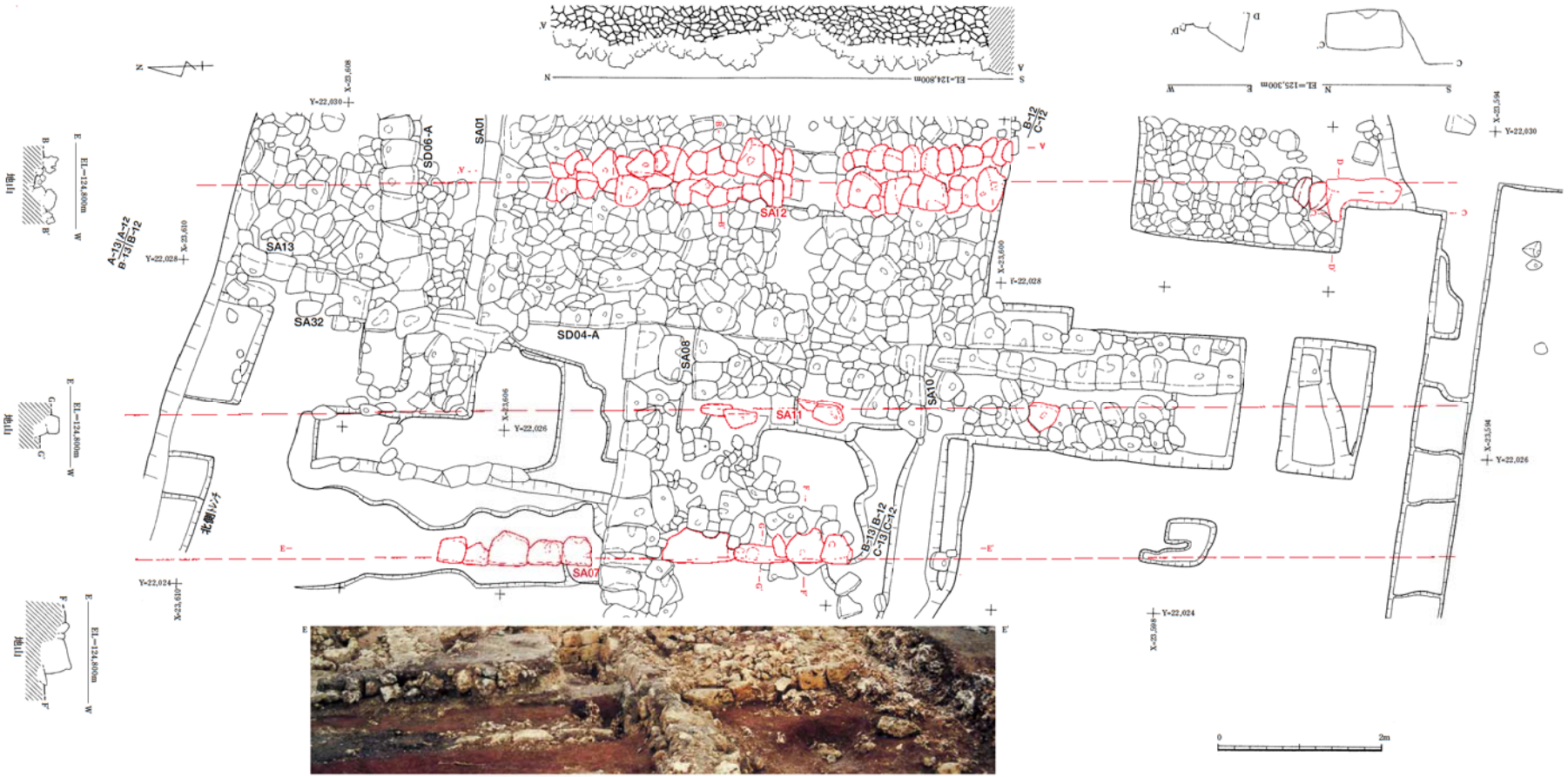


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 24 表　第Ⅳ期　SA07、SA11、SA12　遺構観察表

Ⅳ期

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－13 SA07 第45・48図	4m90cm 70cm 52cm	主軸は南北方向に延びるが両端を欠落した琉球王国時代の区画石積みで当該遺構が外面とするSA12が内面となる。大部分は地山の赤土を掘り込んでから地山面から石積みをおこなっている。南側のみ岩盤直上から石積みをおこなっている。15C末。	N2°　00′　W	切り石積み 76°　・89°	29～79cm 14～42cm 24～40cm	SA12が区画石積みの内面でSA07が外面である。
B・C－12 SA11 第45・48図	70cm 25cm －	琉球王国時代後半頃の南北に延びていた区画石積みの一部で上記のSA13と主軸方向が一致しているが、石積み面（内面）がSA13と背中合わせで反対であることから相関（セット）関係にあった外面の石積みは、既に消失している。岩盤と土盤の上に切り石を設置。根石のみ検出されている。16C～。	N12°　30′　W	切り石積み 80°	36～41cm 59cm 18～24cm	第Ⅱ期のSA01（第25図）の西端に南北方向に設置された第Ⅲ期の大型の切り石（SA18－A：第41図）と第Ⅴ期のSA13（第58・60図）の主軸方向が同一方向であることから南北に延びた区画石積みの内面とみられる。当該以降と平行するとみられる外面の石積みは既に破壊されていた。
B－12 SA12 第45・48図	10m70cm 44～72cm －	主軸が南北方向に延びる二列に配置された野面石積みを主体とする。北端は第Ⅱ期のSA01（第25図）の縁石を利用。南端で唯一の切り石（幅92cm×控え長45cm×厚さ48cm）が残存する。SA01の栗石直上に野面石積みを二列に設置。15C末。	N1°　45′　W	野面と切り石を併用。	16～36cm 9～18cm 30～44cm	SA07と平行する区画石積み。SA07が外面でSA12が内面である。両者の幅は465cm（SA07：外面の復元ラインからSA12：内面の二列配置の中央にある復元ラインまでの直線距離）が推定される。



第48図　B・C-12・13 石積みSA07・SA11・SA12　平面及び立面・断面

図版 58　上：B･C－12･13 SA07、SA11、SA12　西より東側を望む
　　下：B－13 SA07　南より北側を望む

図版 59　上：B-13 SA07　東壁ほかを西より望む
　　下：同上　SA07　東壁ほかを西より望む

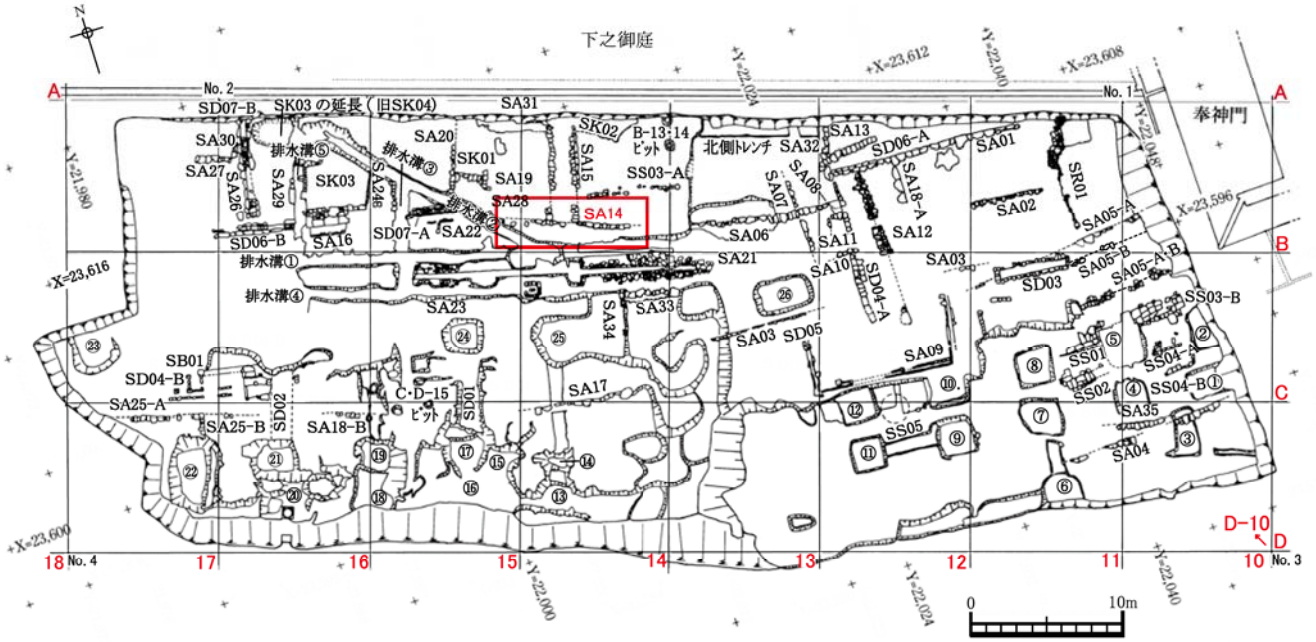
図版 60　上：B－13 SA07　北より南側を望む
　　下：同上　SA07ほかを東より西側を望む

図版 61　上：B－13 SA07 ほかを南より北側を望む
　　下：B･C－12 SA11　東壁ほかを西より望む

図版 62　上：B･C－12 SA11　西より東側を望む
　　下：　同上　　SA11　東より西側を望む

図版 63　上：B･C－12 SA11　東より西側を望む
　　下：　同上　SA11ほかを北より南側を望む

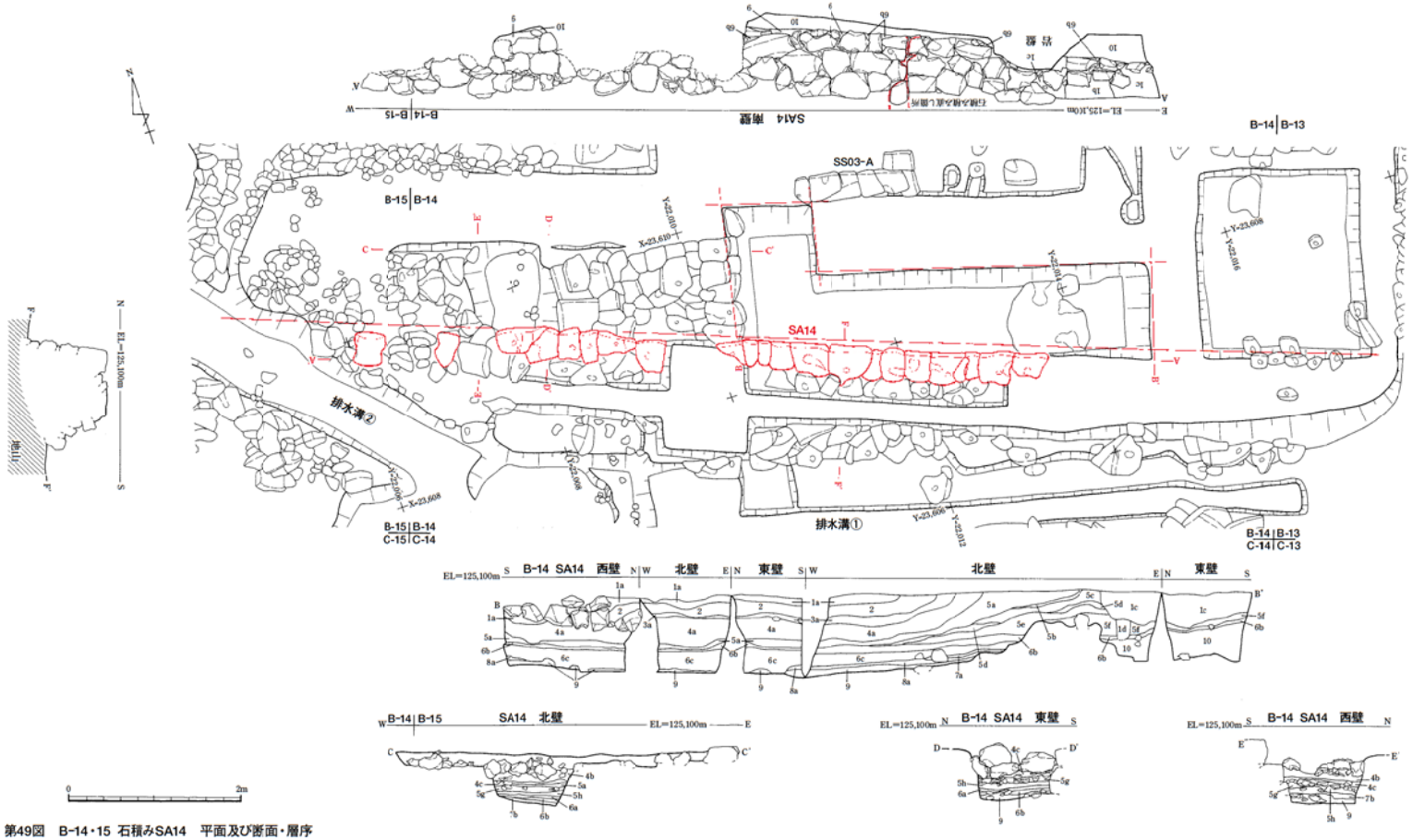
図版 64　上：B-12 SA12　北より南側を望む
　　下：同上　SA12　南より北側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 25 表　第Ⅳ期　SA14　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－14・15 SA14 第45・49・61～63図	8m50cm 1m35cm －	東西方向に直線的に延びる琉球王国時代の区画石積みで両端が欠落する。東側は一部岩盤を利用するが大半は造成土の上から石積みをおこなう。粗加工の切り石を 相方積みで石積みをおこなっている。当該石積みは第Ⅴ期まで利用されているようである。15C末～。	N68°　45′　W	切り石積み 78°	14～60cm 20～34cm 30～45cm	一番石は勾配76°で、二番石の勾配が80°であった。第Ⅴ期のSA06（第58・59図）とは直接は繋がらないが一連の石積みとみられる。その他、第Ⅴ期のSA15（第61図）の石積みがすり付けられている。

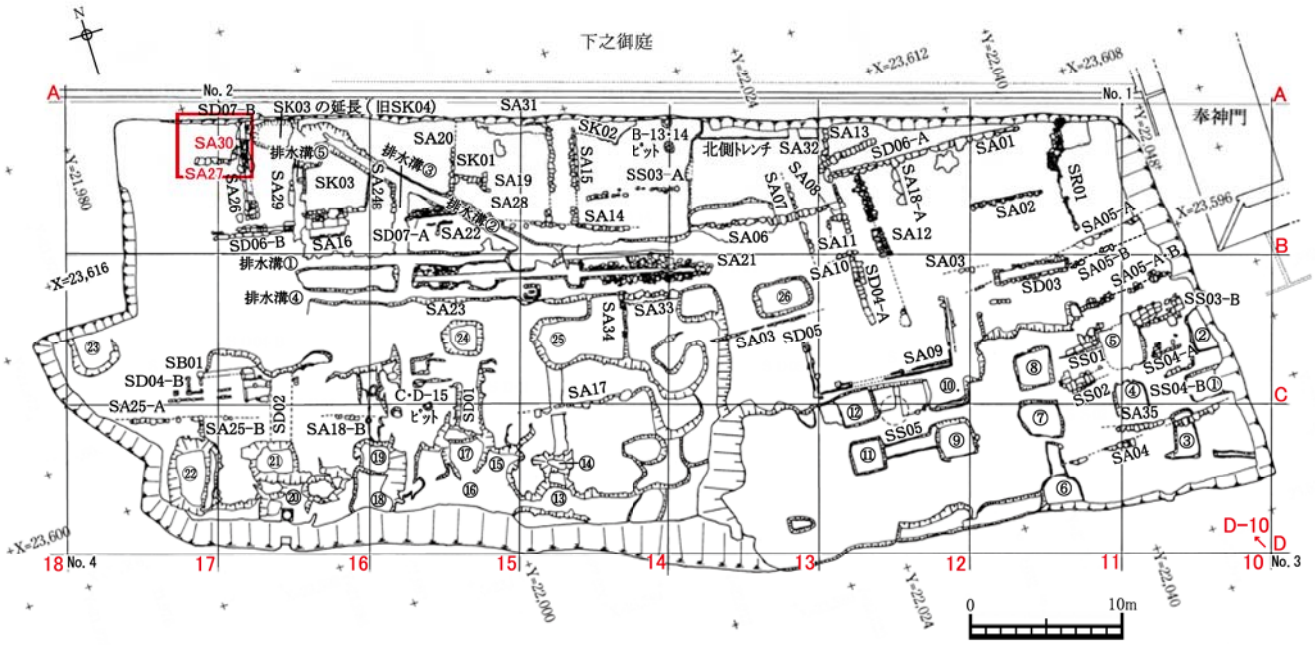


第49図　B-14・15 石積みSA14　平面及び断面・層序

B-14・15 SA14 東側トレンチ内　層序

第1層a… 淡褐色土層①（東側トレンチ内に堆積。東側トレンチ旧1層。）
第1層b… 茶褐色土層（撹乱層。地山の赤土と同一とみられ東側トレンチの南壁にのみ僅かに堆積する。東側トレンチ旧1層。）
第1層c… 淡褐色土層②（撹乱層。東側トレンチの北壁東隅から東壁に堆積。東側トレンチ旧1層。）
第1層d… 淡褐色礫層（東側トレン北壁の東側でピット状に堆積。）
第2層… 淡褐色混礫土層（西側トレンチでは層が欠落し、東側トレンチ内に堆積し、SA15東側トレンチ内まで広がる。東側トレンチ旧2層。）
第3層a… 暗褐色土層（西側トレンチには堆積がない。東側トレンチ内に堆積し、SA15東側トレンチ内まで広がる。東側トレンチ旧3層。）
第4層a… 淡褐色混礫土層（西側トレンチを除いて東側トレンチ内に堆積し、SA15東側トレンチ内にも広がる。東側トレンチ旧4層。）
第4層b… 灰褐色混礫土層（西側トレンチの西壁と北側にのみ堆積がみられる。西側トレンチ旧1層。）
第4層c… 淡灰色混砂礫層（西側トレンチのみ堆積がみられる。西側トレンチ旧2層。）
第5層a… 明灰色土層（東西トレンチ及びSA15トレンチ内で普遍的に堆積する。高麗系の灰色瓦片が混入。東側トレンチ旧5層。）
第5層b… 黒褐色炭層①（東側トレンチの北壁で堆積がみられる。東側トレンチ旧間層。）
第5層c… 淡灰色土層（東側トレンチの北壁で確認される。シルト質泥岩の風化土の俗称クチャが間層として堆積。東側トレンチ旧間層。）
第5層d… 黒褐色炭層②（東側トレンチの北壁で途切れながら堆積する。東側トレンチ旧間層。）
第5層e… 明茶色土層（東側トレンチの北壁で堆積がみられ、地山の赤土。東側トレンチ旧間層。）
第5層f… 明茶色混礫土層（東側トレンチの北東隅に堆積。東側トレンチ旧6層相当層。）
第5層g… 淡黄白色礫層①（西側トレンチのみに堆積。西側トレンチ旧4層。）
第5層h… 灰黒色土層（西側トレンチ内で堆積が認められ、灰色瓦片が混入する。西側トレンチ旧5層。）
第6層a… 淡黄白色礫層②（東側トレンチでは堆積が認められない。西側トレンチSA15東側トレンチで堆積がみられる。西側トレンチ旧6層。）
第6層b… 黒褐色土層（東西トレンチ及びSA15トレンチ内で普遍的に堆積する。東側トレンチ旧6層。西側トレンチ旧7層。）
第6層c… 黄褐色混礫土層（東側トレンチ内で20cm前後と厚く堆積する。東側トレンチ旧7層。）
第7層a… 黒色土層（SA15東側トレンチの第9層と同一層とみられるが、北壁で僅かに堆積する。東側トレンチ旧8層。）
第7層b… 淡黄色混土砂層（西側トレンチ内で堆積が確認される。西側トレンチ旧8層。）
第8層a… 茶褐色土層（西側トレンチでは確認されていない。主に東側トレンチの北壁でみられる。東側トレンチ旧9層。）
第9層… 赤褐色土層②（地山。西側トレンチの西壁部分を除いて炭が混入する。東側トレンチ旧10層。西側トレンチ旧8・9層。）
第10層… 黄褐色混土礫層（岩盤の石灰岩が風化により軟質化した土流じりの礫層。東側トレンチ旧11層。）

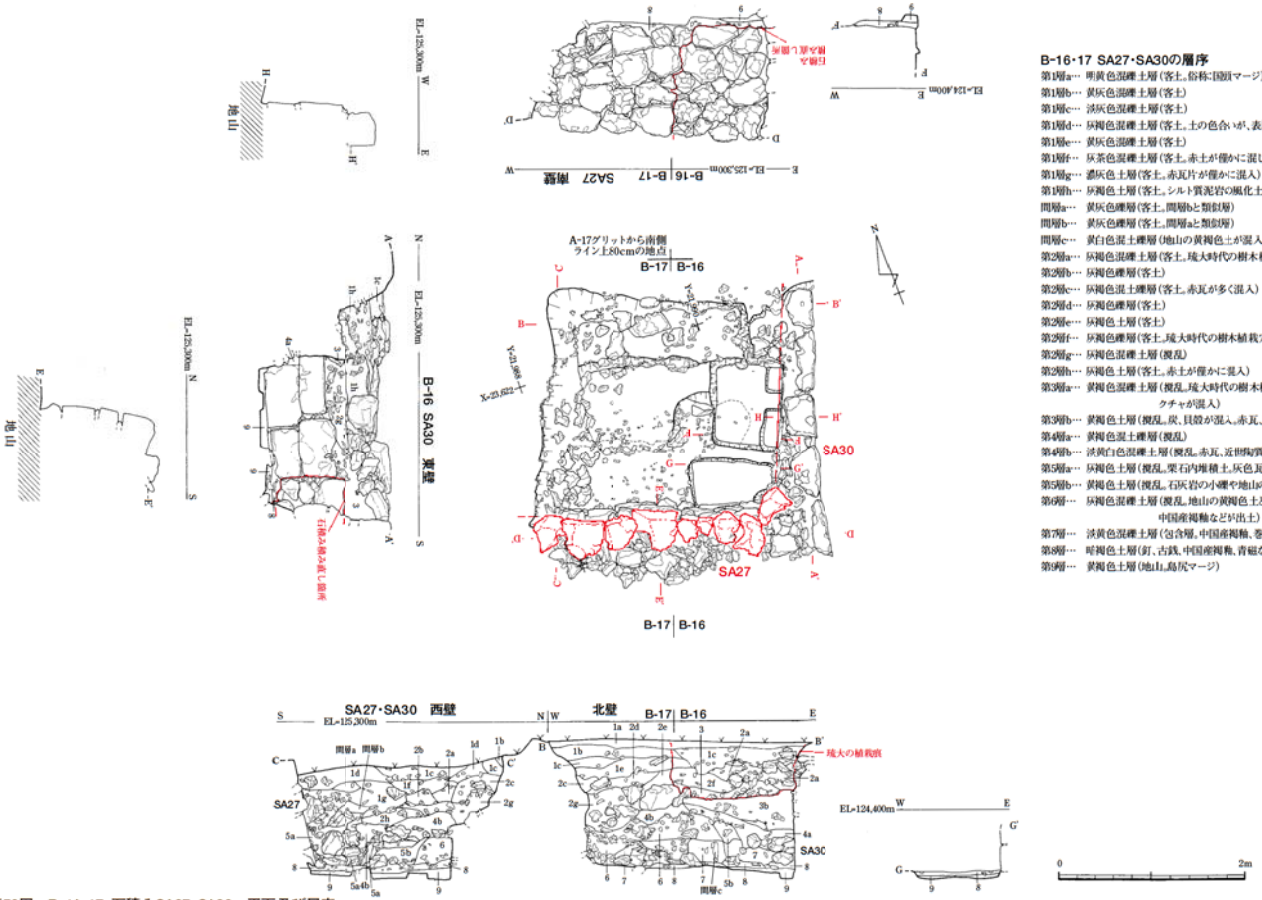
図版65　上段左：B－14・15　SA14ほかを南側上空より望む、上段右：B－14・15 SA14　東壁（西より）
中段　：　同上　SA14　南壁・西壁（北より）、　下段　：　同上　SA14　北壁（南より）



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 26 表　第Ⅳ期　SA27、SA30　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－16・17 SA27 第45・50図	2m40cm 39cm 1m29cm	東西方向に延びる石積みでSA30にすり付けられている。造成土の上から石積み。粗雑に加工された切り石を相方様の石積みをおこなう。15C末～。	N69°30′W	粗加工の切り石。 74°	16～49cm 14～40cm 20～34cm	SA27よりも若干古く、切り石積みである。SA30と直交する形ですり付けられている。一番石から三番石までの勾配は76°であった。
B－16 SA30 第45・50図	1m69cm 未検出 86cm	下之御庭（南北）方向に延びる石積み。地山を掘り込んで造成土を投入して土盤を安定させた後で石積みを行う。丁寧に加工された切り石で布積みする。15C末～19C初頭まで継続か。	N33°25′E	切り石積み 89°	29～66cm 18～39cm 未検出	一番石の勾配は93°で、SA27の石積みがすり付いている。SA30は古絵図などからその延長線上に系図座・用物座が存在することから系図座・用持座の石積みの一部である可能性もあるが判然としない。



B-16・17 SA27・SA30の層序

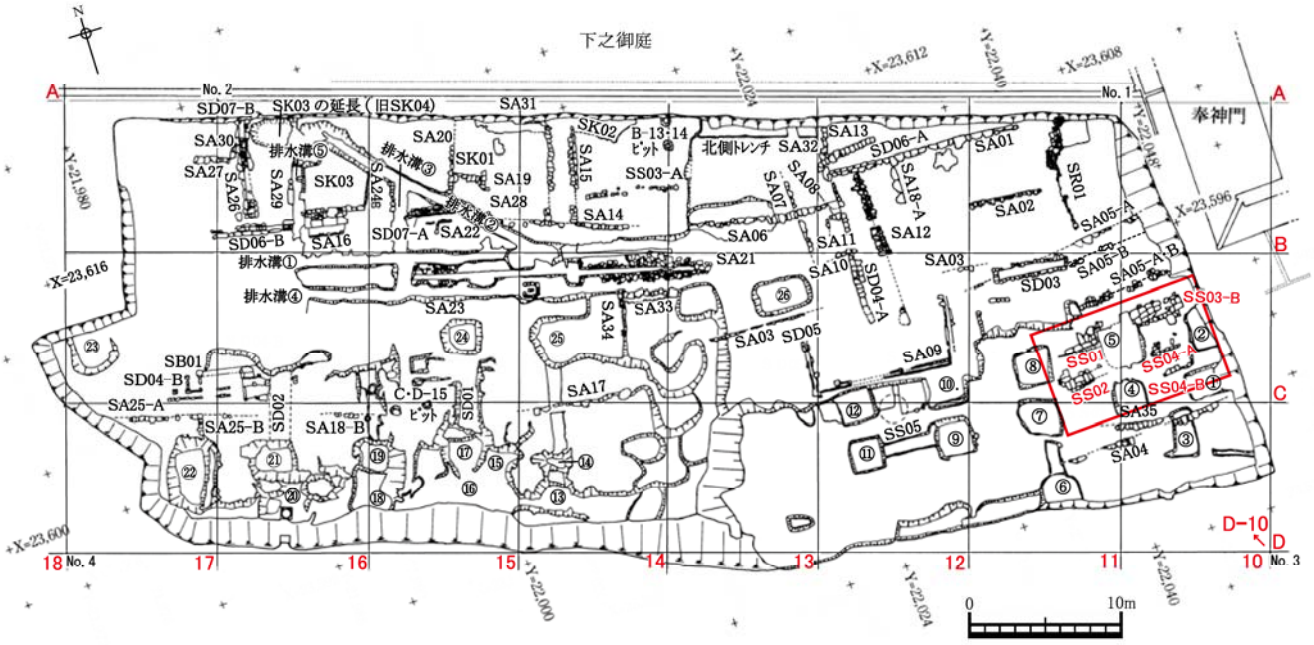
第1層a… 明黄色混礫土層（客土。俗称：国頭マージ）
第1層b… 黄灰色混礫土層（客土）
第1層c… 淡灰色混礫土層（客土）
第1層d… 灰褐色混礫土層（客土。土の色合いが、表層のa～cよりも若干、濃い色合いとなっている）
第1層e… 黄灰色混礫土層（客土）
第1層f… 灰茶色混礫土層（客土。赤土が僅かに混じる）
第1層g… 濃灰色土層（客土。赤瓦片が僅かに混入）
第1層h… 灰褐色土層（客土。シルト質泥岩の風化土で俗称クチャの単一層）
間層a… 黄灰色礫層（客土。間層bと類似層）
間層b… 黄灰色礫層（客土。間層aと類似層）
間層c… 黄白色混土礫層（地山の黄褐色土が混入）
第2層a… 灰褐色混礫土層（客土。琉大時代の樹木植栽穴内の堆積土）
第2層b… 灰褐色礫層（客土）
第2層c… 灰褐色混土礫層（客土。赤瓦が多く混入）
第2層d… 灰褐色礫層（客土）
第2層e… 灰褐色土層（客土）
第2層f… 灰褐色礫層（客土。琉大時代の樹木植栽穴内の堆積土）
第2層g… 灰褐色混礫土層（攪乱）
第2層h… 灰褐色土層（客土。赤土が僅かに混入）
第3層a… 黄褐色混礫土層（攪乱。琉大時代の樹木植栽穴の堆積土。シルト質泥岩の風化土で俗称クチャが混入）
第3層b… 黄褐色土層（攪乱。炭、貝殻が混入。赤瓦、染付、白磁外反碗などが出土）
第4層a… 黄褐色混土礫層（攪乱）
第4層b… 淡黄白色混礫土層（攪乱。赤瓦、近世陶質土器、ビロースクタイプ碗Ⅱ、砲弾破片などが出土）
第5層a… 灰褐色土層（攪乱。栗石内堆積土。灰色瓦、タイ産褐釉、染付、青磁、角釘などが出土）
第5層b… 黄褐色土層（攪乱。石灰岩の小礫や地山の黄褐色土が部分的に混入）
第6層… 灰褐色混礫土層（攪乱。地山の黄褐色土と俗称クチャが混入。他に炭も混入。白磁外反碗、中国産褐釉などが出土）
第7層… 淡黄色混礫土層（包含層。中国産褐釉、巻貝などが出土）
第8層… 暗褐色土層（釘、古銭、中国産褐釉、青磁などが出土）
第9層… 黄褐色土層（地山。島尻マージ）

第50図　B-16・17 石積みSA27・SA30　平面及び層序

図版 66　上：B－16・17　SA27、SA30を西側上空より望む
　　下：　同上　　SA27、SA30　西より東側を望む

図版 67　上：B－16 SA30　東壁ほかを西より望む
　　下：B－16･17 SA27　南壁ほかを北より望む

図版 68　上：B－16・17　SA27、SA30　西壁（東より）
　　下：　同上　　SA27、SA30　北壁（南より）

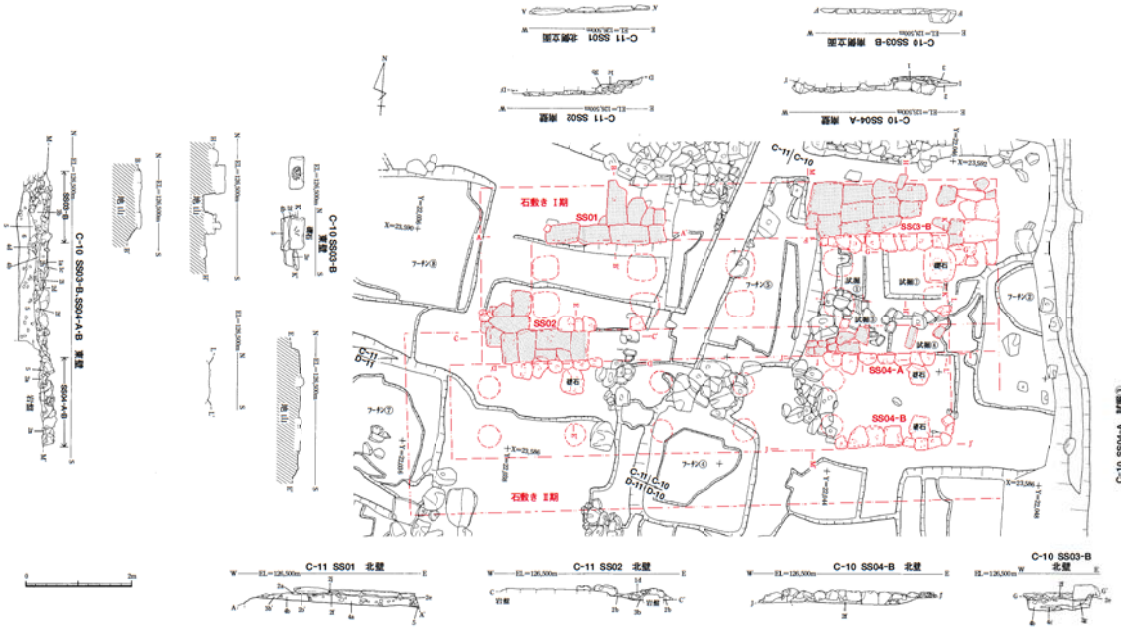


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 27 表　第Ⅳ期　SS01、SS02、SS03－B、SS04－A、SS04－B　遺構観察表

Ⅳ期

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
C－11 SS01 第45・51～53図	2m28cm 1m20cm —	使途不明の構築物の周辺に敷かれた敷石遺構。遺構の切り合い関係から当該遺構を石敷きⅠ期とした。造成土の上から長方形状に加工した細粒砂岩（俗称：ニービの骨）製の敷石を配置する。敷石は9枚が残存する。細粒砂岩を板状に鑿で仕上げている。南側は石灰岩製の縁石があり欠落している。15C末～18C。	N96° 00′ W	細粒砂岩製の敷石。 —	19～48cm 未検出 29～84cm	SS03－B、SS02、SS04－A（第53図）は一連の遺構である。特にSS03－Bは当該遺構の延長線上にあり軸方向が一致する。
C－11 SS02 第45・51～54図	2m87cm 57cm —	使途不明の構築物の周辺に敷かれた敷石遺構。遺構の切り合い関係から当該遺構は二時期にまたがって利用されている。石敷きは造成土の上から配置される。敷石の素材は細粒砂岩製で板石（長方形状）に加工したものを敷き並べている。12枚の板石が残存し、北側（4個）と南側（7個）には石灰岩製の縁石が残っている。15C末～18C。	N96° 00′ W	細粒砂岩製の敷石。 —	25～35cm 7cm 47～65cm	SS01、SS03－B、SS04－Aは一連の遺構である。特にSS04－A（第54図）と繋がる遺構で主軸方向が一致し、当該遺構と共に石敷きⅡ期まで再使用がなされている。
C－10 SS03-B 第45・51～53図	3m62cm 98cm —	琉球王国時代の使途不明の構築物に伴う敷石遺構。遺構の切り合い関係から石敷きⅠ期に含まれる。当該遺構も造成土盤の上から長方形状に加工した細粒砂岩製の板石を敷く。板石は24枚が残っている。東南隅で縁石に沿うように南側へ折れている。石灰岩製の縁石（10個）と建物の礎石は南側に存在する。縁石の東端よりに礎石（縦62cm、横51cm。第51・56図のような刻印が存在する）が位置する。15C末～18C。	N96° 00′ W	細粒砂岩製の敷石。 —	21～61cm 14cm 23～62cm	SS01、SS02、SS04－Aは一連の遺構。SS03－Bの造成土の直下にSA05－A・Bの内面（第47図）の基礎となる野面石積み及び裏込目石が存在する。
C－10 SS04-A 第45・51～54図	1m15cm 50cm —	琉球王国時代の使途不明の構築物に伴う敷石遺構。石敷きⅡ期に含まれ、石敷きの再利用がなされている。造成土の上に長方形状の板石を敷く。敷石は細粒砂岩（ニービの骨）製で、鑿で仕上げている。敷石は4枚程度が残っているが割れを数えると9個となる。石灰岩製の縁石が敷石の南縁に沿うように7個残存している。15C末～18C。	N96° 00′ W	細粒砂岩製の敷石。 —	19～25cm 未計測 33～44cm	SS02、SS04－Bとは一連の遺構である。SS02と主軸方向が一致している。
C－10 SS04-B 第45・51～54図	2m13cm 39cm —	琉球王国時代の使途不明の構築物に伴う縁石遺構。石敷きⅡ期の遺構で縁石のみが残存する。その平面観は「J」の字状で、東西方向に長く、南北に短い。造成土および岩盤の直上からやや雑に成形された切り石を配置する。15C末～18C。	N93° 45′ W	切り石積み。 —	20～36cm 17～25cm 17～40cm	SS02、SS04－Aと関係する一連の遺構。



第51図　C-10・11 石敷きSS01・02, SS03-B、SS04-A・B　平面及び断面・層序

C-10 SS03-B・SS04-A（フーチ⑤内）の層序　東壁

第1層a・・・ 黄白色礫層（現代の造成コーラル。）
第1層c・・・ 茶褐色混礫土層（SS03-B・SS04-Aの間を整地する際に投入された造成土。）
第2層a・・・ 暗褐色混礫土層（SS04-A及び付属敷石の直下、SS04-A・Bの直下に堆積した造成土。）
第2層c・・・ 黄褐色混土礫層（SS04-Aに付属する敷石直下の造成土。）
第2層d・・・ 明褐色混礫土層（SS03-BからSS04-Aの間を整地する際に投入された造成土で、局所的に堆積。）
第2層f・・・ 灰褐色混礫土層（SS03-Bの排水溝縁石を安定させる際に使用された造成であるが、南側では末乱を受けてガラス片などが混入する。）
第2層h・・・ 濃茶色混礫土層（SS03-B・SS04-Aの間に投入され整地用の土砂で局所的に堆積。）
第2層i・・・ 濃茶色土層　（　　〃　　）
第3層b・・・ 褐色混土礫層（SS03-Bの縁石及び敷石直下の造成土で小礫を多く含む。）
第4層b・・・ 淡褐色混礫土層（SS03-BからSS04-Aの間に投入された造成土。）
第4層c・・・　〃　（　　〃　　、小礫が多く混入する。）
第4層d・・・　〃　（SS03-Bの縁石直下の造成土で巻大の礫が多く混入する。）
第5層・・・ 赤褐色混礫土層（SS03-B構築の際に多量に投入された造成土で、地業の基礎となる土盤。）
第6層・・・ 暗褐色混礫土層（SS03-B構築の際に投入された造成土、地業の基礎となる土盤。）

※琉球大学の建物基礎跡を「フーチング」（英語表記：footing）と言う。
表記は「フーチン」と略記。

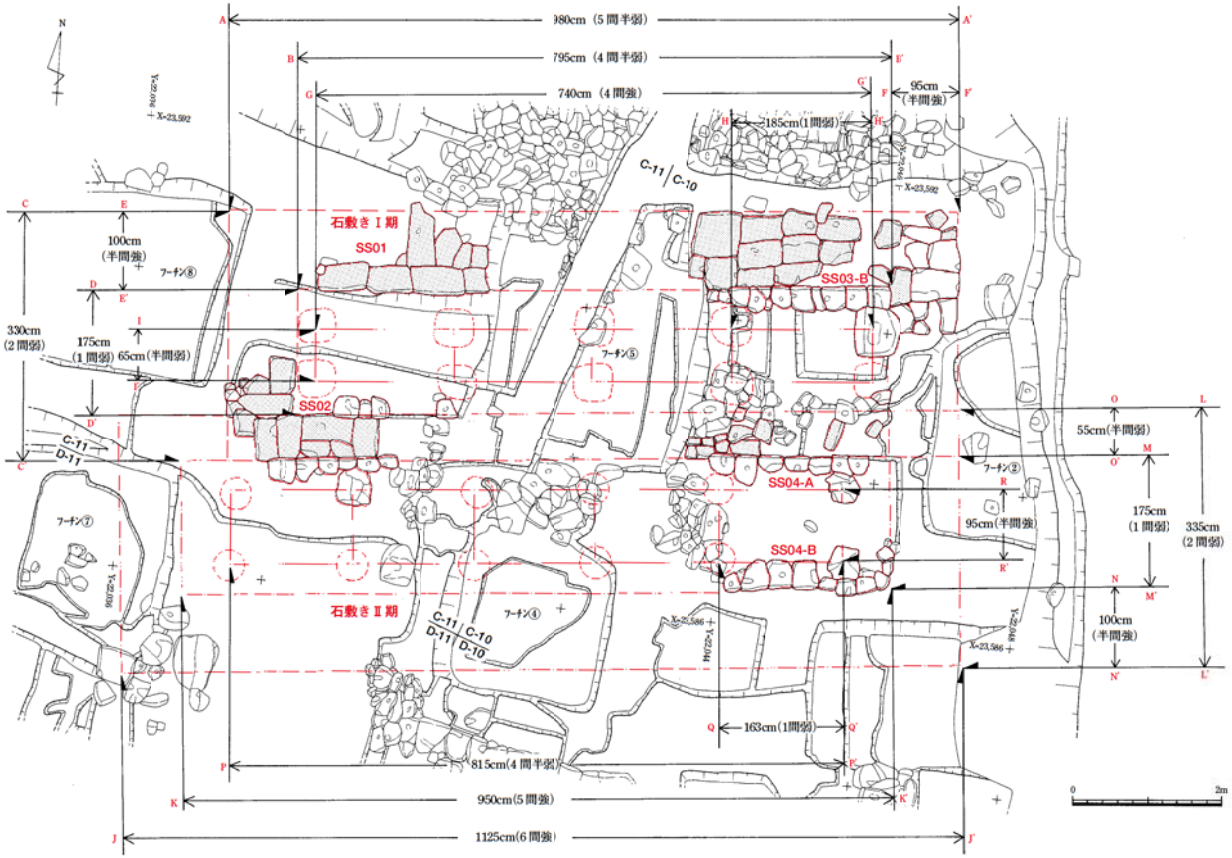
凡例

砂粒砂岩（谷称：ニービ）製石敷き

：石敷き Ⅰ期

：石敷き Ⅱ期

：推定された礫石の位置



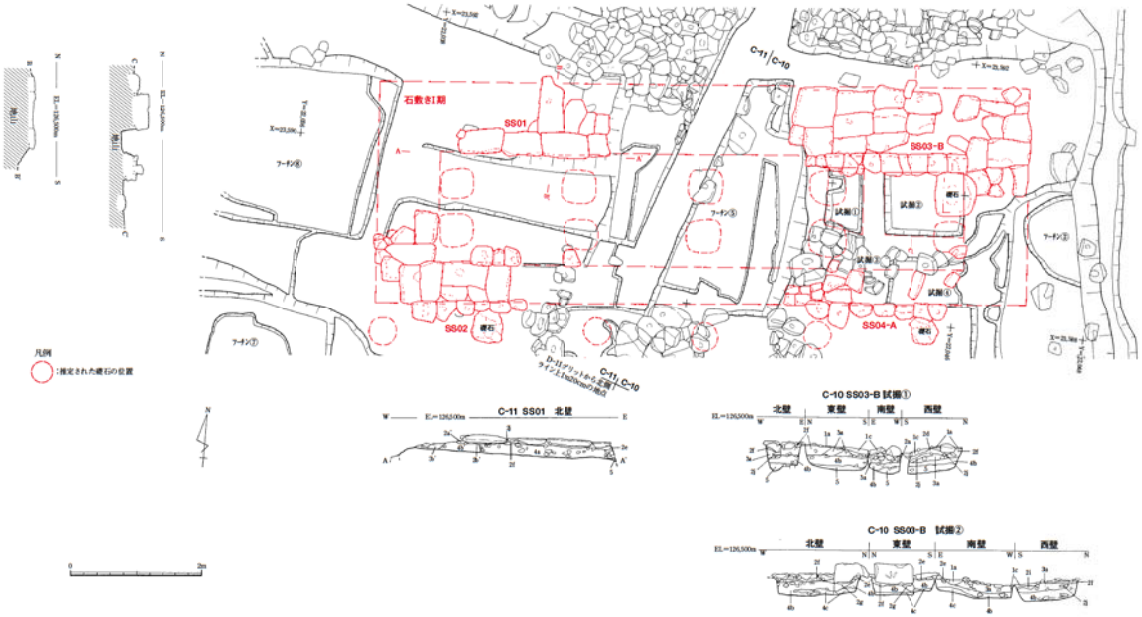
第52図　C-10・11 石敷きⅠ期（SS01・02、SS03-B、SS04-A）・Ⅱ期（SS02・SS04-A・B）の推定復元

第28表　C・D-10・11　石敷きⅠ期（SS01・02、SS03-B・SS04-A）・Ⅱ期（SS02・SS04-A・B）の規模比較

Ⅰ期（SS01・02、SS03-B・SS04-A）							
計測ヶ所			①サイズ（cm）	間数（1間=181.8cm）	②明代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	①・②の差（cm）	
回廊外側	長軸	外側（A・A'）	980	5間半弱	31.5尺＝979.6cm	0.4	
		内側（B・B'）	795	4間半弱	25.5尺＝793.0cm	2	
	短軸	外側（C・C'）	330	2間弱	10.6尺＝329.6cm	0.4	
		内側（D・D'）	175	1間弱	5.6尺＝174.1cm	0.9	
	石敷き	長軸（E・E'）	100	半間強	3.2尺＝99.5cm	0.5	
		短軸（F・F'）	95	半間強	3尺＝93.3cm	1.7	
回廊内側	長軸（B・B'）		795	4間半弱	25.5尺＝793.0cm	2	
	短軸（D・D'）		175	1間弱	5.6尺＝174.1cm	0.9	
	礎石間	長軸（G・G'）	740	4間強	23.8尺＝740.1cm	0.1	
		礎石間（H・H'）	185	1間強	6尺＝186.6cm	1.6	
		短軸（I・I'）	65	半間強	2.1尺＝65.3cm	0.3	
Ⅱ期（SS02・SS04-A・B）							Ⅰ・Ⅱ期の比較
計測ヶ所			③サイズ（cm）	間数（1間=181.8cm）	④明代(14～17世紀) 1尺=31.1cm	③・④の差（cm）	①・③の差（cm）
回廊外側	長軸	外側（J・J'）	1125	6間強	36.2尺＝1125.8cm	0.8	145
		内側（K・K'）	950	5間強	30.5尺＝948.5cm	1.5	155
	短軸	外側（L・L'）	335	2間弱	10.8尺＝335.8cm	0.8	5
		内側（M・M'）	175	1間弱	5.6尺＝174.1cm	0.9	0
	石敷き	長軸（N・N'）	100	半間強	3.2尺＝99.5cm	0.5	0
		短軸（O・O'）	55	半間弱	1.8尺＝55.9cm	0.9	40
回廊内側	長軸（K・K'）		950	5間強	30.5尺＝948.5cm	1.5	155
	短軸（M・M'）		175	1間弱	5.6尺＝174.1cm	0.9	0
	礎石間	長軸（P・P'）	815	4間半弱	26.2尺＝814.2cm	0.8	75
		礎石間（Q・Q'）	163	1間弱	5.2尺＝161.7cm	1.3	22
		短軸（R・R'）	95	半間強	3尺＝93.3cm	1.7	30

参考：石敷きⅠ期：桁行4間・桁行の柱間寸法6尺等間、梁間1間・梁行の柱間寸法2.1尺等間。
石敷きⅡ期：桁行5間・桁行の柱間寸法5.2尺等間、梁間1間・梁行の柱間寸法3尺等間。

参考文献：鎌田正・米山寅太郎 P390「度量衡歴代　変遷表〔尺（cm）：隋（6～7世紀）29.51cm、唐（7～10世紀）31.10cm、宋・元（10～14世紀）30.72cm、明（14～17世紀）31.10cm、清（17～20世紀）32.00cm、現代中国（20世紀）33.33cm、日本（20世紀）30.3cm〕」『大修館 漢語新辞典』株式会社 大修館書店 2001年4月1日発行。



C-11 SS01の層序　北壁

第2層a' …暗褐色土層(敷石直下の造成土,礫の混入は僅か。)
第2層b …茶褐色混礫土層(敷石直下の造成土,赤色土を若干含む。)
第2層e …褐色混礫土層
第2層f …灰褐色混礫土層
第2層g …赤褐色土層(赤色土を多量に含む。)
第2層j …茶褐色土層(遺構構築時の造成土であるが,その堆積は局所的である。
試掘穴②の西壁と試掘穴①の北壁にみられる。)
第2層b' …褐色混礫土層(SS03-SS04東壁の第2層bと類似層であるが,礫の混入が少ない。)
第4層a …淡褐色礫層(敷石遺構の造成土,2~5cm程度の礫を主体とする。)
第4層b' …淡褐色混土礫層(第4層aと類似層で2~5cm程度の礫を多く含む。)
第5層 …赤褐色混礫土層(SS03-SS04東壁検出の第5層と同一層。)

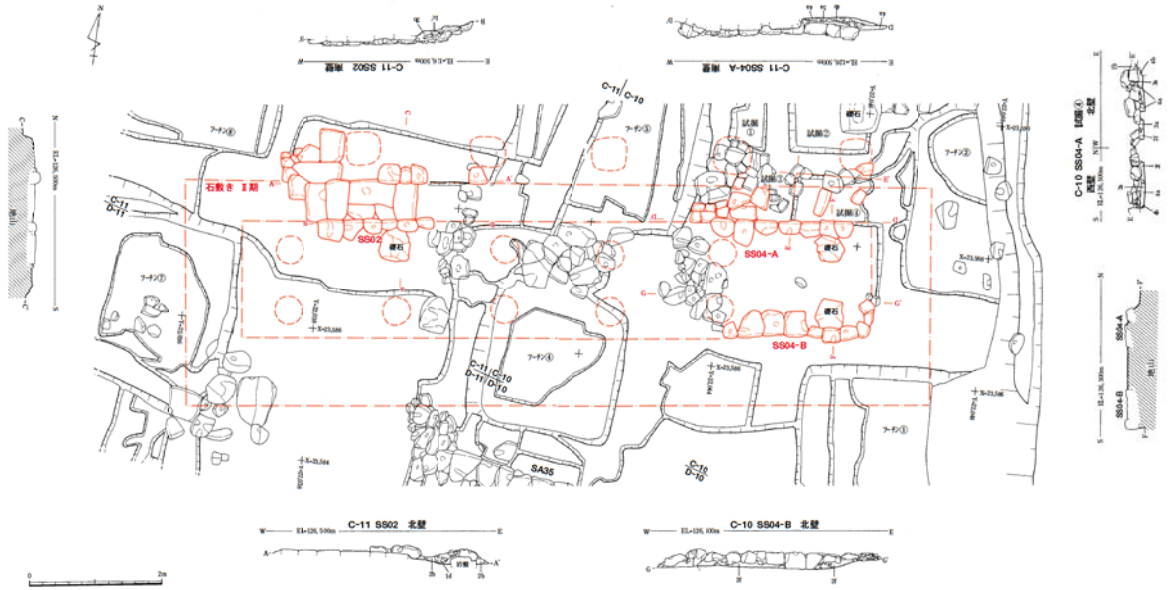
※第2層の細分層位(a'・b'・e・f・g・j)の5枚の層で,遺構構築時の造成に
よって層位の逆転が確認されている。

C-10 SS03-B試掘穴①(北西隅)・試掘穴②(北東隅)の層序

第1層a …黄白色礫層(現代の造成コーラル,試掘穴②の東壁と西壁に堆積し,試掘穴①
南壁において,部分的な堆積がみられる。)
第1層c …茶褐色混礫土層(試掘穴②では東壁南隅から南壁中央近くに堆積し,瓦礫・
古銭・白磁などが出土,試掘穴①においては東壁・南壁・西壁の三ヶ
所に堆積するが,撹乱を受ける。)
第2層d …明褐色混礫土層(造成土,SS03-B・SS04-Aの間を整地する際に投入された造成
土で,試掘穴①の南壁中央に堆積。)
第2層e …褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,試掘穴②の礫石及び敷石直下に堆積する。)
第2層f …灰褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,試掘穴②-①の礫石及び敷石直下に堆積
する。)
第2層g …灰褐色礫層(遺構構築時の造成土,礫石下部の造成土。)
第2層i …暗茶色土層(遺構構築時の造成土,堆積層は試掘穴②-①の南壁から西壁中央に
みられる。)
第2層j …赤褐色土層(遺構構築時の造成土であるが,その堆積は局所的である,試掘穴②の
西壁と試掘穴①の北壁にみられる。)
第3層a …明褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,第3層bと類似するが,本層は4~16cm大の
礫が混入,試掘穴②では南壁と西壁にのみ堆積し,試掘①において
は,途切てはいるものの各壁での堆積がみられる,試掘①では,
青磁盤・青磁椀の破片などが出土している。)
第4層b …淡褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,試掘穴②-①の各壁面でみられる。)
第4層c …暗褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,試掘穴②の北壁・東壁・南壁の三ヶ所でみ
られる。)
第5層 …赤褐色混礫土層(遺構構築時の造成土,試掘穴①の各壁面で観察される。)

※琉球大学の建物基礎跡を「フーチング」(英語表記:footing)と言う。
表記は「フーチン」と略記。

第53図　C-10・11 石敷き1期(SS01・02、SS03-B、SS04-A)　平面及び断面・層序



C-11 SS02の層序 北壁・南壁

第1層 d'—茶褐色土層（赤褐色土を少量に混入した土質。遺構構築時の造成土であるが撹乱を受けている。北壁の縁石直下に堆積した第2層 b の造成土と共通する。）

第1層 d—淡褐色礫層（撹乱層）

第2層 b—茶褐色泥炭土層（遺構構築時の造成土。北壁の縁石直下に堆積。赤褐色土を少量含む。）

第3層 b—褐色泥土堆積（遺構構築時の造成土。北壁の縁石直下に堆積するが、南壁では撹乱を受けて第1層 d'と層位が逆転する。）

C-10 SS04-A 試掘穴③（南西隅）・試掘穴④（南東隅）の層序

試掘穴③は、第1層 a（黄白色礫層—現代の造成コーラル。）と撹乱を受けて破損した敷石や石列貯蔵を除去した時点で調査を終了した為、堆積層は残っていない。従って、試掘穴③について以下に記す。

C-10 SS04-A 試掘穴④（南東隅）の層序

第1層 b—黄白色泥炭土層（現代の造成コーラルに土砂が混入）
第2層 a—暗褐色泥炭土層（遺構構築時の造成土とみられる）
第2層 d—灰褐色泥炭土層（敷石直下の造成土）
第3層 a—明褐色泥炭土層（縁石直下の造成土）
第4層 a—淡褐色泥炭土層（　　）
第4層 b—暗褐色泥炭土層（遺構構築時の造成土）

C-10 SS04-B の層序

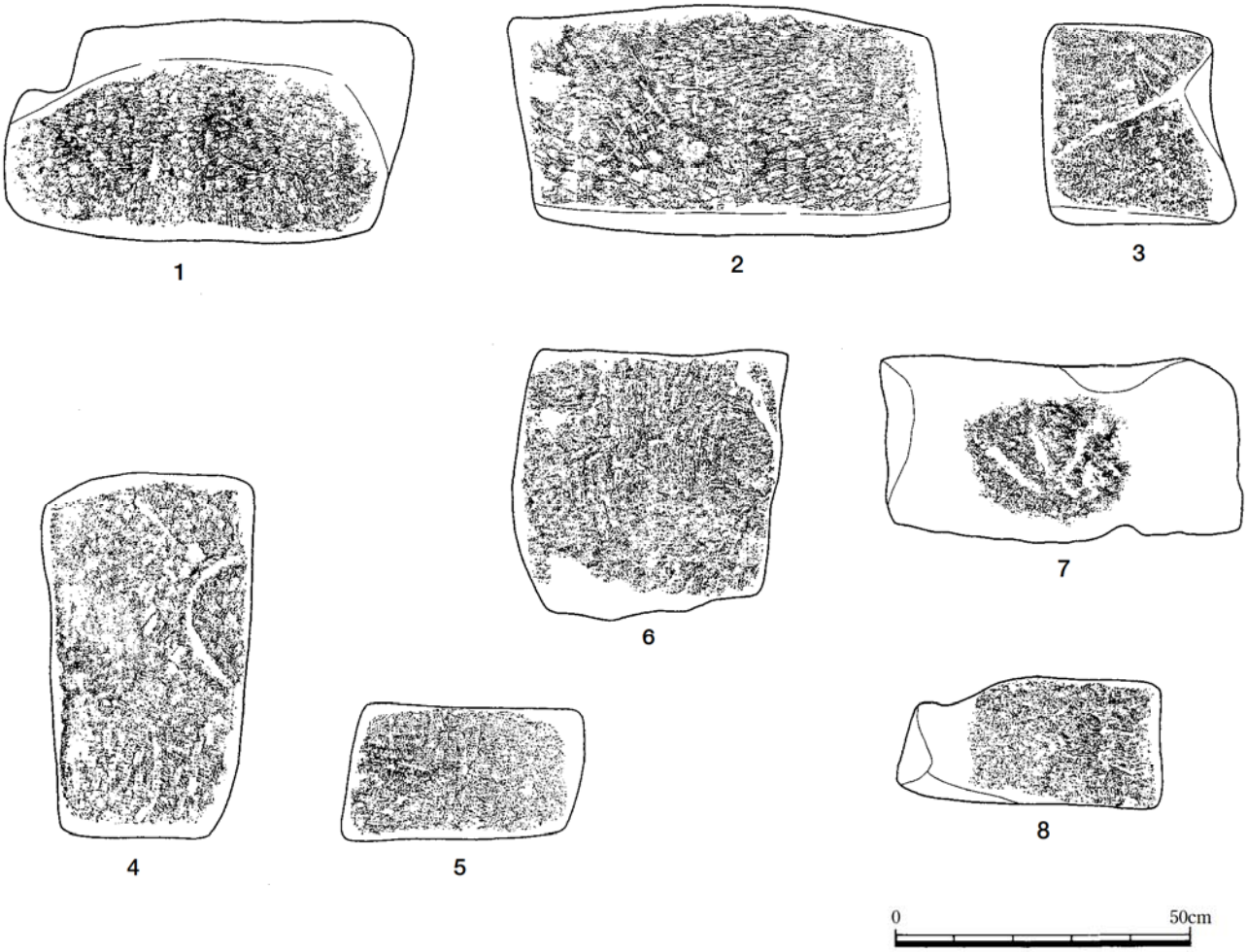
第2層 f—灰褐色泥炭土層（SS04-B の縁石直下に堆積した造成土）

※琉球大学の建物基礎跡を「フーチング」（英語表記 footing）と言う。
表記は「フーチン」と略記。

凡例
○：推定された礫石の位置

第54図　C-10・11 石敷きⅡ期（SS02.SS04-A・B）　平面及び断面・層序

第55図　C-10・11 石敷きSS01・02、SS03-B、SS04-A　遺構残存の鑿痕や刻印石の位置図



第56図　C-10・11 石敷きSS01・02、SS03-B、SS04-A　遺構残存の鑿痕（1～3：SS01、5：SS02、6：SS03-B、8：SS04-A）と刻印石（4：SS02、7：SS04-A）

図版 69　上：C－10･11　SS01 ～ SS04 ほかを南側上空より望む
　　下：　同上　SS01 ～ SS04　西より東側を望む

図版 70　上：C-10･11　SS01 ～ SS04　東より西側を望む
　　下：　同上　SS01、SS02　北より南側を望む

図版 71　上：C－10･11 SS01、SS02　南より北側を望む
　　下：C－10 SS03－B　西より東側を望む

図版 72　上：C－10 SS03－B　北壁ほかを南より望む
　　下：同上　SS03－B・SS04－A　東より西側ほかを望む

図版 73　上：C－10 SS03－B、SS04－A・B　北より南側を望む
　　下：同上　SS04－A・B　東より西側を望む

ホ．第Ⅴ期（16 世紀前半～ 19 世紀後半）・（第 57 図）

当該期の遺構として石積み、塼瓦敷きの２種類が確認されている。石積みは８基を数えるが、明確に内外面が残存するものはＳＡ 15 東側トレンチ（内面）・西側トレンチ（外面）〔第 57・58・61 ～ 63 図・第 31 表。図版 75・80 ～ 85〕の２基のみであった。残りの６基がＳＡ 06（外面）〔第 57 ～ 59 図・第 29 表。図版 74 ～ 78〕・ＳＡ 14（第 45・49・61 ～ 63 図・第 25 表。図版 65）の２基（一連の石積みとみられ途切れながら延びる）。そして、ＳＡ 06・ＳＡ 14 と関連するとみられる石積みの跡がＳＡ 21・ＳＡ 23（第 57・58・64 図・第 32 表。図版 86）の２基。ＳＡ 13（内面）〔第 57・58・60・67 図・第 30 表。図版 79〕、ＳＡ 15（内面・外面）、ＳＡ 31（第 57・58・65 図・第 33 表。図版 87 ～ 89）の４基である。

これらの石積みを方位軸で整理すると東西方向に延びる石積み５基〔ＳＡ 06（外面）、ＳＡ 14、ＳＡ 21・ＳＡ 23、ＳＡ 31〕と南北方向に延びる石積み３基〔ＳＡ 13、ＳＡ 15（内面・外面）〕の計８基が存在する。東西方向に延びる石積みで内外面が対応するのは上記のＳＡ 15（外面）・（内面）の１基のみである。内外面の石積みが対応する可能性があった石積みは、上記したようにＳＡ 06（外面）・ＳＡ 14 及び石積み跡ＳＡ 21・ＳＡ 23 であろう。

その他にＳＡ 21・ＳＡ 23 の石積み跡は、第Ⅲ期の石積みＳＡ 08 やＳＡ 10 から延びてくる石積みが破壊されたものとしても考えられるところである。ＳＡ 21・ＳＡ 23 の石積み跡と対応ならびに平行する石積みは北隣に存在する琉大時代の排水溝工事の基礎掘りや岩盤の削平などによって消失したものかと考えられる。

塼瓦敷きＳＳ 05（第 57・66 図・第 34 表。図版 90 ～ 92）は１基のみ確認されたが当該遺構の近くか若しくは、遺構に直接砲弾が着弾・爆破して破壊されたようである。更に戦後の造成（琉大の建物基礎工事）でも破壊されたようである。そのため塼瓦は砕片化し、その形状をとどめていない。塼瓦敷きＳＳ 05 は実際には敷き詰められた塼が破壊された状態で検出されている。一応、塼瓦敷き跡と表現すべきであろうが便宜的に塼瓦敷きとした。塼瓦は湧田古窯跡（註 13）の例から 15 世紀中頃～ 17 世紀前半まで生産されている状況やＳＳ 05 の位置関係などから当該期の石積みＳＡ 13 の石積みの延長線上から外れることなどからこの時期に含めた。ＳＳ 05 の機能した時期は 17 世紀前後の遺構として考えられるところである。

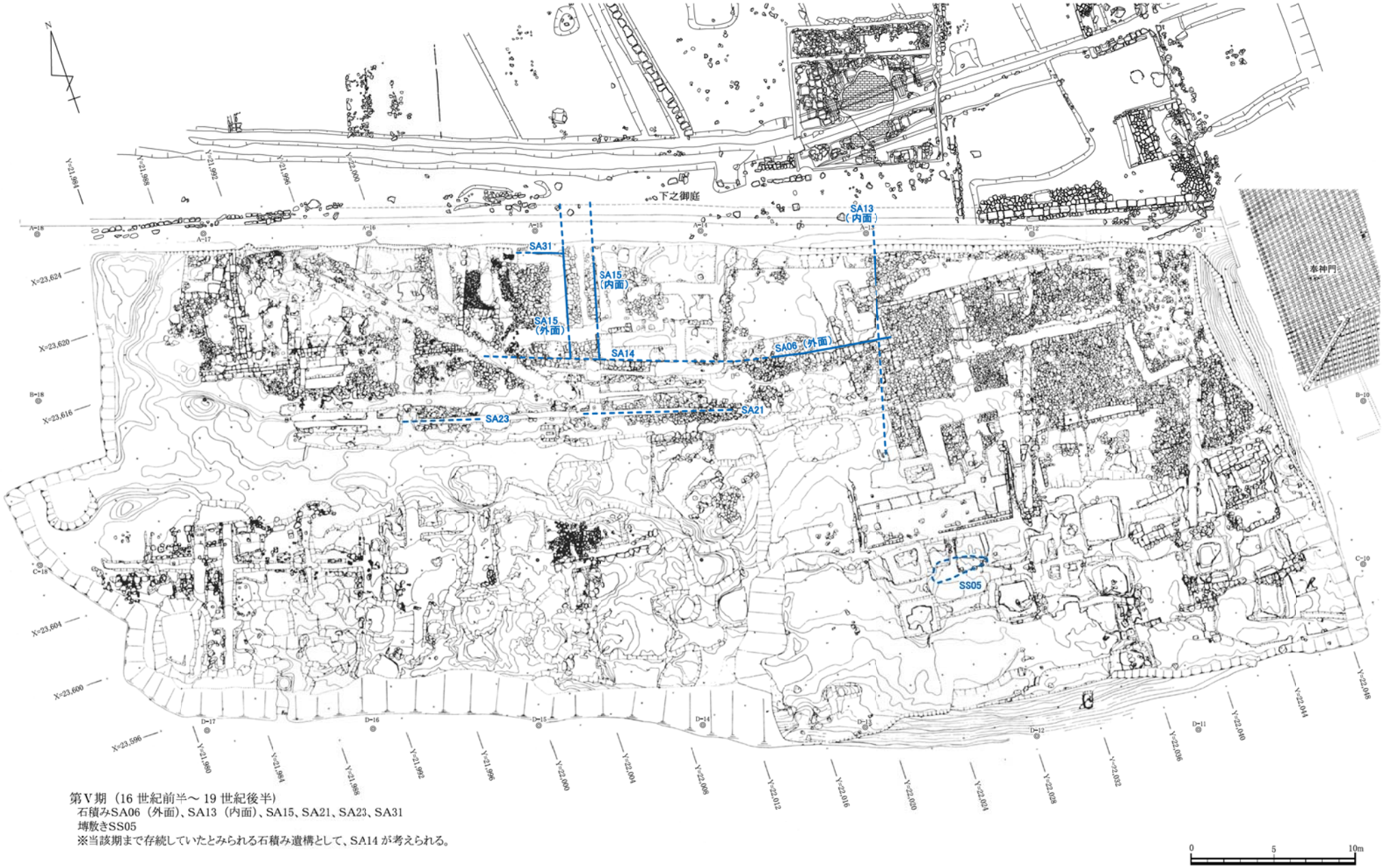
当該期まで存続する遺構として、現段階では次の①～③までの石積みが考えられる。①第Ⅲ期の石積みＳＡ 17・ＳＡ 18 － Ｂ・ＳＡ 25 － Ａの一連の石積み。②第Ⅲ期のＳＡ 14 と第Ⅴ期のＳＡ 06 も一連の石積み。③第Ⅱ期のＳＡ 05 － Ｂ石積みなどが長期間にわたって存在していたことが予想されるが、今後出土した陶磁器類の分類と整理が進行すればある程度の時期が判明するものと思慮されるところである。

最後に当該期の石積みＳＡ 13 と第Ⅲ期の石積みＳＡ 32 の前後関係を把握し第Ⅳ期の石積みＳＡ 07 の北側への広がりの有無確認を目的にＢ － 13 グリットの北壁沿いに幅１m、長さ８m 程度のトレンチを設定し発掘調査（第 58・67 図・第 35 表。図版 93・94）を実施した。調査の結果、トレンチ東端でＳＡ 13 若しくはＳＡ 32 の根石直下にある栗石とみられるものなどが確認されたが、第Ⅳ期の石積みＳＡ 07 に関連する遺構などは確認できなかった。

註文献

註 13 － a. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡（Ⅰ）県庁舎行政棟建設に係る発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書　第 111 集』1993 年。
－ b. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡（Ⅱ）県庁舎議会棟建設に係る発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書　第 121 集』1995 年。

図版 74　上・下：B・C－12 ～ 15 SA06、SA13 ～ 15、SA23、SA31、SS05　南側上空より望む

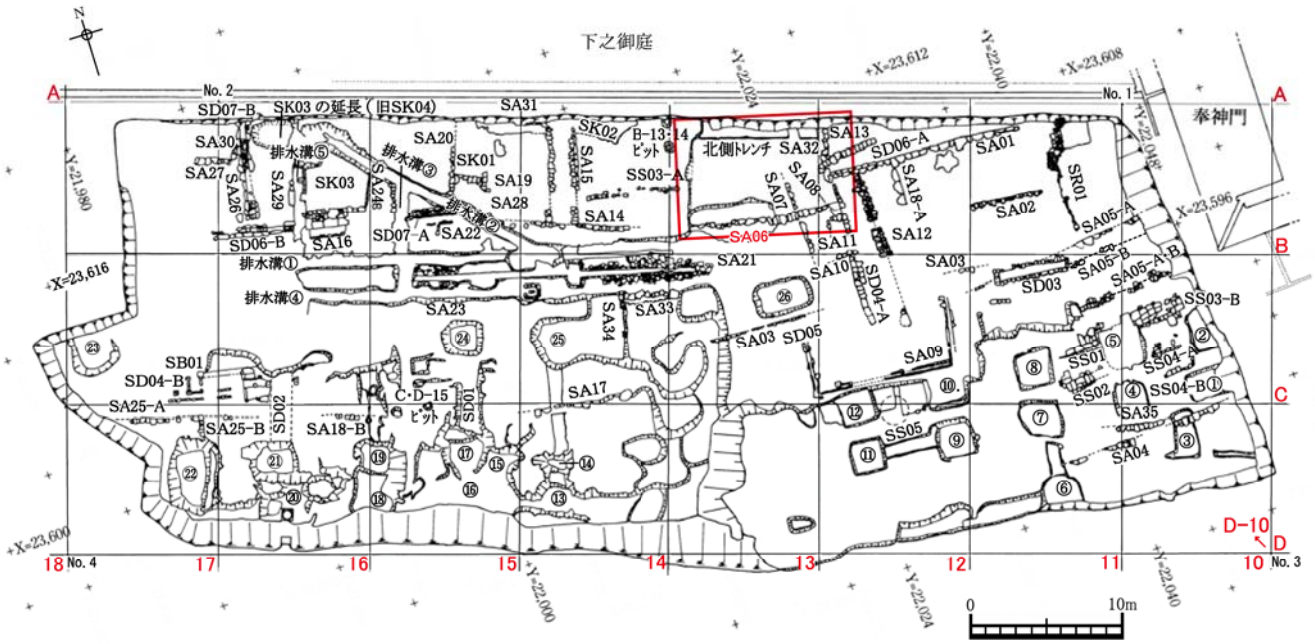


第Ⅴ期（16 世紀前半～ 19 世紀後半）
石積みSA06（外面）、SA13（内面）、SA15、SA21、SA23、SA31
塼敷きSS05
※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA14 が考えられる。

第57図　京の内北地区第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）遺構の推定復元

第58図 B・C-12～15 石積みSA06、SA13、SA15、SA21、SA23、SA31、北側トレンチ 平面

図版 75　上：B･C－12 ～ 14　SA06、SA13･15、SA31を東側上空より望む
　　下：　　同上　　SA06、SA13･15、SA31を南側上空より望む

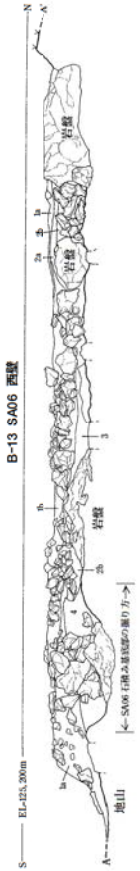


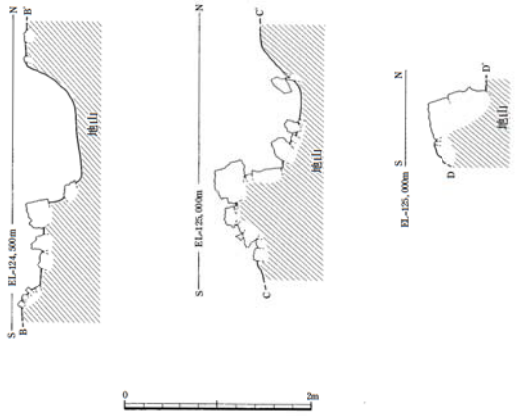
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 29 表　第Ⅴ期　SA06　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－12・13 SA06 第57～59図	7m55cm 1m15cm 25cm	琉球王国時代の東西方向に延びた区画石積み。東端は第Ⅲ期のSD04－A（第41図）にすり付けられている。西側は石積みが崩れている。東端から3mの地点から石積みが雑に積み上げている。石積みは地山及び岩盤から切り石を積み上げている。第Ⅳ期のSA07（第48図）と交差する部分から西側は粗加工の切り石を用いて積み上げる。石積みは布積み（東側）と相方積み（西側）が併存する。16C～。	N84° 30′ W	切り石積みで、布積みと相方積みが併存。 77° 78°	25～67cm 24～32cm 30～65cm	西側の1番石はズレて勾配が65°となっている。東側は第Ⅲ期のSD04－Aにすり付いていて中央部では第Ⅲ期のSA07の上に当該遺構のSA06が存在する。第Ⅲ期の第41図のSA32・SD04－Aと平行する時期が可能性として考えられる。東端の上位の切り石の一部はSD04－Aからの排水を通すために正面観が逆さ「L」字状に切り石の東側の隅を抉って成形する。

第59図　B-12・13 石積みSA06　平面及び断面・層序





B-12・13 SA06（B-13西壁）層序

第１層 a… 灰褐色混礫土層（戦後の攪乱層で西壁の両端に残存する。北側では 2～6cm と薄く堆積し、南側では 2.5～4.5cm と厚く堆積する。特に南側では赤瓦片が多量に混入する。）

第１層 b… 淡灰色混礫土層（戦前の造成土盤で首里第一小学校舎建設時のものとみられる西壁の南端近くから北端近くまで普偏的に堆積する。南側では灰が混入し土色が濃くなり灰褐色を帯びている、西壁中央寄り北側部分ではシルト質泥岩の風をである俗称クチャが混入する。）

第２層 a… 淡黄色混礫土層（西壁北側のみ堆積する。）

第２層 b… 暗褐色混礫土層（西壁の北側と南側で部分的に堆積する。）

第３層… 暗茶色土層（西壁の中央付近の石盤直上に堆積）

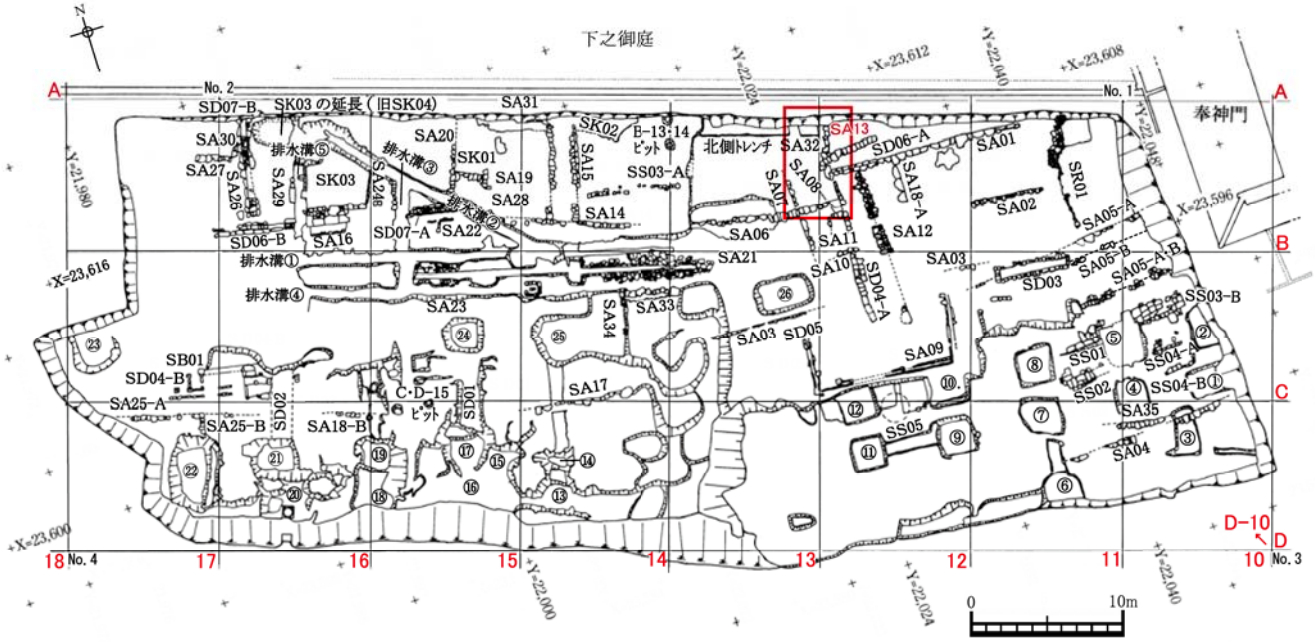
第４層… 暗茶色土層（SA06 石積み基底部掘削時の掘り方部分及び石積み抜き取り後に埋め戻された土砂で地山の黄褐色土と同じであるが、若干土色が変化する。）

第５層… 黄褐色土層（地山）

図版 76　上：B−12・13　SA06 ほかを南側上空より望む
　　下：　同上　　SA06 ほかを西より東側を望む

図版 77　B-12・13 SA06　東より西側を望む

図版 78　上：B－12・13　SA06　北壁ほかを南より望む
　　下：　同上　　SA06　ほかを北より南側を望む

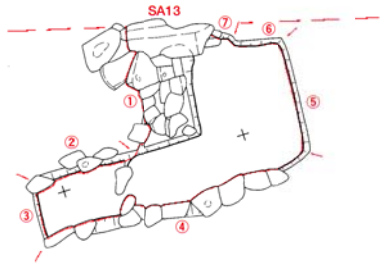


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 30 表　第Ⅴ期　SA13　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－12 SA13 第57・58・60・67図	2m55cm 55cm —	琉球王国時代後半頃に南北に延びていた区画石積みの一部で第Ⅳ期のSA11（第48図）と主軸方向が一致している。地山を掘り抜いて岩盤直上から石積みか。根石のみ残存。16C～。	N12°30′W	切り石積み （110°）	19～45cm 18cm 38～60cm	根石がズレているため勾配が110°となる。背中合わせで西隣に第Ⅲ期のSA32（第41図）が存在する。SA32よりもSA13は新しい時期のものとみられる。第Ⅲ期のSD06－A（第43図）と平行する時期。

Ⅴ期

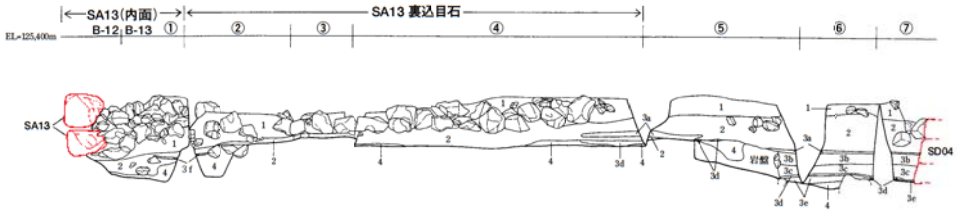


B-12・13 北側トレンチ・SA13　層序

第１層ａ …赤褐色混礫土層（表土層。俗称：国頭マージの客土）
第１層ｂ …灰褐色混礫土層（撹乱層。公園整備に伴う造成土）
第１層ｃ …白砂層（平成２年の調査終了後の遺構保護砂で、上層は土砂等により灰色に変色）
第１層ｄ …暗褐色混礫土層（撹乱層。トレンチ内で普遍的にみられ、厚く堆積する。）
第１層ｅ …淡褐色混礫土層（トレンチ中央付近に堆積する。）
第２層　…黄白色混土礫層（B-13グリッド近くから西側まで普遍的に堆積する。本層下下部より青銅製の腰輪が出土。）
第３層　…赤褐色混土礫層（SA13の裏込目相当の礫層か。）
第４層ａ …淡灰色混砂礫層（トレンチ内の東側畦近くに堆積する。）
第Ａ層　…SA13 築石（黄白色混土礫層）

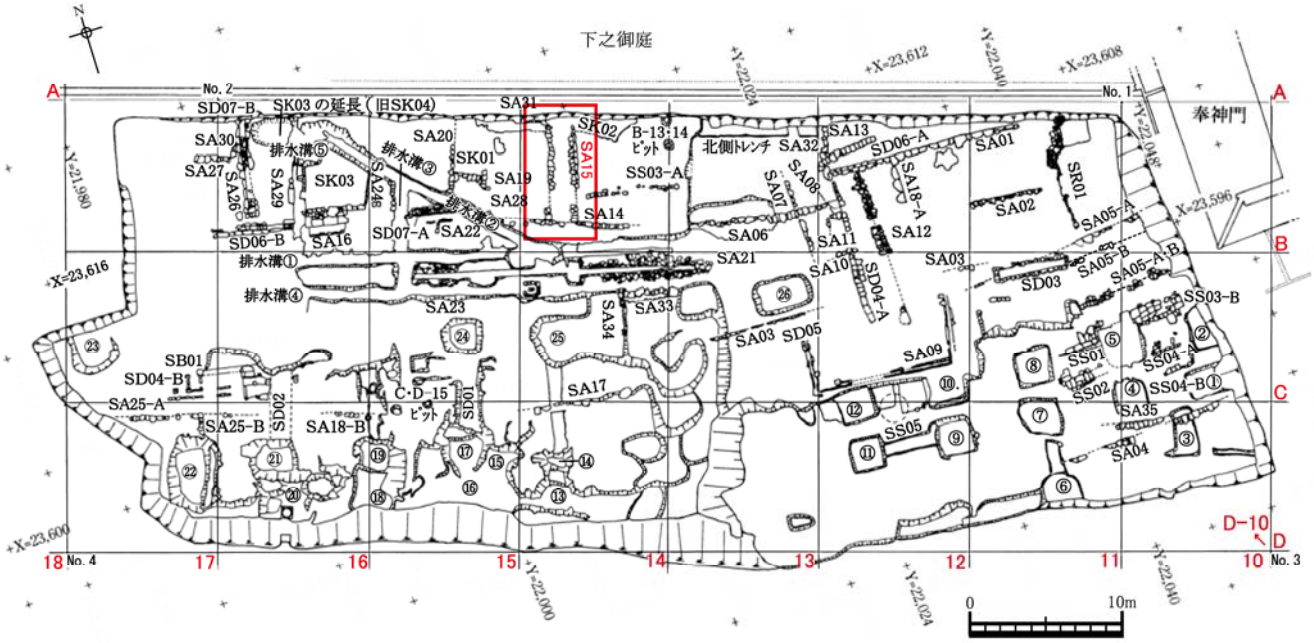
B-12・13 SA13・SA07・SA04-A関連の層序

第１層　…淡褐色混礫土層（旧１層。SA13 石積み直下の造成土盤及び SA07 の裏込目石。）
第２層　…赤褐色混礫土層（旧２層。SA13・SA07 の基礎土盤）
第３層ａ …淡灰色土層（間層①。SD04-A 排水溝関連の造成土。）
第３層ｂ …黄白色礫層（間層②。　〃　。）
第３層ｃ …赤褐色土層（旧３層。間層③。SD04-A 排水溝関連の造成土。）
第３層ｄ …黒褐色土層（旧４層。間層④。　〃　。）
第３層ｅ …淡褐色混土礫層（旧６層。間層⑤。　〃　。）
第３層ｆ …赤褐色土層（旧５層。間層⑥。　〃　。）
第４層　…赤褐色土層（旧7・8層。地山。俗称：島尻マージ。）



第60図　B-12・13 石積みSA13　平面及び層序

図版 79　上段：B-12 SA13（右）西壁ほかを東より望む、 二段：B-12 SA13（中央～左）東壁ほかを西より望む
三段：同上 SA13（右）ほかを北より南側を望む、下段：同上 SA13（左）ほかを南より北側を望む

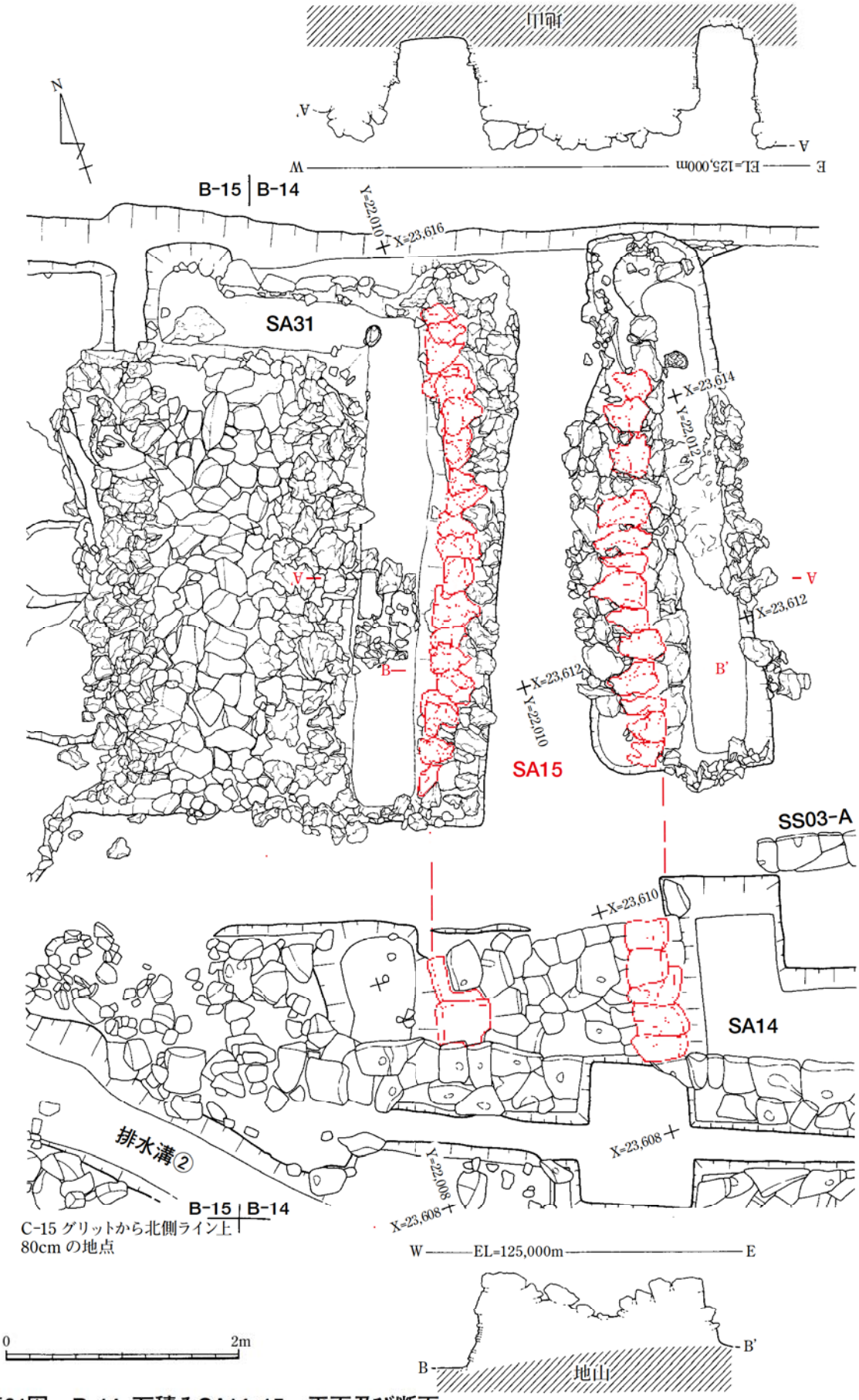


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 31 表　第Ⅴ期　SA15 遺構観察表

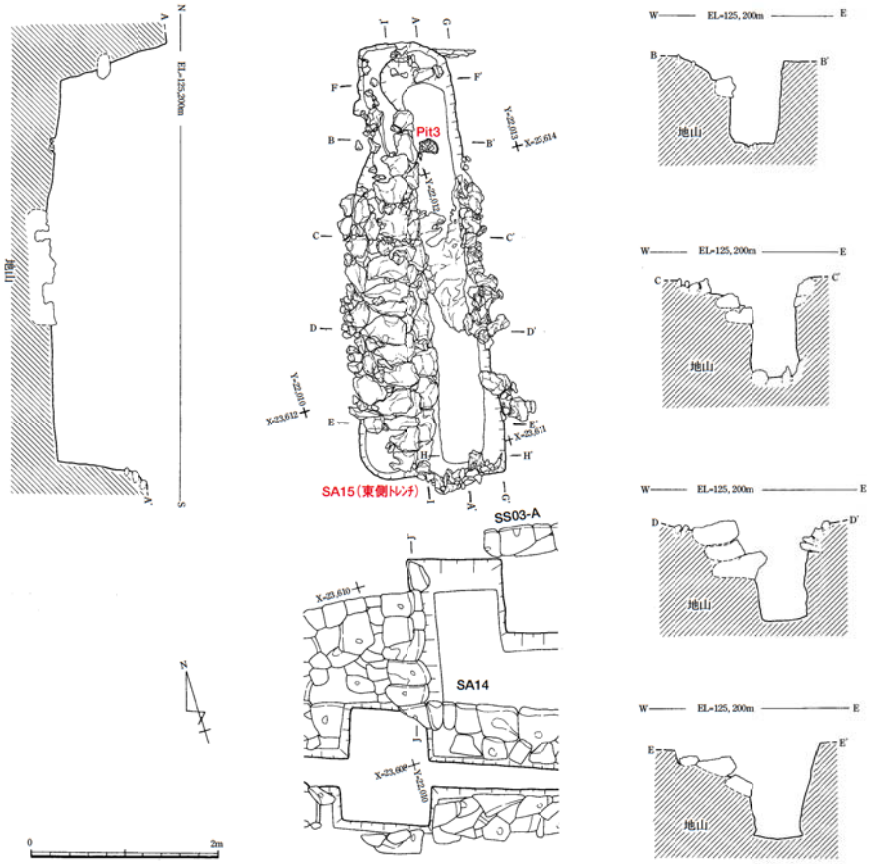
地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－14 SA15 第57・58・61～63図	6m13cm 2m04cm 57cm	南北方向に直線的に延びて第Ⅳ期のSA14（第49図）にすり付けられた石積み。SA14とすり付けられ平面観の形状が逆さ「T」の字状となる。造成土盤に包含層を持ち込んで使用し、この土盤の上から根石を設置する。根石は東側のみが20cm前後で一番石の下場が突出した状態で石積みを行っている。石積みは粗加工の野面風の石を相方積みで石積み。15C末～。	N14°20′E	野面風の粗加工の石積み。 90°	28～48cm 14～30cm 18～44cm	1番石の勾配は90°で、第Ⅳ期のSA14（第49図）にすり付けられている。北端の隅では石積みが西側に折れて、当該期の石積みSA31（第65図：栗石のみが検出）に繋がっているようである。

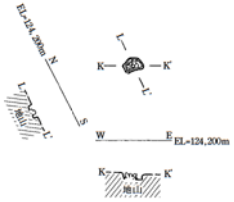
Ⅴ期



第61図　B-14 石積みSA14・15　平面及び断面

図版 80　上：B－14　SA15 東西ﾄﾚﾝﾁ　南側上空より望む
　　下：同上　SA15 東西ﾄﾚﾝﾁ　北より南側を望む

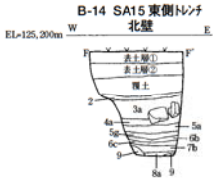


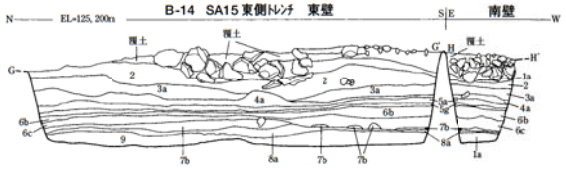


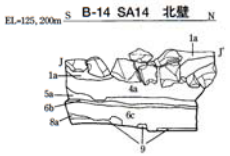
Pit3

B-14 SA15 東側トレンチの層序・SA14 の層序

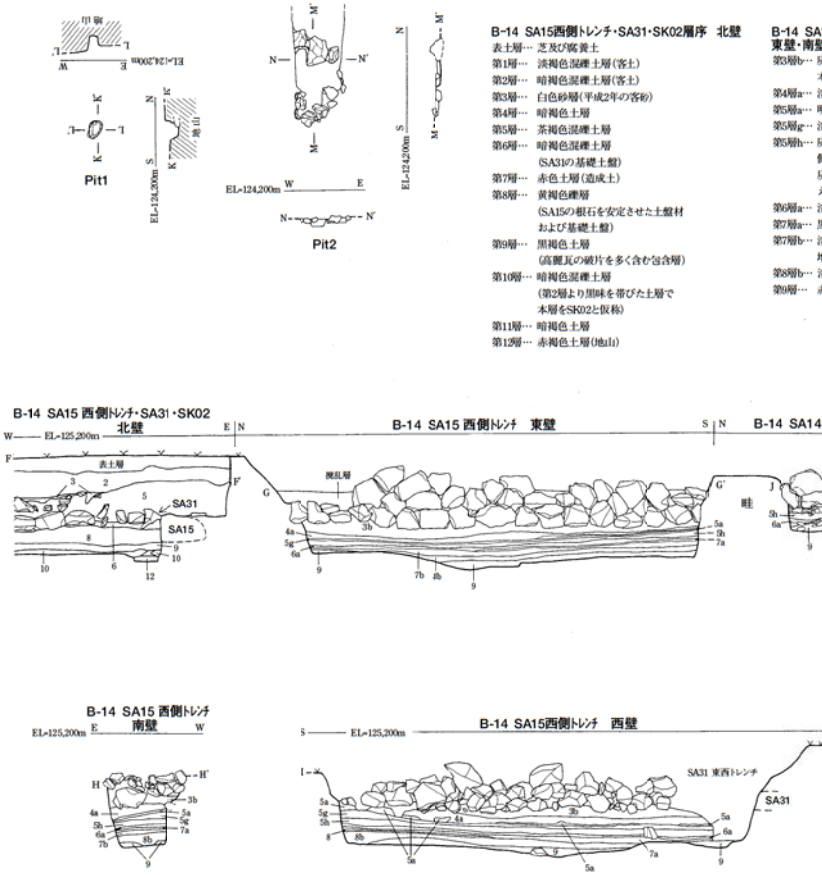
表土層①… 赤褐色土（北壁のみに残存する公園設備時の客土。俗称：国頭マージ）
表土層②… 淡褐色混礫土層（平成３年の埋め戻しの土砂）
覆土層… 暗褐色混礫土層（撹乱層。平成３年埋め戻しの土砂）
第１層 a… 淡褐色混礫土層①（撹乱層。10cm－20cm 程度の石灰岩礫が混入）
第２層… 淡褐色混礫土層
第３層 a… 暗褐色土層
第４層 a… 淡褐色混礫土層（旧４層。SA15 西側トレンチと共通）
第５層 a… 明灰色土層（旧５層。SA15 西側トレンチと共通）
第５層 g… 淡黄白色礫層①（旧６層。SA15 西側トレンチと共通）
第６層 b… 黒褐色土層（旧７層。炭が多く混入する。）
第６層 c… 黄褐色混礫土層（旧８層）
第７層 b… 黒色土層（旧９層。南側は淡灰色土層で、部分的に黒味が強くなる。）
第８層 a… 茶褐色土層（旧 10 層。地山である第 11 層への移行層で、地山より赤味が強い。）
第９層… 赤褐色土層（旧 11 層。地山）







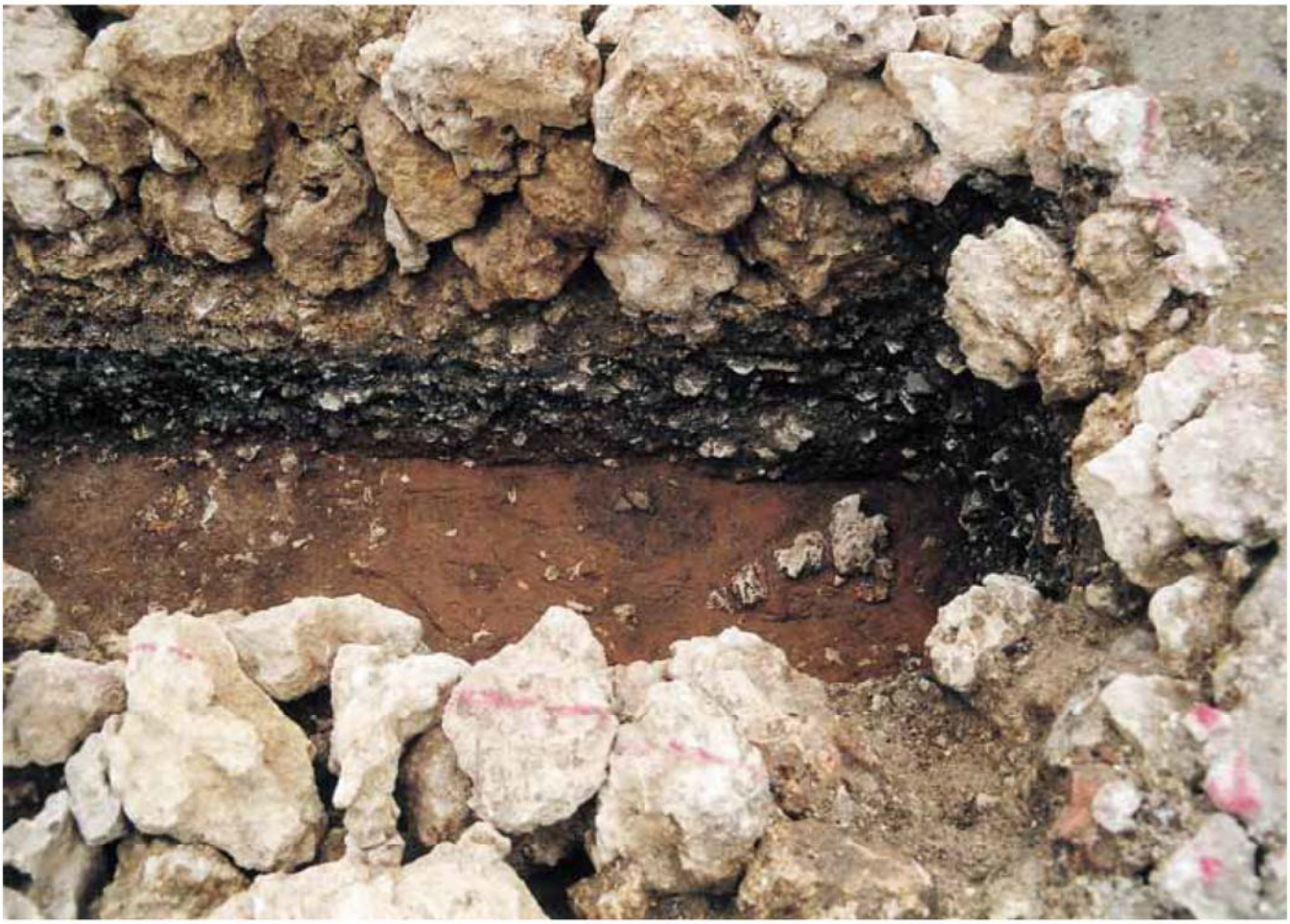
第62図　B-14 石積みSA14・15（東側トレンチ）　平面及び断面・層序



第63図 B-14 石積みSA14・15（西側トレンチ） 平面及び断面・層序

図版 81　上：B－14　SA15 東側ﾄﾚﾝﾁ　北壁（南より）
　　下：同上　SA15 東側ﾄﾚﾝﾁ　東壁（西より）

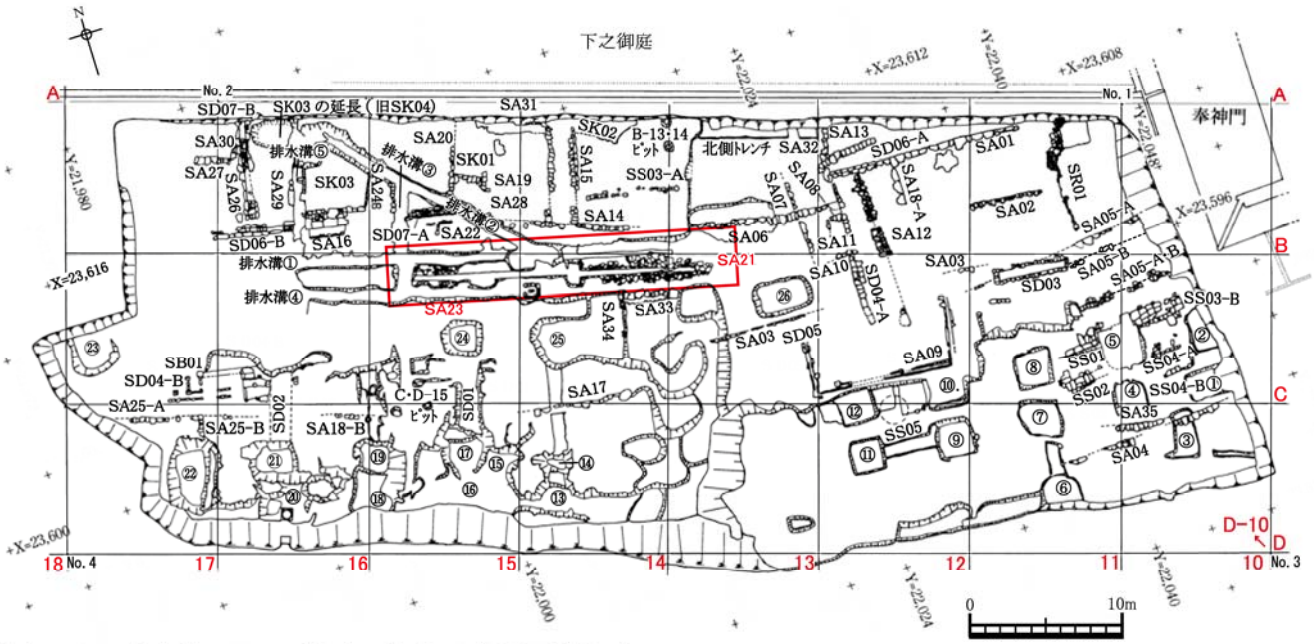
図版 82　B－14 SA15 東側ﾄﾚﾝﾁ 西壁（東より）



図版 83　上：B－14　SA15 西側ﾄﾚﾝﾁ　北壁（南より）
　　下：同上　SA15 西側ﾄﾚﾝﾁ　東壁（西より）

図版 84　上：B－14　SA15 西側ﾄﾚﾝﾁ　東壁（西より）
　　下：同上　SA15 西側ﾄﾚﾝﾁ　南壁（北より）

図版 85　B－14　SA15 西側ﾄﾚﾝﾁ　西壁（東より）

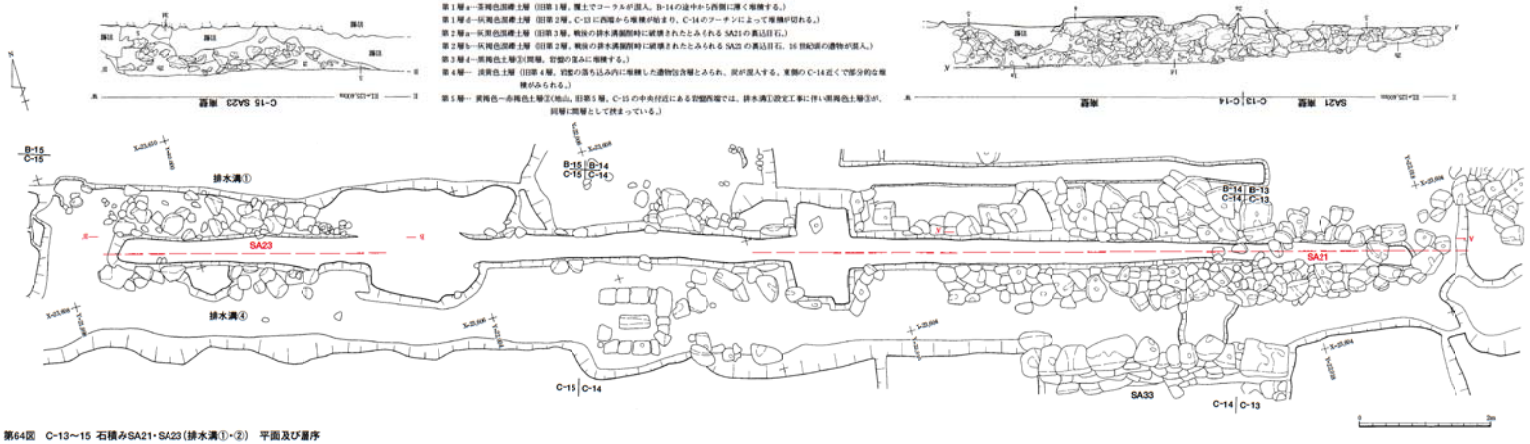


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 32 表　第Ⅴ期　SA21、SA23　遺構観察表

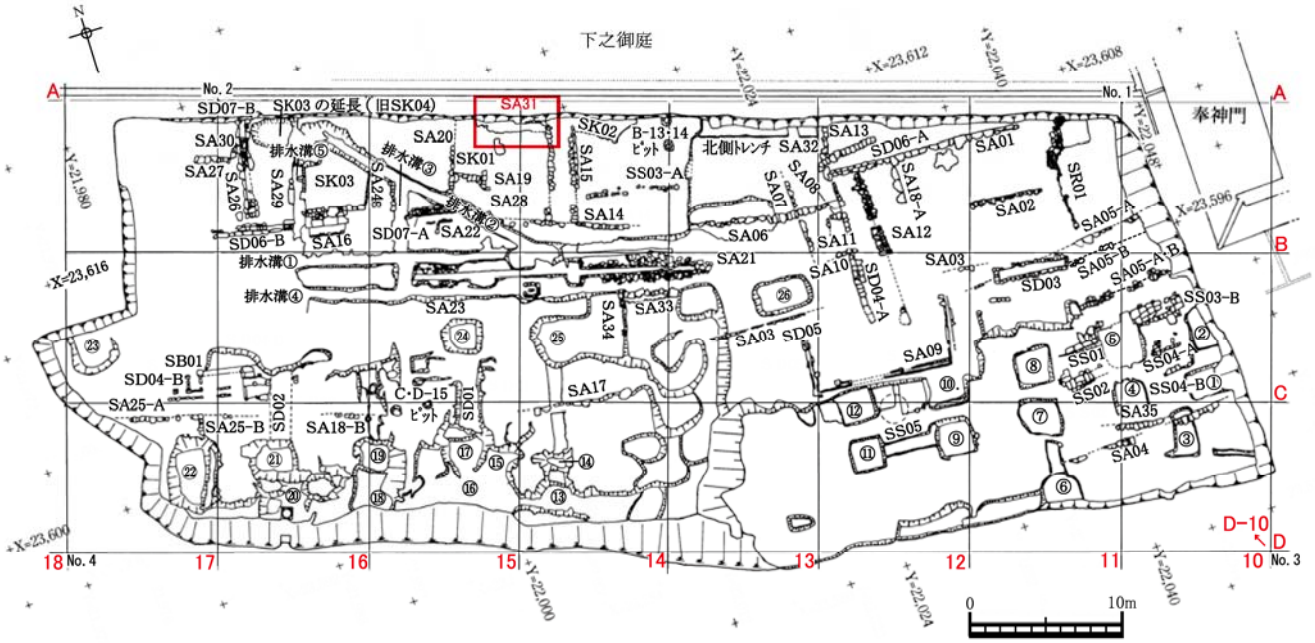
地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C-13・14 SA21 第57・58・64図	12m30cm 2m10cm —	東西方向に延びていた石積みの栗石や切り石などの石列をSA21とした。地山及び岩盤、そして造成土盤の上から石積みを施しているようである。区画石積みの裏込目石を主体とする。15C末～。	N74° 00′ W?の方向か。	裏込目石を主体に切り石や野面石が混在。 —	— — —	第Ⅴ期のSA06（第59図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）や第Ⅲ期のSA08・SA10（第33図）、SA33・SA34（第39図）の裏込目石の石列が推定される。同様な裏込目石の石列が西側で検出されている（第64図のSA23）。当該SA21とSA23は途中で岩盤によって途切れているが一連の石積みとみられる。
C-15 SA23 第57・58・64図	10m2cm 1m40cm —	琉球王国時代に東西に延びていた区画石積みの栗石溜まりか。東端は岩盤から始まり、西端が琉球大学の電線ケーブルの地下埋設工事で破壊。造成土と岩盤直上から石積みか。16C～。	N71° 15′ W	野面石積み。 —	未計測 未計測 未計測	第Ⅴ期のSA06（第59図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅲ期のSA08（第33図）、SA33（第39図）の裏込目石か。若しくは上記した石積みSA21のものか。

Ⅴ期



第64図　C-13～15 石積みSA21・SA23（排水溝①・②）　平面及び層序

図版 86　上：C-13～15 SA21、SA23 を南側上空より望む
　　下：C-13･14 SA21　北壁ほかを南より望む

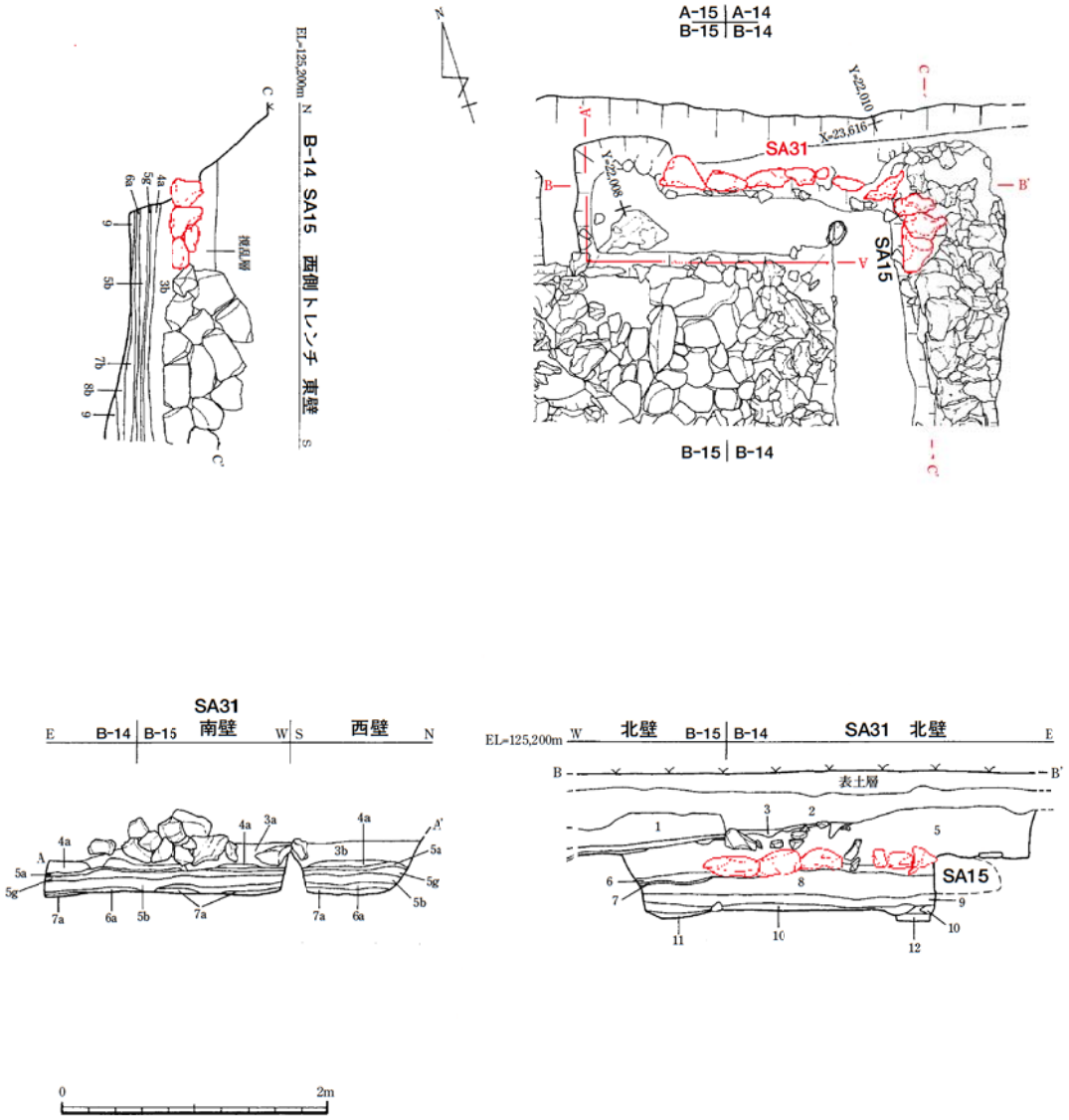


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第33表　第Ⅴ期　SA31　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定 時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－14・15 SA31 第57・58・65図	1m73cm 未検出 詳細不詳	琉球王国時代の石積み。大半が崩れて第Ⅴ期のSA15（第61～63図）の北西隅ですり付けている。造成土の上から石積み。粗加工の野面風の根石のみが検出。16C～。	N72°　10′　W	野面風の石積み。 —	9～14cm 10～15cm 24cm	当該期のSA15と一連の石積みとみられる。SA15の主軸を0°と設定した場合、当該遺構SA31はN98°30′にある。SA31はSA15よりも新しい時期の石積みとみられ、ある時期にSA15にすり付けて機能させた石積みとみられる。

Ⅴ期



第65図　B-14・15 石積みSA31　平面及び層序

B-14・15 SA31(SK02 西側)の層序　北壁

表土層…芝及び腐養土
第１層…淡褐色混礫土層（客土）
第２層…暗褐色混礫土層（客土）
第３層…白色砂層（平成２年の客砂）
第４層…暗褐色土層
第５層…茶褐色混礫土層
第６層…暗褐色混礫土層（SA31 の基礎土盤）
第７層…赤色土層（造成土）
第８層…黄褐色礫層
（SA15 の根石を安定させた土盤材および基礎土盤）
第９層…黒褐色土層
（高麗瓦の破片を多く含む包含層）
第10層…暗褐色混礫土層
（第２層より黒味を帯びた土層で本層を SK02 と仮称）
第11層…暗褐色土層
第12層…赤褐色土層（地山）

B-14　SA31（SA15 西側トレンチ）の層序

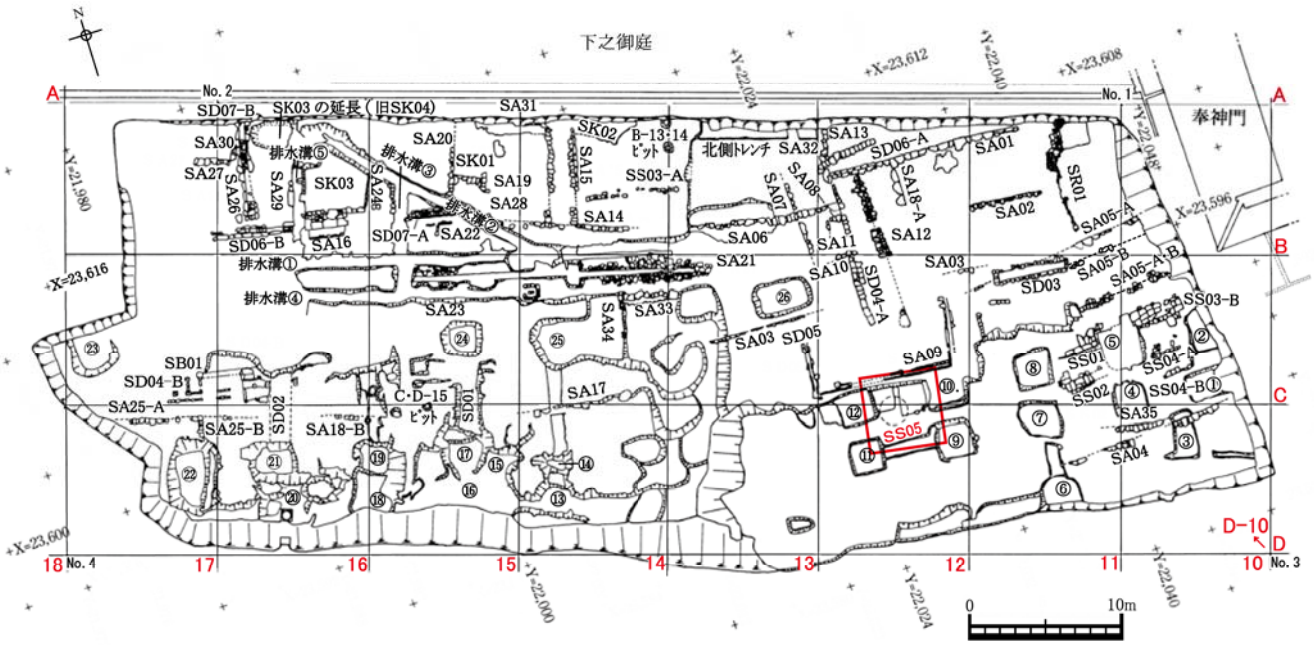
東壁・南壁・西壁

第３層ｂ…灰褐色混礫土層（旧１層。石積み直下の造成土で本トレンチにのみ堆積する。）
第４層ａ…淡褐色混砂礫層（旧２層。SA15 東側トレンチと共通）
第５層ａ…明灰色土層（旧３層。SA15 東側トレンチと共通）
第５層ｇ…淡黄白色礫層①（旧４層。SA15 東側トレンチと共通）
第５層ｈ…灰黒色土層（旧５層。SA14 西側トレンチ及び SA15 東側トレンチで堆積がみられるが、本トレンチの当該層は灰や炭を主体とすることからオリジナルの層として考えられた。）
第６層ａ…淡黄白色礫層②（旧６層。SA15 東側トレンチと共通）
第７層ａ…黒色土層（旧７層。SA15 東側トレンチと共通）
第７層ｂ…淡黄色混土砂層（旧８層。SA14 西側トレンチで厚く堆積する。）
第８層ｂ…淡褐色混礫土層（旧９層）
第９層　…赤褐色土層②（旧 10 層。地山）

図版 87　B－14･15 SA31 ほかを南側上空より望む

図版 88　上：B－14・15　SA31　北壁（南より）
　　下：　同上　　SA31　南壁（北より）

図版 89　上：B－14・15　SA31　西壁（東より）
　　下：　同上　　SA31（SA15 西側トレンチ）　東壁（西より）

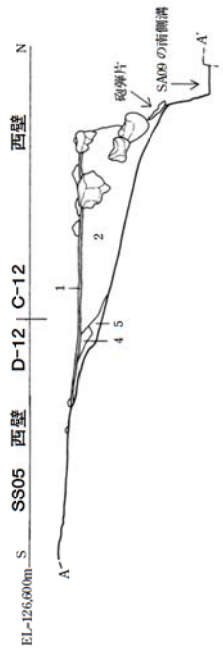


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 34 表　第Ⅴ期　SS05　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D－12 SS05 第57・66図	1m21cm 1m10cm —	第Ⅳ期のSA11（第48図）若しくは第Ⅴ期のSA13（第60図）の区画石積みが存在した時期に石積み近くにあった塼瓦敷きの遺構とみられる。塼瓦は割れた状態で検出されている。造成土の上に塼瓦を敷いたか。16C後半～17C前半。	不明	塼瓦敷きか。 —	不明 〃 〃	第Ⅳ期のSA11（第48図）、第Ⅴ期のSA13（第60図）の区画石積みが存在した時期と平行する遺構とみられる。

Ⅴ期



C・D-12 SS05 層序

第1層…黄灰色混土礫層(覆土のｺｰﾗﾙ層。)

第2層…灰褐色混礫土層(撹乱層。戦時の砲弾片などが混入する。砲弾片が多いことから当該遺構及び周辺に砲弾が着弾したようである。)

第3層…濃茶色土層(SS05の埓瓦層)

第4層…茶褐色土層(二次堆積で地山の赤土とみられる。)

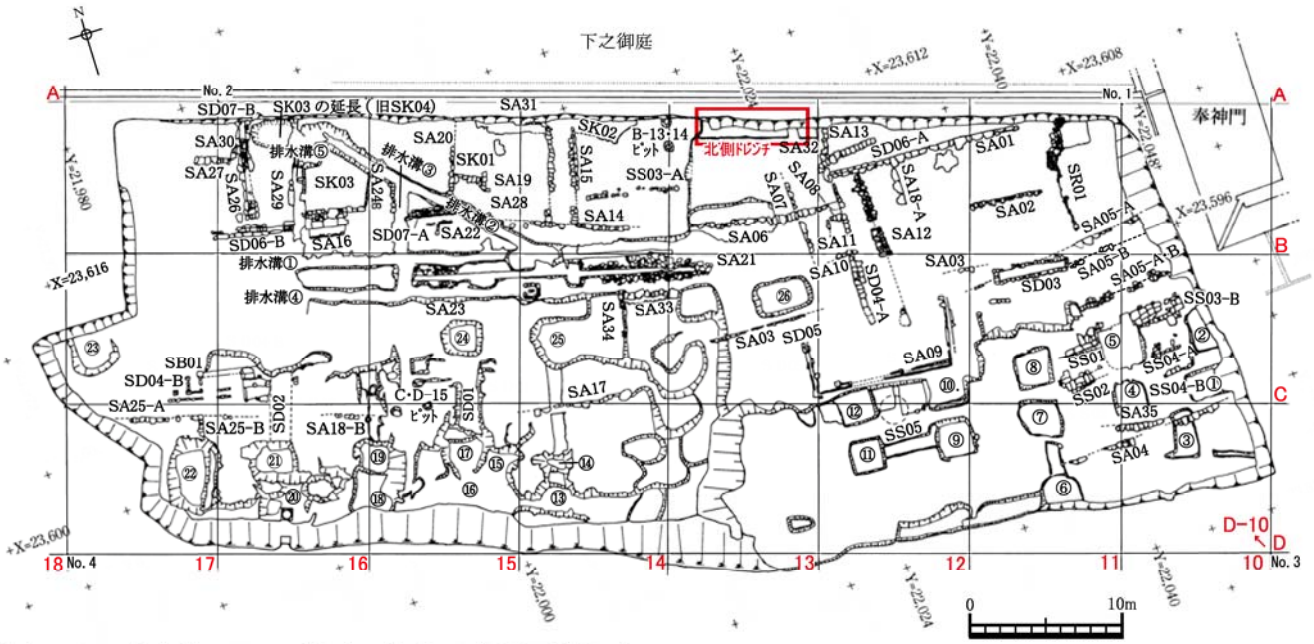
第5層…灰褐色土層(SS05直下の造成土で、石灰岩の小礫やヤコウガイの殻を多く含む。)

第66図　C・D-12 埓敷きSS05　平面及び断面・層序

図版 90　C・D－12 SS05 ほかを南側上空より望む

図版 91　上：C・D－12　SS05　南より北側を望む
　　下：　同上　　SS05　東壁（西より）

図版 92　上：C・D－12　SS05　南壁（北より）
　　下：　同上　　SS05　西壁（東より）

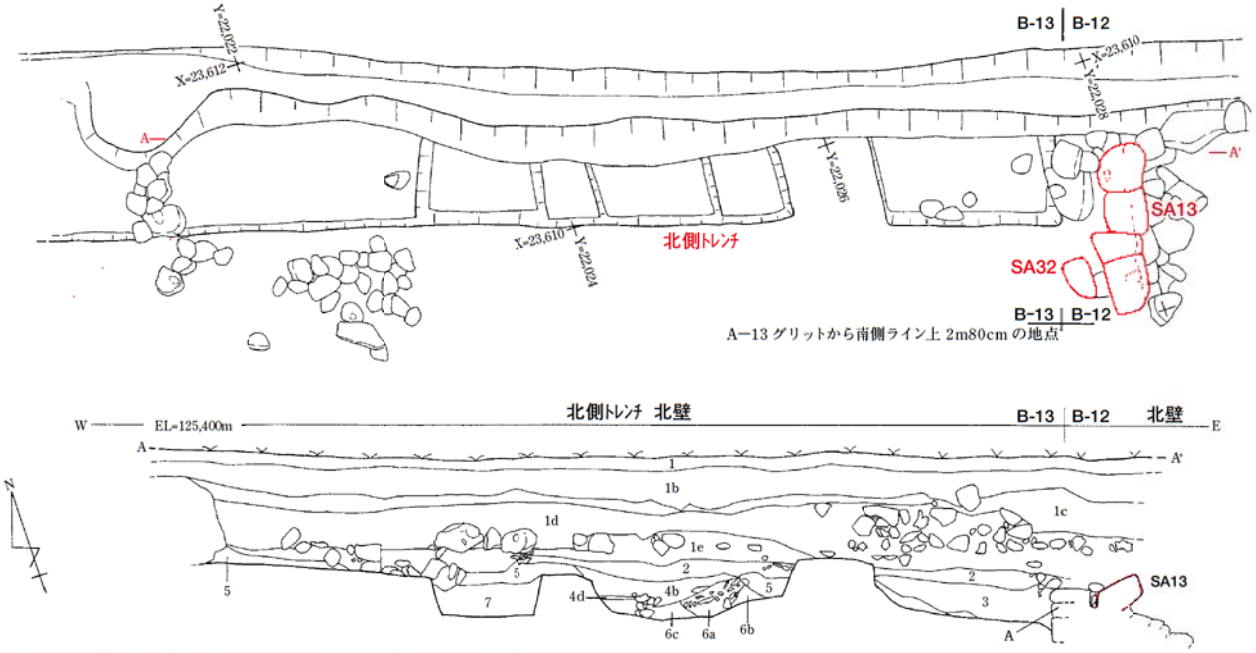


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第35表　第Ⅴ期　B-12・13 北側トレンチ　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B-12・13 北側トレンチ 第58・67図	— — —	第Ⅲ期のSA32（第41図）、第Ⅳ期のSA07・SA11（第48図）、第Ⅴ期SA13（第60・67図）の石積み遺構の広がりを確認する目的でトレンチを設定。トレンチ東側で第Ⅴ期の石積みSA13（同図）の基礎土盤とみられる栗石が確認された。	— — —	— —	— — —	第Ⅲ期のSA32（第41図）、第Ⅳ期のSA07・SA11（第48図）、第Ⅴ期SA13（第60・67図）の石積み。

図版93　B-12・13 北側トレンチ（上寄り）を南より望む



B-12・13 北側トレンチ　SA13層序

第１層ａ・・・赤褐色混礫土層（表土層。俗称：国頭マージの客土）
第１層ｂ・・・灰褐色混礫土層（撹乱層。公園整備に伴う造成土）
第１層ｃ・・・白砂層（平成２年の調査終了後の遺構保護砂であるが、上層から土砂等による灰色に変色。）
第１層ｄ・・・暗褐色混礫土層（撹乱層。トレンチ内で普遍的にみられ、厚く堆積する。）
第１層ｅ・・・淡褐色混礫土層（トレンチ中央付近に堆積する。）
第２層・・・・黄白色混土礫層（B-13グリット近くから西側まで普遍的に堆積する本層下部より青銅製の覆輪が出土。）
第３層・・・・赤褐色混土礫層（SA13 の裏込目相当の礫層か。）
第４層ａ・・・淡灰色混砂礫層（トレンチ内の東側畦近くに堆積する。）
第４層ｂ・・・黒褐色土層（中央付近に中華鍋底様に堆積する。）
第４層ｃ・・・赤褐色土層①（間層。トレンチ中央付近で僅かに薄く堆積する。）
第４層ｄ・・・黒褐色混礫土層（　　〃　　。）
第５層・・・・暗褐色土層②（中央付近から途切れながら西側まで堆積する。）
第６層ａ・・・淡黄色混土礫層（間層。トレンチ中央付近で堆積する。）
第６層ｂ・・・淡褐色土層（間層。トレンチ中央付近で僅かに堆積する。）
第６層ｃ・・・黒褐色土層（トレンチ中央付近に堆積し、地山の赤褐色土層と黒褐色土が混在する。）
第７層・・・・赤褐色土層②（地山。トレンチ中央より西寄りで堆積がみられる。）
第Ａ層・・・・SA13栗石（黄白色混土礫層）

第67図　B-12・13 北側トレンチと石積みSA13　平面及び層序

図版94　B-12・13 北側トレンチの北壁層序

へ．第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）・（第 69 図）

当該期は明治 12（1879）年 3 月 31 日に最後の琉球国王となった尚泰が首里城を明け渡し、4 月 4 日に琉球藩を沖縄県と布告されたいわゆる琉球処分以降の時期から昭和 25（1950）年の琉球大学開校に向けての造成工事（昭和 24 年から着手）、そして開校後の校舎などの増改築がなされた時期から西原町へ新キャンパスが完成し移転を完了した昭和 57（1982）年頃までとした。当該期を便宜的に次の二時期に分けた。第Ⅵ期前半（1879 年～ 1945 年）、第Ⅵ期後半（1946 年～ 1982 年）である。以下に二時期の概要を記す。詳細は各期毎に整理してあるので参照されたい。なお、本項目の註及び参考文献については紙数の都合により後述の項目「a. 第Ⅵ期前半」で整理した。

１）第Ⅵ期前半（1879 年～ 1945 年）

当該期の首里城の概要を記すと約 500 年に亘って琉球王国の王宮としての機能を停止した直後の明治 12（1879）年から明治 29（1896）年までの時期は、「熊本鎮台沖縄分遣隊」の兵舎などに使用される。1893 年に作成された第 10 図の『首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図』（註 14）から京の内に関する情報を読み取ると、京の内北東側の区画石積み内に「器械体操場」として使用されていることがわかる。京の内の平場中央を東西に走っているであろう第Ⅲ期の区画石積みＳＡ 17、ＳＡ 18 －Ｂ、ＳＡ 25 －Ａは既に消失したものとして理解できる。また、第Ⅲ期の石積みＳＤ 04 －ＡとＳＡ 12（外面と内面）、若しくは第Ⅳ期の石積みＳＡ 07 とＳＡ 12（外面と内面）のいずれかが残存していることが配置図から窺える点で注目される。以上のように第Ⅲ期若しくは第Ⅳ期の石積みの一部は当該期まで残存している可能性が配置図（第 10 図・第 13 図④）から読み取れるようである。

熊本鎮台沖縄分遣隊による駐留が始まった明治 12（1879）年以降から昭和 20（1945）年までの期間については文教関係の設置や移転時期を整理すると第 36 表のとおりとなる。主なものを列挙すると、①明治 27 年：首里尋常小学校を城内に分教場を設置。②明治 29 年：師範学校校舎改築のため首里城内に移転。③明治 30 年：師範学校校舎落成に伴い首里城より移転。③明治 30 年：首里城内に首里区立女子実業補修学校（後の首里市立女子工芸学校）尋常高等小学校に付設設立。④明治 32 年：沖縄県中学校（現在の首里高等学校）、首里城の一部を校舎として使用。⑤明治 33 年：首里区立工業徒弟学校（後の沖縄県立工業徒弟学校）首里城内に設置。⑥明治 40 年：工業徒弟学校、南殿二階に教室拡大。⑦明治 41 年：沖縄県立高等女学校、首里城から真和志村大道に移転。⑧明治 43 年：沖縄県立中学校、首里城北殿に分校設置。⑨明治 45 年：首里第一尋常高等小学校（首里第一小学校）、京の内から下之御庭一帯に校舎落成移転。沖縄県立第二中学校、首里城の仮校舎から嘉手納に移転。⑩大正 7 年：県立工業学校、校舎新築し首里城より移転。⑪昭和 9 年：首里女子実業学校、沖縄県立女子工芸学校と改称し桃原町に校舎移転。⑫昭和 11 年：首里城北殿に沖縄県教育会付属の郷土博物館開館。⑬昭和 20 年：首里城地下に第 32 軍司令部、安里から移転。首里城及び円覚寺などの国宝建造物群戦災で焼失。

以上、首里城内における熊本鎮台沖縄分遣隊駐留時期から沖縄戦までの時期までを記したが、上記①～⑬まで時期で京の内と最も深く関係するのは第 68・70 図の首里第一尋常高等小学校（以下、首里第一小学校と併記）であり、京の内跡の発掘調査地区の北西側一体には学校校舎の周辺に走っていた側溝や学校施設に入る階段などが遺構（第 68・69 図）が検出されている。

２）第Ⅵ期後半（1946 年～ 1982 年）

昭和 20（1945）年の沖縄戦では首里城の地下に昭和 19（1944）年頃から第 32 軍指令部壕が構築された為、米軍の集中砲火を受けて地上にあった首里城正殿・南殿・北殿など建築物や城門・城壁などの施設もことごとく消失や崩壊などで灰盡に帰してしまったようである。

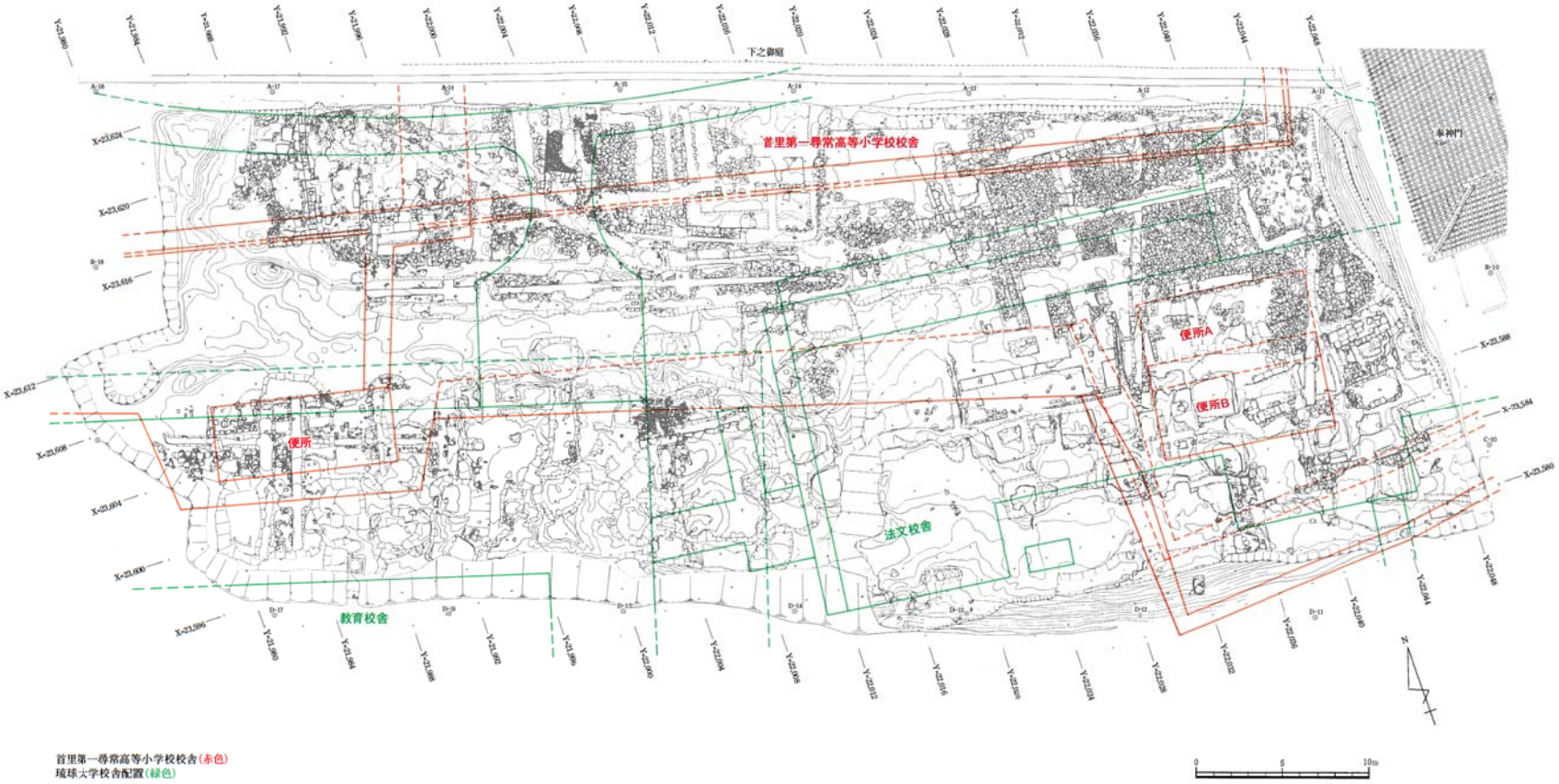
昭和 25（1950）年には焦土と化した首里城跡の丘へ琉球大学が創設され、昭和 57（1982）年までの 32 年間（第 84 ～ 87 図）、沖縄の最高学府とし存在した。現在は西原町の新キャンパスへ移転している。当該期の造成や校舎建設などにより京の内の調査区の南半分に存在した石積み遺構は基盤である琉球石灰岩の削平や基礎掘りによって消失してしまったようである。更に地下に排水溝やヒューム管の埋設によって調査区の西半分が溝状に破壊されてたようである。その他、琉球大学財団管理下にあった沖縄唯一のラジオ放送局ＡＫＡＲ〔〈琉球の声〉：米軍管理の下で、うるま市具志川の栄野比に 1950 年に開局〕を琉球放送（ＲＢＣ）が昭和 25（1954）年から昭和 34（1959）年まで賃貸による借用をおこなう（註 15）。この放送局も京の内に構築（第 84 図）されていたようである。

第36表　廃藩置県後の首里城及びその周辺における主要文教施設等略年表

西暦・年号・王統	事　　項
1879 年 (明治 12・尚泰 32)	**3/31: 廃藩置県により、琉球国王尚泰、首里城明け渡し。正殿は、熊本鎮台分遣隊営所となる。**
1880 年（明治 13）	6/21: 沖縄師範学校が那覇天妃宮内に設立。12/9: 国学跡（現県立芸術大学内）に首里中学校設立（翌年 1 月開校）。
1881 年（明治 14）	6/21: 沖縄師範学校、沖縄県立師範学校と改称。
1886 年（明治 19）	1/16: 沖縄県立師範学校、那覇から首里当蔵の龍潭池畔（現県立芸大内）に移転。**7/: 首里の東、西、北の三校を統合して首里小学校を現在の寒川町 1 の 3（安国寺の西側）に新設（城南小学校の前身）**。11/: 沖縄県立師範学校、沖縄県尋常師範学校と改称。12/: 首里中学校、沖縄尋常中学校と改称。
1887 年（明治 20）	3/: 沖縄尋常中学校、沖縄県尋常中学校と改称（修業年限を 5 年改める）
1888 年（明治 21）	**2/: 首里小学校、首里尋常小学校首里高等小学校と改称。**
1891 年（明治 24）	○沖縄尋常中学校、旧中城御殿跡（現首里高等学校）に移転。
1893 年（明治 26）	**9/20: 首里尋常小学校首里高等小学校、首里高等尋常小学校と改称**（のちに**首里尋常高等小学校**となる）
1894 年（明治 27）	○首里高等尋常小学校、城内に分教場を置く。
1896 年（明治 29）	**○城内より熊本鎮台分遣隊撤退。師範学校校舎改築のため首里城内に仮移転。**
1897 年（明治 30）	4/: 首里区立女子実業補習学校（沖縄県立女子工芸学校の前身）を首里小学校女子部内に設置。**9/13: 沖縄県師範学校、再建校舎落成し首里城から移転**（県立高等女学校は師範学校から分離）
1898 年（明治 31）	4/: 沖縄県尋常師範学校、沖縄県師範学校と改称。**首里高等小学校**で女生徒に入墨（ハジチ）を除くよう訓諭する。○師範学校付属小学校校舎改築のため首里城内に仮移転（寝廟殿を一時使用）。
1899 年（明治 32）	**4/: 沖縄県尋常中学校、沖縄県中学校と改称。生徒数著しく増加し首里城の一部を借り受け生徒収容。**
1900 年（明治 33）	**6/15: 首里区立工業徒弟学校、首里城内に設立。**○師範学校付属小学校校舎落成し、首里城より真和志に移転（城内の分教場廃止）。
1903 年（明治 36）	○陸軍省、城内建造物のみ払下げ。
1904 年（明治 37）	1/15: 師範学校校舎失火。首里城内に校舎と宿舎を仮移転。首里区立工業徒弟学校(後、沖縄県立工業学校)首里城書院に仮移転。
1907 年（明治 40）	○工業徒弟学校、南殿二階に教室拡大。その後、校舎完成し首里城より移転。
1908 年（明治 41）	6/2: 首里城の中山門、腐朽のため 52 円余で売却される。**10/28: 沖縄県立高等女学校、首里城から真和志村大道の新校舎**に移転。
1909 年（明治 42）	○陸軍省、有償払下げを決定し、首里区有地となる。○首里女子実業学校（後、沖縄県立女子工芸学校)、当蔵より南殿等に移転。
1910 年（明治 43）	**4/1: 沖縄県立中学校分校、首里城北殿に分校設置。**
1912 年 (明治 45：大正元)	**3/21: 首里尋常小学校、城内の京の内、下之御庭に校舎落成移転。4/14: 沖縄県立第二中学校、首里城の仮校舎から嘉手納**に移転。
1914 年（大正 3）	**○首里区工業徒弟学校、県に移管され県立工業徒弟学校となる。**
1918 年（大正 7）	**○県立工業徒弟学校、首里区立字当蔵（現県立芸術大学東側住宅地一帯）に新校舎を建設移転。**
1921 年（大正 10）	**1/: 実業学校新令発布により県立工業徒弟学校、県立工業学校と改称。**
1923 年（大正 12）	**4/1:** 従来の男女分離制を改めて男女共学にする（但し、本年は尋常科 3 年以下を実施し、順次 1 学年ずつ尋常科 6 年まで実施）そのため校名を**首里尋常高等小学校を首里第一尋常高等小学校**と改称。 首里区会で財政難のため首里城取り壊し決定。しかし、鎌倉芳太郎、伊東忠太らの尽力で保存。
1925 年（大正 14）	4/24: 沖縄神社拝殿（首里城正殿）国宝指定。
1927 年（昭和 2）	8/: 首里城正殿解体復元工事着工。
1931 年（昭和 6） 頃	**○阪谷良之進作成の首里城平面図に北殿（現市公会堂）、第一小学校（首里第一尋常高等小学校の略称）が明記。**
1933 年（昭和 8）	5/23: 首里城の歓会門・瑞泉門・白銀門・守礼門・国宝に指定。9/: 首里城正殿修築工事竣工。
1934 年（昭和 9）	○首里女子実業学校、沖縄県立女子工芸学校と改称し桃原町に校舎移転。
1936 年（昭和 11）	**7/4: 首里城北殿に沖縄県教育会附設郷土博物館開館。**12/: 伊東忠太・鎌倉芳太郎、正殿前（北殿西側）・京の内北西側下・西のアザナ東南側下を発掘調査。
1941 年（昭和 16）	3/1: 国民学校令公布（小学校を国民学校と改称。義務教育八年制となる。）4/1: 国民学校発足。首里第一尋常高等小学校を首里第一国民学校と改称。
1945 年（昭和 20）	3/27 ～ 8/2: 沖縄戦（1 月 10 日 第 32 軍司令部、安里から首里に移転)。首里城及び円覚寺などの国宝建造物戦災により焼失。
1946 年（昭和 21）	**8/14: 首里城内にあった首里第一国民学校は、戦災で消失し、崎山区旧沖縄放送局送信所跡に城南初等学校開校、城南幼稚園開園。**
1950 年（昭和 25）	5/22: 首里城跡に琉球大学開学。
1952 年（昭和 27）	2/28: 琉球教育法公布。初等学校が小学校に、中等学校が中学校に改められる。城南初等学校、城南小学校に改称。

＜参考資料＞

1．當真嗣一・上原静・大城聖子『首里城跡　歓会門･久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県文化財調査報告書 第 88 集　沖縄県教育委員会 1988 年 3 月
2．沖縄大百科事典刊行事務局「沖縄･奄美総合歴史年表」『沖縄大百科事典 別巻』沖縄タイムス社　1983 年 3 月
3．(財) 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成 7 (1995) 年 3 月。
4．久手堅憲夫『首里の地名－その由来と縁起－』南島文化叢書 22 第一書房 2000 年 10 月。
5．島本巌「那覇市教育史年表」･「公文学校系統図（小学校･中学校）」終章『那覇市教育史 通史編』那覇市教育委員会 2002 年 3 月。



首里第一尋常高等小学校校舎（赤色）
琉球大学校舎配置（緑色）
※便所Aは検出された遺構からプロット。便所Bは、昭和6年頃の首里城平面図に描かれた位置をプロット。

第68図　昭和6年頃の首里第一尋常高等小学校及び琉球大学校舎配置図

第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）の遺構（点描部分）
石積み SA02、SA09（建物跡）、SA16（階段）、SA22、SA26（溝の縁石）、SA29
溝 SD03（便所跡）、SD05、SD07-A、SD07-B、SD04-B
建物 SB01（便所跡）
石敷き SS03-A（溝の底板石）
排水溝⑤
※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA04 が考えられる。

第Ⅵ期後半（昭和 24 年～昭和 58 年）
石積み SA03
溝 SD01、SD02(琉大の布掘り基礎跡)
石列 SR01
その他の排水溝①～④、建物基礎（フーチン）①～㉖
※フーチン①・④の南側にある③は第Ⅳ期の SA35 と若干、平行する時期の窪地で石切り場跡か。

第69図　京の内北地区第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）遺構の推定復元

a. 第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年：1879 年～1945 年）・（第 71 図）

この時期の遺構（第 68・69・71 ～ 83 図）は、首里第一尋常高等小学校（以下、首里第一小学校と併記）の施設関係が主体として考えられる。遺構の配置関係は第 70 図の昭和 6 年頃の『旧首里城平面図』（註 16）と第 69 図の遺構を重ねて作成した第 68 図を基に検討したところ学校校舎及び便所などの関連施設等は一部（ＳＡ 09・ＳＤ 05、ＳＡ 02、ＳＤ 03）を除いて、若干のずれは発生しているが概ね一致するようであるが、ずれについては後述する。

首里第一小学校(1912 年～ 1945 年)の遺構(第 71 図)として検出されているのは、校舎周辺に存在した排水溝（ＳＤ 06 －Ｂ、ＳＤ 07 －Ａ・Ｂ)、排水溝関連（縁石ＳＡ 26、ＳＡ 29、底石ＳＳ 03)、便所（ＳＢ 01、ＳＤ 04 －Ｂ)、校舎へ入る階段及び踊り場及び縁石（ＳＡ 16、ＳＡ 22)、校舎の礎石（ＳＡ 29）がある。最初に小学校校舎と関連する排水溝関係の遺構とこれに付随する階段及び踊り場を整理（第 73 図・図版 95）すると、校舎に伴う排水溝（関連遺構を含む）並びに階段（踊り場を含む）として、ＳＤ 07 －Ｂ・ＳＡ 26（第 74 図・第 37 表。図版 96)、ＳＡ 29（第 75 図・第 38 表。図版 97・98)、ＳＡ 16・ＳＤ 06 －Ｂ（第 76 図・第 39 表。図版 99 ～ 101)、ＳＡ 22、ＳＤ 07 －Ａ（第 77 図・第 40 表。図版 102 ～ 104)、ＳＳ 03 －Ａ（第 78 図・第 41 表。図版 105）の 8 基であった。これらの遺構でＳＡ 16（第 76 図）は校舎へ入る段階の踊り場があり、その直下を排水溝ＳＤ 06 －Ｂが東西方向に走っている。この排水溝は途切れながら東側のＳＳ 03 －Ａ（第 78 図）まで延びていくが、ＳＳ 03 －Ａは排水溝の底板（石灰岩製）のみ残存する程度で、縁石は後世の造成より破壊されている。また、南北方向に延びる排水溝として、ＳＡ 26 とＳＤ 07 －Ｂが一連（第 74 図）の遺構としてみなされる。校舎の基礎石の一部とみられるのは石積みＳＡ 29（第 75 図）の 1 基のみが確認され南北方向に延びていたようである。他に校舎へ南側から入る階段脇の縁石とみられる石積みＳＡ 22（第 77 図・第 40 表。図版 102 ～ 104）が検出されている。

次に東側の便所及び関連遺構については、建て替えが集中している為、便宜的に第Ⅰ期（首里第一小学校期：明治 45 ～昭和 16 年、若しくは首里第一国民学校期：昭和 16 年～昭和 20 年）・第ⅡＡ期（首里第一小学校期：明治 45 年～昭和 16 年）・第ⅡＢ期（『旧首里城平面図』：昭和 6 年頃）の三期に分けた（第 79・80 図)。

便所の建て替えがＳＤ 03（糞尿槽）を中心に二回（第Ⅰ期・第ⅡＡ期）の建て替えが確認される。その他ＳＤ 03 の南側にも隣接した便所の建物縁石（第ⅡＢ期）が確認されているが、第ⅡＢ期の便所が昭和 6（1931）年頃の『旧首里城平面図』にみえる便所と推定されるが位置関係においてずれが生じているようである。

便所（第Ⅰ期）のＳＡ 02・ＳＤ 03（第 79 図・第 42・43 表。図版 106 ～ 111）は、首里第一小学校開校時期の明治 45（1912）年以前、若しくは『旧首里城平面図』〔昭和 6（1931）年頃〕以降から昭和 20（1945）年までの時期が考えられる。それ以外に首里第一小学校開校時期の大正 1（1912）年後から昭和 6（1931）年以前までの 19 年間に使用された便所の可能性や『首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図』（明治 26：1893 年）以降から首里第一小学校開校（明治 45：1912 年）以前の学校関係（第 36 表参照。①沖縄師範学校、②沖縄師範学校付属小学校、③沖縄県尋常中学校⇒沖縄県立中学校分校、④首里区立工業徒弟学校、⑤首里女子実業学校）の便所跡の可能性もある。後者が可能性が最も高いものと思慮される。

その他、昭和 6 年頃の首里第一小学校校舎東側の便所（第ⅡＢ期）や区画石積み（ＳＡ 04）の遺構は、第 72 図の『旧首里城平面図』と遺構の重ね図から判断すると区画石積みと東側便所の位置が 220 ～ 450cm の範囲内で北側にずれているようで、西側便所の位置は、ほぼ一致するようである。

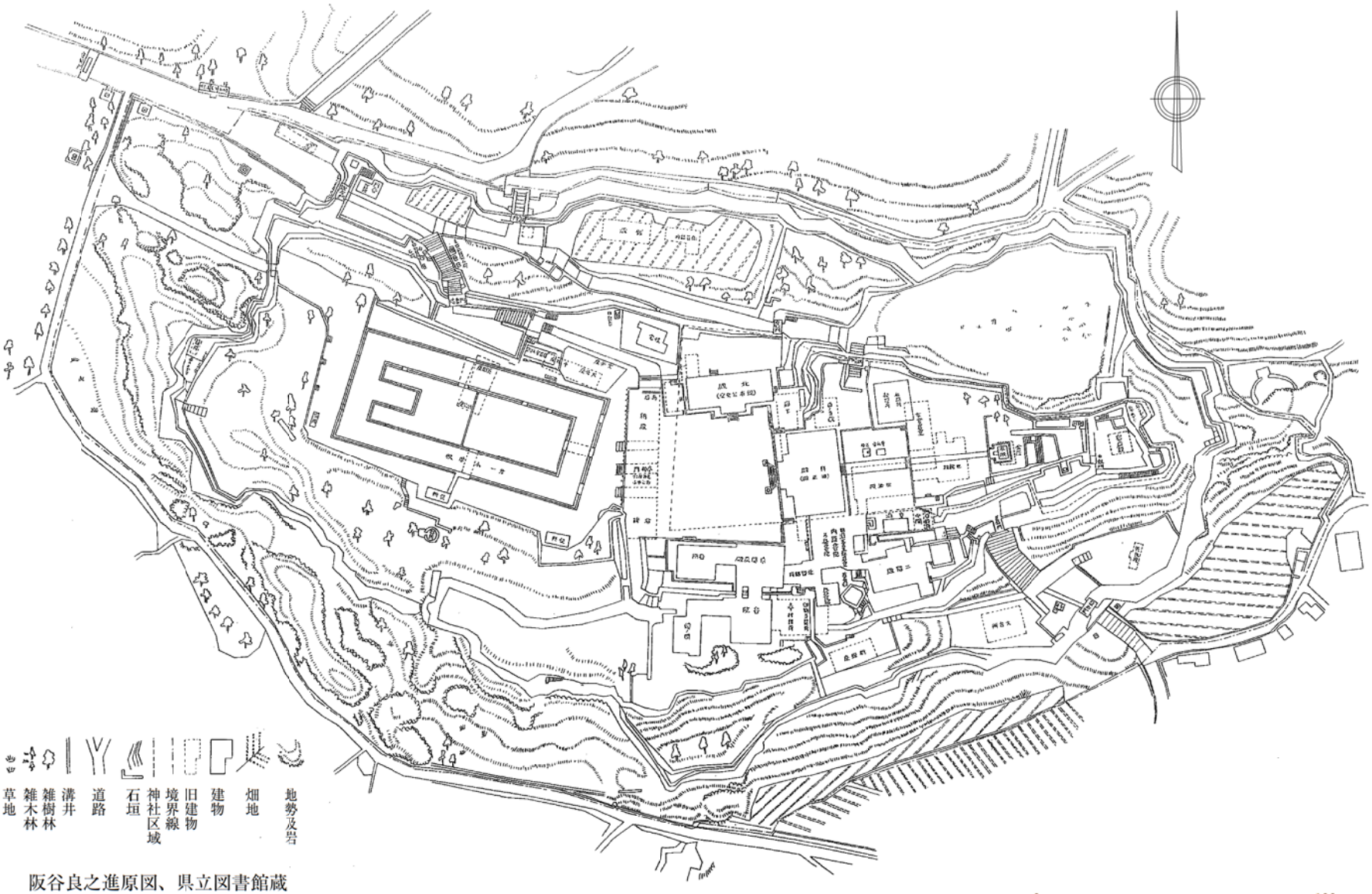
最後に「旧首里城図」に描かれていない遺構としてＳＡ 09 とＳＤ 05（第 81 図・第 44 表。図版 112 ～ 115）の建物と排水溝があり、南側に隣接する岩盤を斜位に成形し法面としている状況やＳＡ 09 内の床面から砲弾の破片などの状況から考えると首里第一国民学校の末期頃(昭和 20 年頃)に存在した学校施設の一部かもしれない。

註文献

註 14. 沖縄県史編集室所蔵 「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」 1893 年（明治 26)。

註 15. 保坂広志「ラジオ放送」／宮城悦二郎「ＡＫＡＲ」・「琉球放送（株)」沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983 年 5 月。

註 16. 阪谷良之進編集 「旧首里城図」 沖縄県立図書館所蔵 昭和 8 年頃（1933）作成。

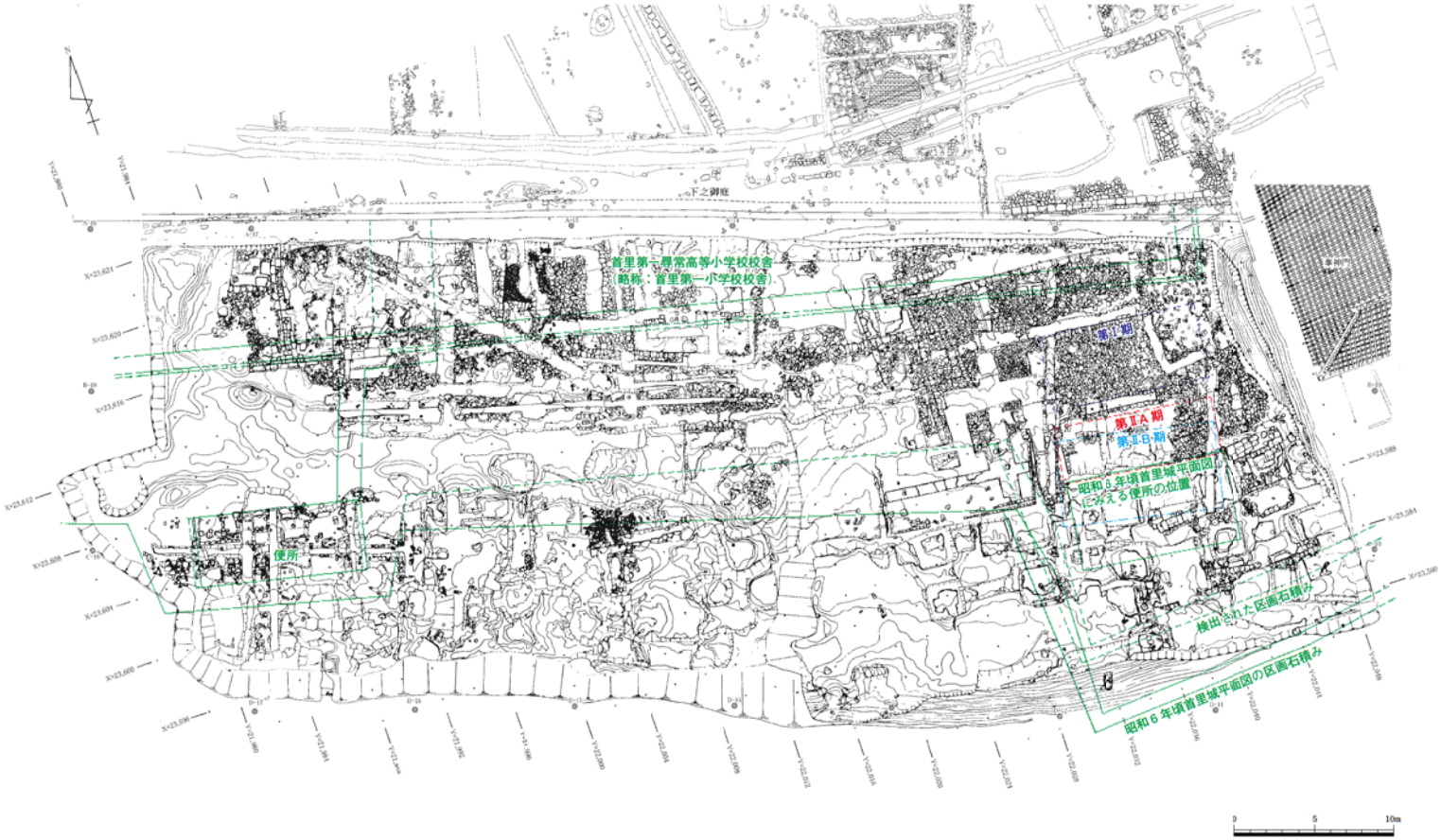


阪谷良之進原図、県立図書館蔵

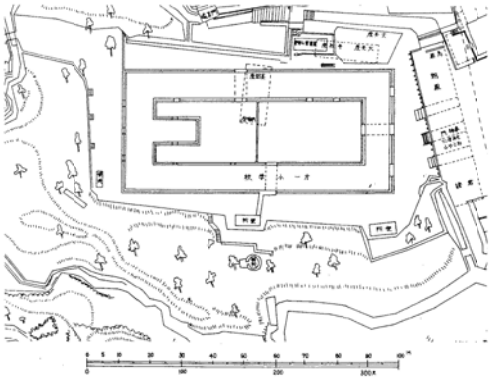
第 70 図　首里城平面図（昭和 6 年頃）

第Ⅵ期前半（19 世紀終末～昭和 20 年）の遺構
石積み SA02、SA09（建物跡）、SA16（階段）、SA22、SA26（溝の縁石）、SA29
溝 SD03（便所跡）、SD05、SD07-A、SD07-B、SD04-B
建物 SB01（便所跡）
石敷き SS03-A（溝の底板石）
排水溝⑤
※当該期まで存続していたとみられる石積み遺構として、SA04 が考えられる。

第71図　京の内北地区第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20年）遺構の推定復元



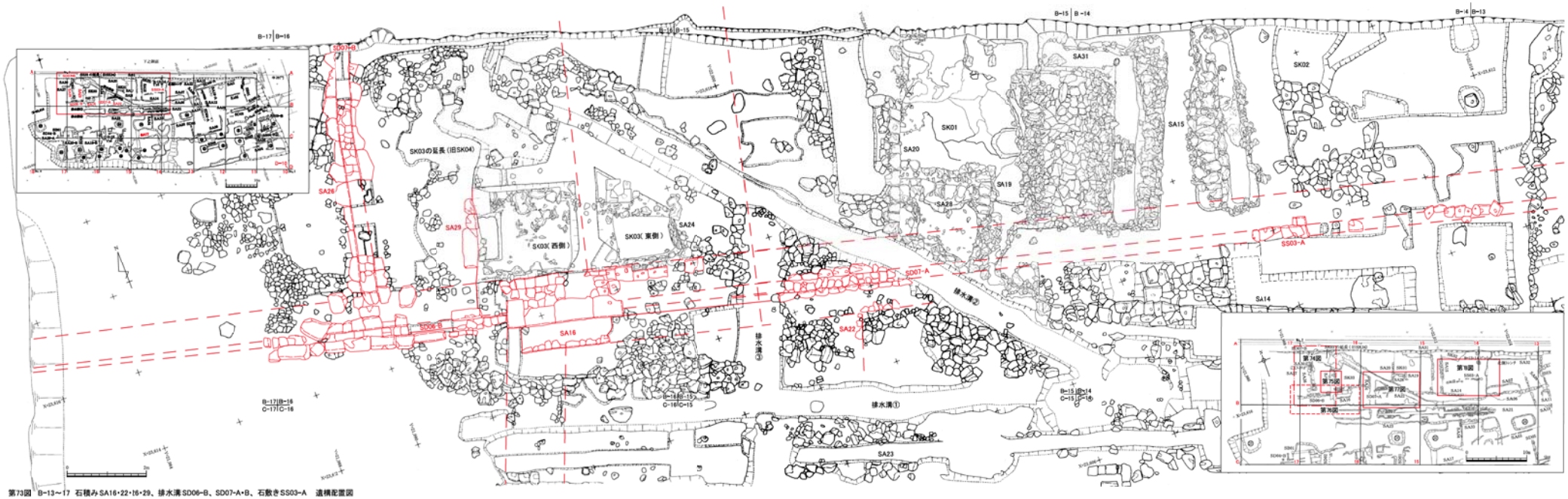
第72図　首里城平面図(昭和6年頃)と京の内跡検出遺構との重ね図



首里城平面図（昭和６年頃）阪谷良之進 原図

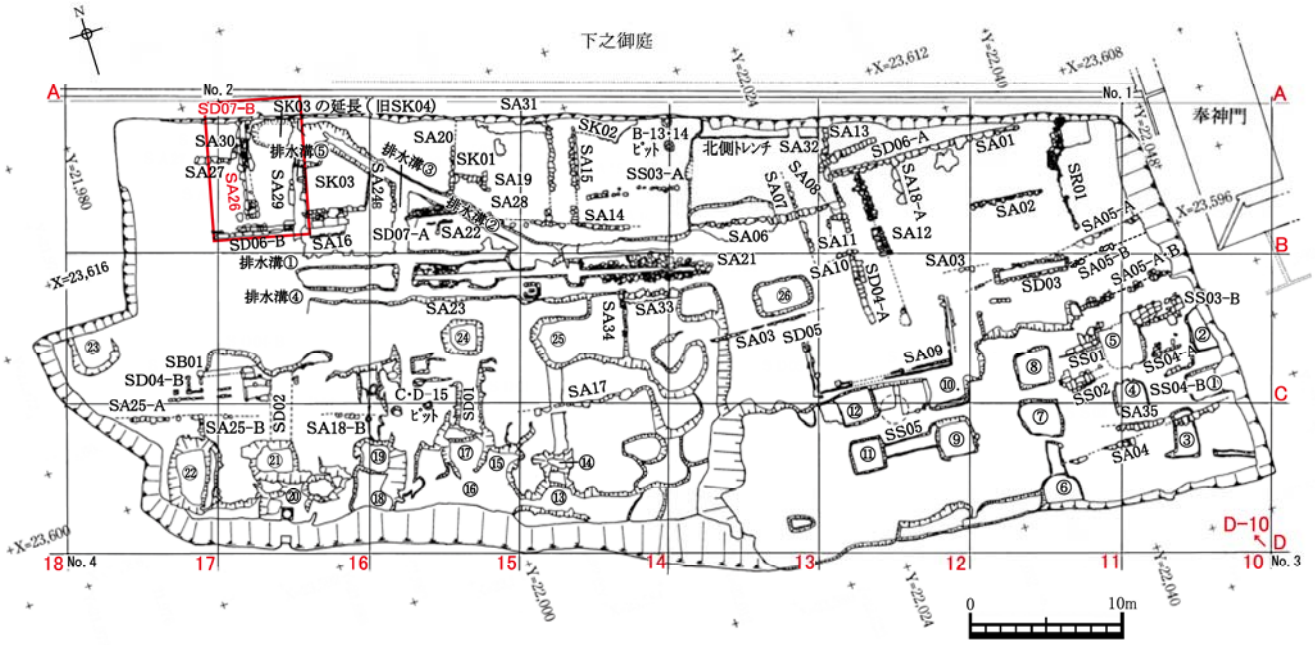
首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷①
第Ⅰ期：首里第一尋常高等小学校移転開校期
（明治45･大正元年～昭和16年）、若しくは首里第一国民学校期（昭和16年4月1日～昭和20年3月18日）の便所
※Ⅰ期：紫枠

首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷②
第ⅡA期：首里第一尋常高等小学校
（明治45･大正元年～昭和6年以前）頃の便所
第ⅡB期：首里第一尋常高等小学校（昭和6年頃）
に製作された『首里城平面図』にみえる便所
※ⅡA期：赤枠、ⅡB期：青枠



第73図　B-13～17　石積みSA16・22・26・29、排水溝SD06-B、SD07-A・B、石敷きSS03-A　遺構配置図

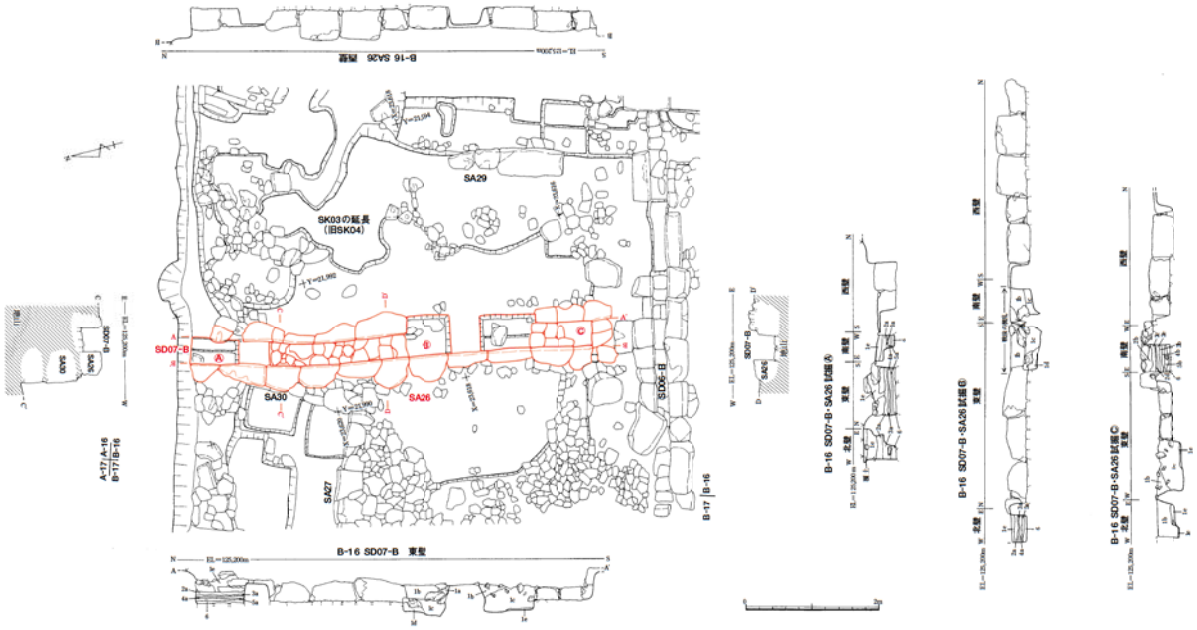
図版 95　上：(東より)、下：(西より)
B－14 ～ 17　SA16・22・26・29、SD06－B、SD07－A・B、SS03－A を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 37 表　第Ⅵ期前半　SA26、SD07－B　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－16 SA26 第71・73・74図	7m03cm 79cm 30cm	当該期のSD07－Bの排水溝の縁石。造成土や第Ⅳ期のSA30（第50図）の縁石などの上に設置。首里第一小学校。大正末期～昭和初期。	N12° 15′ E	切り石。 90°	25～76cm 23～50cm 18～36cm	SD07－Bが側溝の底板であり、SA26が同側溝の縁石である。SD06－B（第76図）、SD07－A（第77図）、SS03－A（第78図）とは一連の側溝である。
B－16 SD07－B 第71・73・74図	7m03cm 溝幅 36cm —	首里第一小学校校舎の排水溝。南北方向に残存。当該期のSD06－B（第76図）と暗渠で繋がっている。造成土盤や第Ⅳ期のSA30（第50図）の縁石直上から設置。板状に加工された切り石を底板とし、粗加工の切り石などを縁石として用いる。縁石はSA26として仮称した。	N12° 15′ E	切り石と板状の切り石。 —	底板石 4～36cm — 4～36cm	SD06－B（第76図）に直交し暗渠で繋がっている。



B-16 SD07-B 試掘Aの層序

覆土… 赤土。公園設備の客土で、谷和田開発マージ(新生代第四期更新世の国府層曙や千枚岩安山岩などに由来する)北陸でのみ観られる。

第1層a… 灰褐色土層(排水溝内に堆積した戦前の覆土①であるが撹乱を受けている。)

第2層a… 淡灰色土層(排水溝内に堆積した戦前の覆土②)

第3層a… 茶褐色混ゞ土層(床面a期:排水溝機能時の上層堆積土)。北壁では砂の代わりに小礫がをくなり、撹乱を受けて厚く12cm前後堆積する。

第4層a… 淡褐色土層(間層)。北壁での堆積は認められない。

第5層a… 茶褐色混ゞ土層(床面b期:排水溝機能時の中層堆積土)。第3層と類似する堆積層。

第6層… 淡黄色土層(床面c期:排水溝機能時の下層の堆積土)。排水溝の底面に堆積層であるが北壁では撹乱を受けて6~9cmと厚く堆積する。

B-16 SD07-B 試掘Bの層序

第1層a… 赤褐色土層(戦後の造成による撹乱層)。地山の赤褐色土(俗称:地尻マージ、第四紀更新世の硬質石灰岩の風化土。)

第1層b… 淡褐色土層(戦後の造成による撹乱)

第1層c… 茶褐色土層(戦後の造成による撹乱)。地山の赤褐色土が多量に混入。

第1層d… 淡褐色土層(戦後の造成による撹乱)

第1層e… 灰褐色土層(排水溝内に堆積した戦前の覆土①)

第2層a… 淡灰色土層(　〃　　戦前の覆土②)

第3層a… 茶褐色混ゞ土層(床面a期:排水溝機能時の上層堆積土)

第4層a… 淡褐色土層(間層)

第5層a… 茶褐色混ゞ土層(床面b期:排水溝機能時の中層堆積土)

第6層…… 淡黄色土層(床面c期:排水溝機能時の下層堆積土)

B-16 SD07-B 試掘Cの層序

第1層b… 淡褐色土層(戦後の造成による撹乱)

第1層c… 茶褐色土層(戦後の造成による撹乱)

第1層e… 暗褐色土層(戦後の造成による撹乱)。部分的に黒色土が含まれる。

第2層b… 淡褐色土層(排水溝蓋石直下に堆積した戦前の覆土③)

第2層c… 暗褐色土層(蓋石の下位に堆積した戦前の覆土④)

第2層d… 茶褐色混礫土層(蓋石の中位に堆積した戦前の覆土⑤)

第2層e… 淡黄色土層(蓋石の下位に堆積した戦前の覆土⑥)

第3層b… 黒褐色土混砂土層(床面a期:排水溝機能時の上層堆積土で赤土を若干含む。)

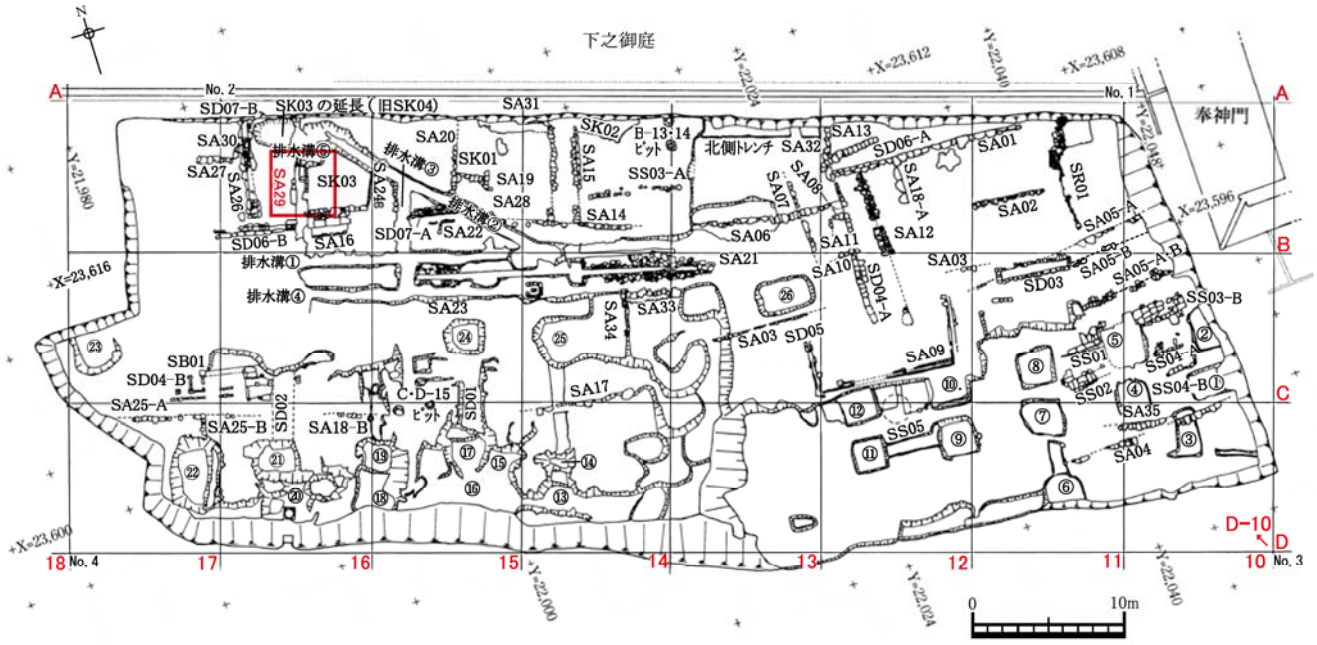
第4層b… 灰褐色土層(間層)

第5層b… 茶褐色混礫土層(床面b期:排水溝機能時の中層堆積土で礫を若干含む。)

第6層… 淡黄色土層(床面c期:排水溝機能時の下層堆積土)

第74図　B-16 石積みSA26、排水溝SD07-B　平面及び断面・層序

図版96　上段左：B-16 SA26、SD07-Bを南側上空より望む、上段右：B-16 SA26、SD07-B 北より南側を望む
中段　：同上 SA26、SD07-B 南より北側を望む、下段　：同上 SA26、SD07-B 西壁（東より）

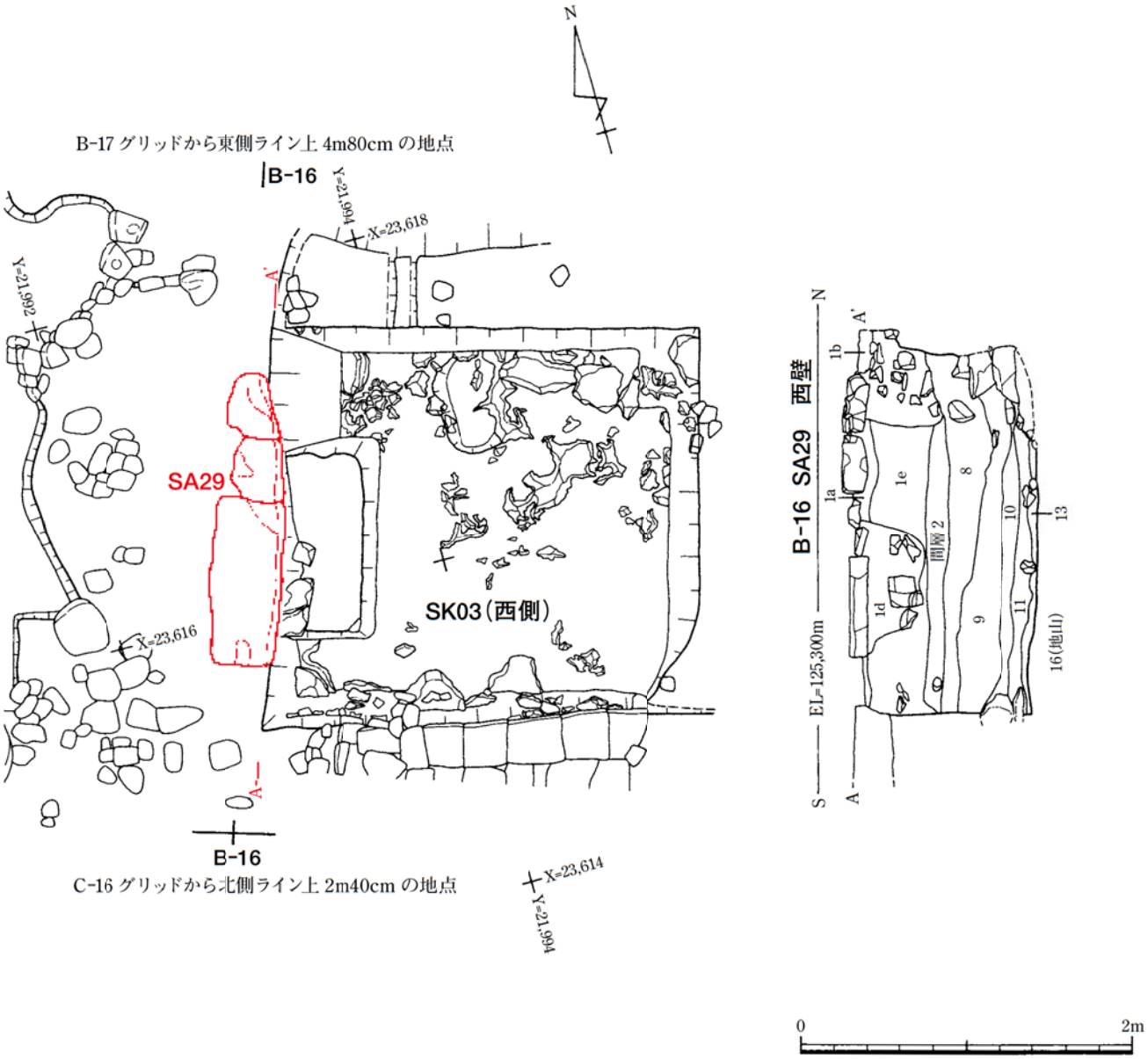


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 38 表　第Ⅵ期前半　SA29　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－16 SA29 第71・73・75図	1m68cm 43cm 10cm	小学校校舎の基礎（石列）か校舎の縁石か。第Ⅰ期の土壙SK03（第20図）の上に基礎石を直接設置。大正末期～昭和初期。	N17°35′E	切り石。 —	34～60cm 10～15cm 28～43cm	小学校の基礎の方向は当該期の遺構SA26やSD07－Bより主軸方向が北から東へ5°20′寄っていて当該遺構とは平行しない。

前Ⅵ半期



第75図　B-16 石積みSA29　平面及び層序

B-16 SA29（SK03西側）の層序 西壁

第1層a… 灰黄色土層（昭和6年頃の首里第一尋常高等小学校校舎造成土。以下「造成土」）

第1層b… 淡黄色土層（第3層a・第3層b）が混ざった撹乱層。造成土。

第1層c… 暗褐色混礫土層（第4層）がブロック状に混ざった撹乱層。造成土。

第1層d… 暗茶色混土礫層（造成土）

第1層e… 暗褐色土層

間層2… 黒褐色土層。SK03（西側）の西壁と類似の層。

第8層… 淡灰黒色土層。3cm前後の石灰岩の小磯や二枚貝（マルスダレガイ科アラスジケマンガイ）、炭などが混入する。部分的に北壁では 10～50cm 大の赤土の塊が入っている。

第9層… 灰黒色土層。第Ⅱ層と同系色の色合で、5㎜前後の赤土の塊とクチャの塊が僅かに混入。

第10層… 灰褐色土層。人頭大の石灰岩礫が部分的に混入する。

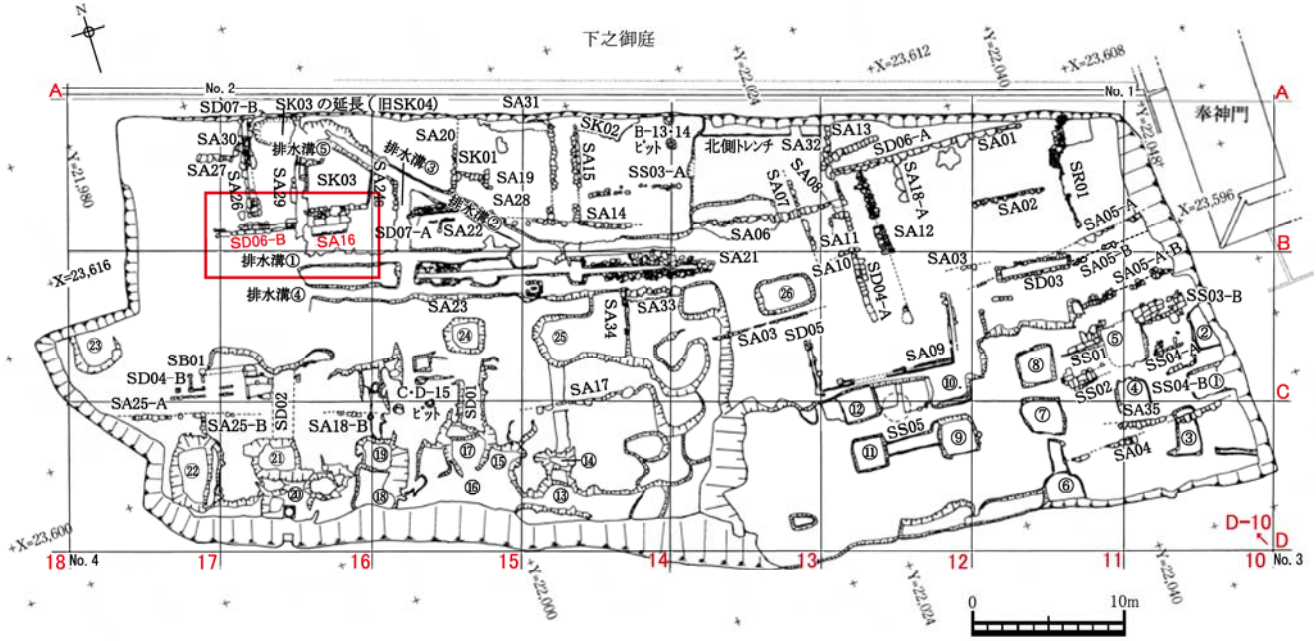
第11層… 淡灰色土層。3～10㎜程度の赤土の塊が多量に混入し、炭が多く含まれている。その他に10cm 前後の石灰岩礫が混入する。

第13層… 黄褐色土層で粘性の強い土質。2㎜前後の赤土の塊が混入し、炭も含まれる。

第16層… 赤褐色土層。地山。

図版 97　上：B－16 SA29 ほかを西側上空より望む
　　下：同上　SA29　西壁（東より）

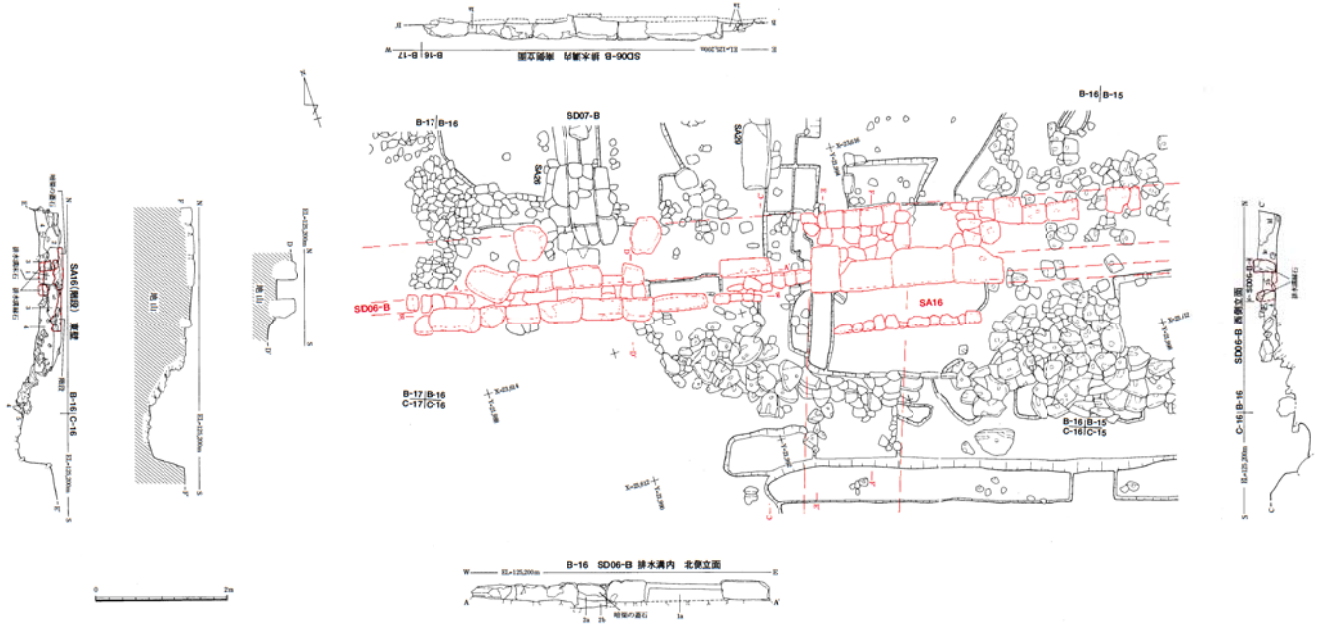
図版 98　上：B－16 SA29　西壁（東より）
　　下：同上 SA29　北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 39 表　第Ⅵ期前半　SA16、SD06－B　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－15・16 SA16 第71・73・76図	2m94cm 1m25cm —	首里第一小学校校舎に入る階段の踏面の縁石。階段直下にある側溝の蓋石も兼用する。縁石から南側の箇所にも階段の踏面の縁石が平行して存在し、踏面にはセメントが敷かれている。造成土の上に設置。大正末期～昭和初期。	N77°　00′　W	切り石敷き。 —	15～94cm 15～25cm 13～60cm	当該期の遺構であるSD06－B（第76図）、SD07－A（第77図）、SS03－A（第78図）は一連の排水溝。昭和8（1933）年頃に阪谷良之進が編集した「旧首里城図」（県立図書館所蔵）に本遺構が描かれている。
B－16・17 SD06－B 第71・73・76図	9m03cm 20cm 32cm	首里第一小学校校舎の排水溝。南西方向に残存。板状に成形した切り石を底板に用い、厚みのある切り石を縁石として使用する。土盤は造成土である。縁石および底板の石はセメントで塗付して仕上げている。	N76°　45′　W	切り石と板状の切り石。 —	縁石 27～34cm 10～34cm 29～80cm 底板石 12～20cm 4～7cm 17～47cm	当該期の遺構SD07－A（第77図）、SS03－A（第78図）は一連の排水溝。



B-16・17 SD06-B(排水溝内)の層序

第1層a… 灰褐色土層。排水溝掘削後に内部に堆積した土砂でもあるが、一部においては、排水溝の縁石を設置した際に使用された造成土でもある。

第2層a… 黄褐色土層(排水溝蓋石直下に堆積した戦前の覆土②)
SD07-B(排水溝)及びSA26(排水溝縁石:SD07-B)との接続部分に堆積層(NHK14年調査の1)調査区が出土。

第2層b… 暗褐色土層(排水溝蓋石の下層に堆積した戦前の覆土②)

B・C-16 SA16(敷設)の層序

覆土… 灰褐色土層(地山の土砂が混入。)

第1層… 灰褐色土層(排水溝内に堆積した土砂。)

第2層… 黄褐色土層(地山の土砂を利用した土盛材で北側にのる堆積。)

第3層… 灰褐色土層(造成土盛に排水溝の縁石を設置する際に掘り込まれた部分に投入された土砂であるが、溝の南側では土色の色合いが灰茶色となる。)

第4層… 灰褐色混礫土層(SA16及び排水溝構築時の造成土盛で、排水溝南側では赤土が混入する。)

第5層… 黄褐色土層(地山:新世代第四紀更新世の硬質石灰岩の風化土、指鞍島尻マージ。)

B・C-16 SD06-B 西側立面の層序

(SA25西側の南壁及び西壁と共通、SA25西側の南壁及び西壁参照。)

第1層a… 灰黄色混礫土層、SA25及び排水溝①との接続部分のSD06-Bの排水溝内部に堆積する。シルト質泥炭の風化土である石粉クチャと石灰岩の小礫が混入する層。

第1層b… 暗茶色混礫土層(SA25縁石及びSD06-Bの敷石直下の造成土)

第1層c… 暗褐色土層(赤土や暗灰色土が混入する。炭も若干混入。)
(B-16 SA16の東壁層序と共通、B-16 SA16東壁層序参照。)

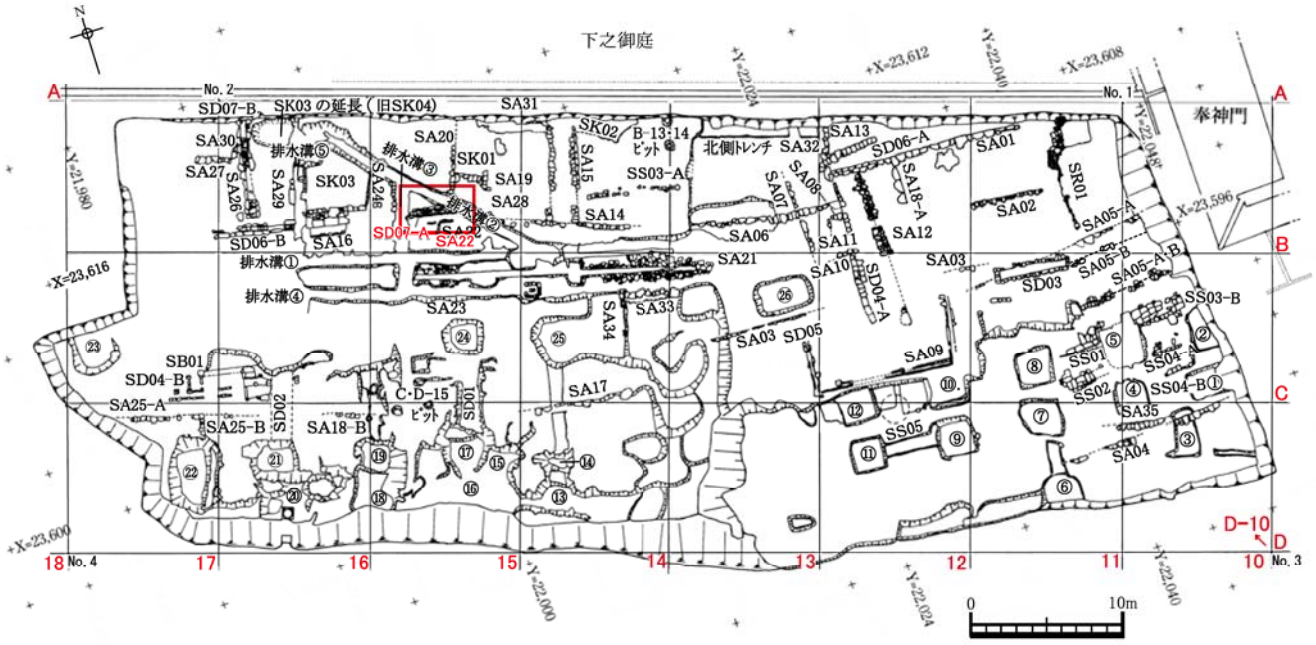
第4層… 灰褐色混礫土層(SD06-Bの排水溝構築時の造成土盛)

第76図　B-15～17 石積みSA16、排水溝SD06-B　平面及び層序

図版 99　上：B－15 ～ 17 SD06－B、SA16 を南側上空より望む
下：B－16・17 SD06－B　北壁（南より）

図版 100　上：B－15 ～ 17 SD06－B、SA16　南より北側を望む
　　下：B－15・16 SA16　南より北側を望む

図版 101　上：B－15･16 SA16　南より北側を望む
　　下：B－15 ～ 17 SD06－B､SA16　西より東側を望む

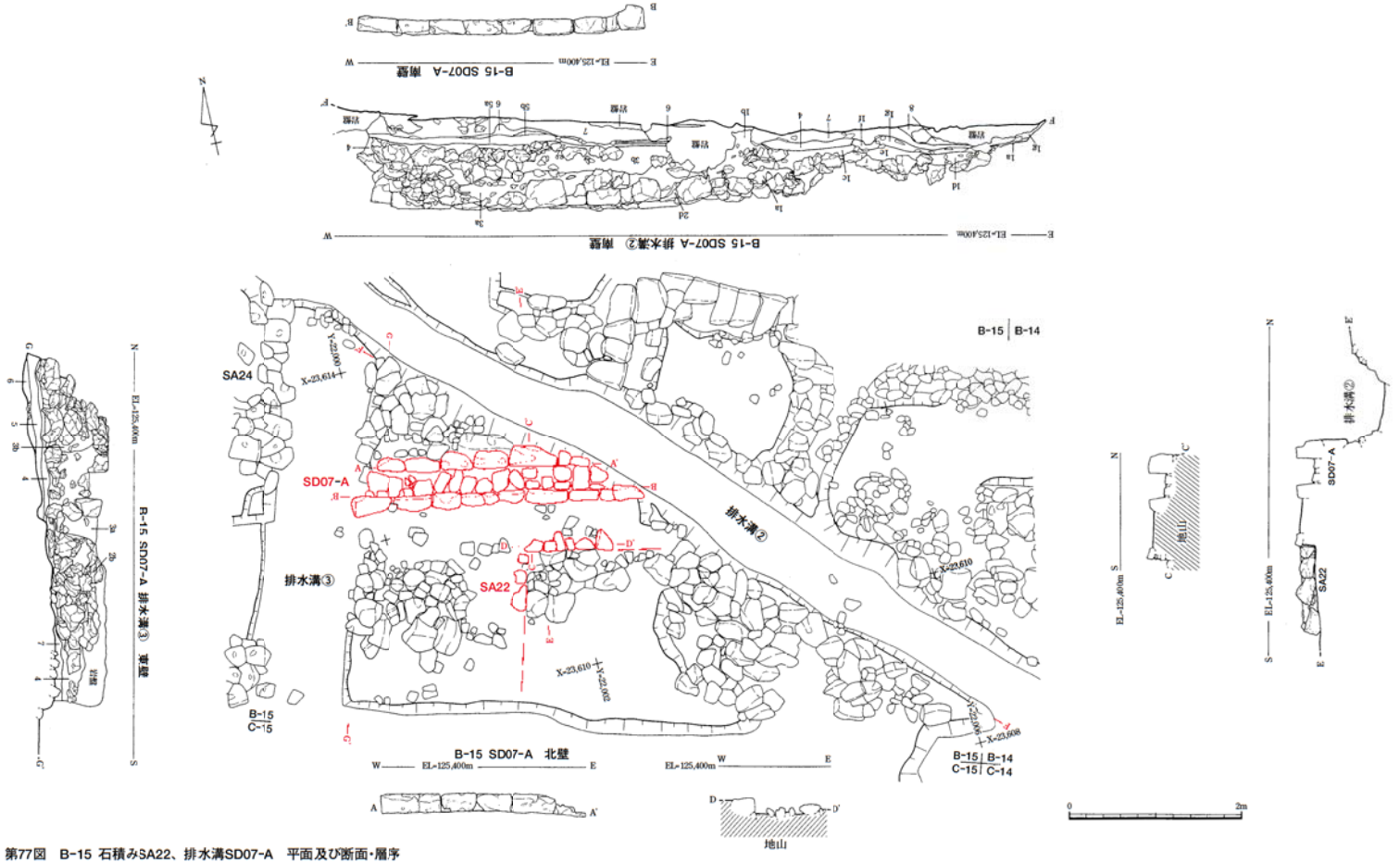


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第40表　第Ⅵ期前半　SA22、SD07－A　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－15 SA22 第71・73・77図	1m03cm 1m16cm 21cm	首里第一小学校校舎の側溝周辺の階段などの縁石か。南北方向に短く、東西方向に長く残存。	N19°　15′　E	野面石と切り石。 —	14～32cm 17～19cm 16～39cm	当該期の遺構SD07－A（第77図）と平行する時期とみられる。
B－15 SD07－A 第71・73・77図	18m35cm 27cm —	首里第一小学校校舎の排水溝。東西方向に途切れながら残存し、西側のSD06－B（第76図）や東側のSS03－A（第78図）と繋がっていく。造成土の上に板状に加工した切り石などを設置。	N77°　00′　W	切り石と板状の切り石。 —	縁石 15～29cm 11～25cm 13～48cm 底板石 8～25cm — 14～38cm	当該期の遺構SD06－B（第76図）、SS03－A（第78図）とは一連の排水溝であり途切れながら繋がる。

前Ⅵ半期



第77図　B-15 石積みSA22、排水溝SD07-A　平面及び断面・層序

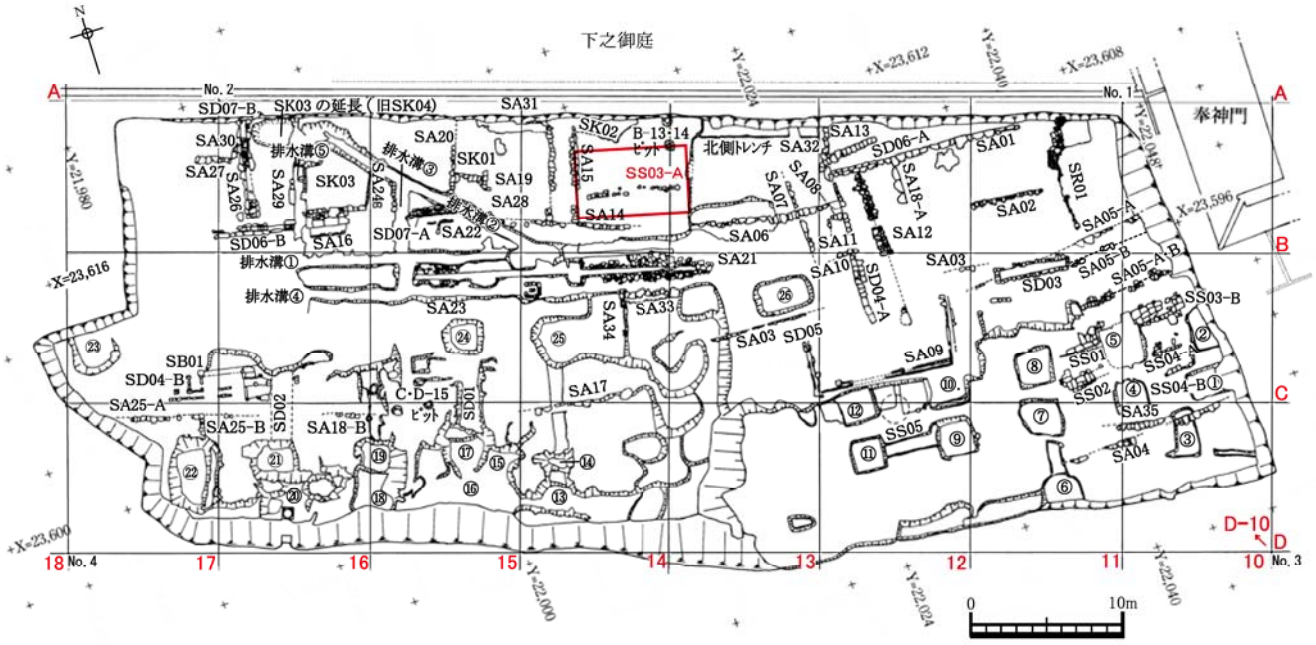
B-15 SD07-A 層序（排水溝①北壁、排水溝②南壁、排水溝③東壁）

第１層a… 淡灰色混礫土層①（戦後の攪乱層。北壁及び南壁の東端と南壁中央寄りに僅かな堆積がみられる。）
第１層b… 灰褐色土層（戦後の攪乱層。南壁の中央寄りに部分的な堆積がみられる。）
第１層c… 淡灰色混礫土層②（　〃　）
第１層d… 淡褐色土層（戦後の攪乱層。南壁の東寄りに部分的な堆積がみられ、地山の赤褐色土と暗褐色土が混入する。）
第１層e… 赤褐色土層①（戦後の攪乱層。南壁及び北壁の最下層で確認されている地山と同一層。）
第１層f… 黒褐色土層①（戦後の攪乱層。間層で南壁にのみ僅かに堆積。）
第１層g… 灰黒色混礫土層（戦後の攪乱層。第４層のプライマリーな層が攪乱されて、小礫が多く混入。）
第２層g… 淡灰色混礫土層③（遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。北壁の西寄りに僅かに堆積する。）
第２層b… 黄褐色土層（SD07-A の遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。北壁で部分的な堆積がみられ、東壁ではSD07-Aの南側縁石直下で僅かな堆積がみられる。）
第２層c… 赤褐色土層②（SD07-A の遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。戦時中に火熱を受け土色が変色する。赤瓦片や炭が混入する。北壁で部分的に堆積。）
第２層d… 黄褐色混土礫層（遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。南壁の中央付近で僅かに堆積する。）
第３層a… 灰褐色混礫土層（遺構直下の造成土。排水溝直下の造成土で、南壁と東壁のみに堆積。）
第３層b… 淡灰色混礫土層③（SD07-A 構築以前の SA22 関連の造成土。北壁・東壁・南壁の各面で確認される。）
第４層… 黒褐色土層②（北壁・東壁・南壁の各面に堆積。）
第５層a… 茶褐色混礫土層（主に北壁の中央より西側に堆積し、東壁では北側に堆積する。）
第５層b… 茶褐色土層（間層。南壁の西寄りに薄く堆積する。）
第６層… 黒褐色土層③（間層。南壁の西側及び東壁に途切れながら堆積する。炭が多く混入する。）
第７層… 赤褐色混礫土層（地山の赤褐色土が多く混入し、北壁・東壁・南壁の各面でみられる。）
第８層… 赤褐色土層（南壁及び北壁で部分的に観察される。）

図版 102　上：B－15 SA22、SD07－A を西側上空より望む
　　下：同上　SA22、SD07－A を北側上空より望む

図版 103　上：B－15 SA22、SD07－A　南より北側を望む
　　下：同上　SA22、SD07－A　西より東側を望む

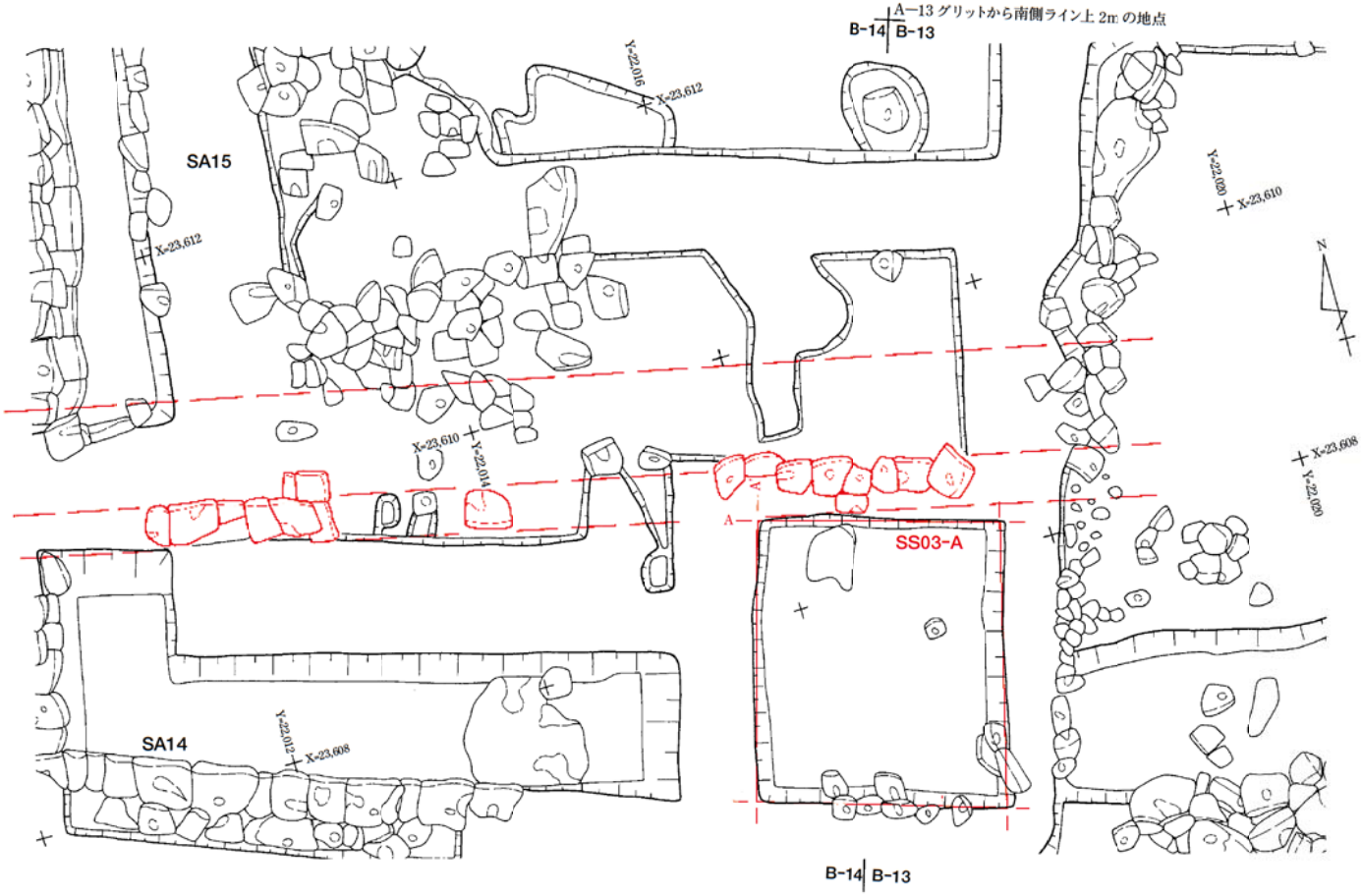
図版 104　上：B－15 SD07－A　南壁（北より）
　　下：同上　SD07－A　東より西側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 41 表　第Ⅵ期前半　SS03－A　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－13・14 SS03－A 第71・73・78図	7m8cm 32cm —	小学校校舎に伴う排水溝の底石。造成土の上に設置。縁石は戦後の造成工事で消失している。底板は琉球石灰岩を板状に加工した板石を用いる。大正末期～昭和初期。	N77°　45′　W	切り石や板状の切り石 —	16～40cm — 16～28cm	昭和8（1933）年頃に阪谷良之進によって編集された「旧首里城図」（県立図書館所蔵）に描かれた小学校の側溝。当該期の遺構SD07－B（第74図）、SA16（第76図）、SD07－A（第77図）、SD06－B（第76図）などが関係する。SD07－A（第77図）とSD06－B（第76図）、SD07－B（第74図）は一連の排水溝である。



B-13・14　SS03-A の層序

第１層 a…淡灰色混礫土層（撹乱層。東壁のみに薄く堆積する。）

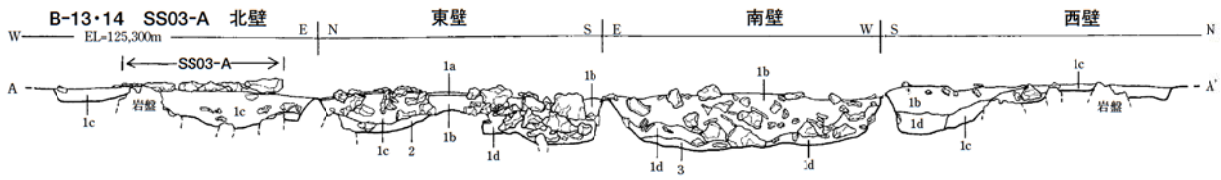
第１層 b…灰褐色混礫土層①（戦後の撹乱とみられ、拳大から人頭大の大振りの石灰岩礫や瓦片などが多く混入する。B-14 SA14 東側トレンチ東壁の第1層 b 相当層であるが、色調や土色が一致しないようである。）

第１層 c…灰褐色混礫土層②（1923年に開校した首里第一小学校の造成土盤で、校舎排水溝の底石である SS03-A が本層上面に設置されている。小振りの石灰岩礫や地山の赤土が混在する。）

第１層 d…灰褐色土層（北壁を除いて各壁でその堆積がみられるが、西壁では撹乱を受けて層位が上層の第１層 c と入れ替わり逆転する。地山の赤土が混入する。）

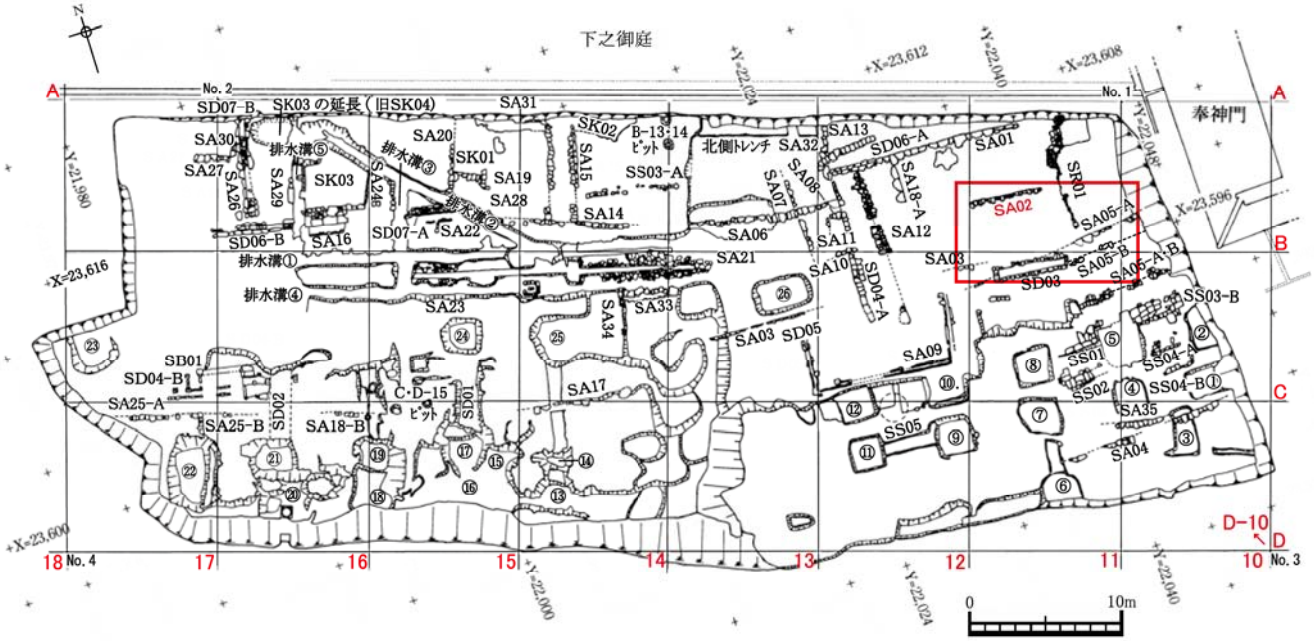
第２層…　暗褐色土層（東壁の北寄りにのみ堆積する。）

第３層…　黄褐色土層（地山。南壁の東側で確認される。）



第78図　B-13・14 石敷きSS03-A　平面及び層序

図版105　上段左：B-13・14　SS03-Aを南側上空より望む、上段右：B-13・14　SS03-A　西より東側を望む
中段　：　同上　SS03-A南より北側を望む、　下段　：　同上　SS03-A　北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 42 表　第Ⅵ期前半　SA02　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－11 SA02 第71・79図	5m30cm 4m50cm 34cm	首里第一尋常高等小学校の建物（便所入り口にある踊り場）の縁石。第Ⅱ期のSA01（第25・28図）の栗石の一部とみられる直上に土砂を敷いて地固めの後に石積み。小振りの切り石を用いて目地をセメントで埋め合わせて面の仕上がりを意識する。便宜的に第Ⅰ期（大正元年～昭和20年）の便所とした。便所の規模は東西9m99cm（5間半）、南北4m76cm（2間半強）を計る。	N84° 00′ W	小振りの切り石。 83° 一番石の勾配94°	15～32cm 14～20cm 15～45cm	当該期のSD03とほぼ同一方向。SA02はSD03よりも若干、古い時期から存在か。

首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷①

第Ⅰ期：首里第一尋常高等小学校移転開校期（明治45・大正元年～昭和16年）、若しくは首里第一国民学校期（昭和16年4月1日～昭和20年3月18日）の便所

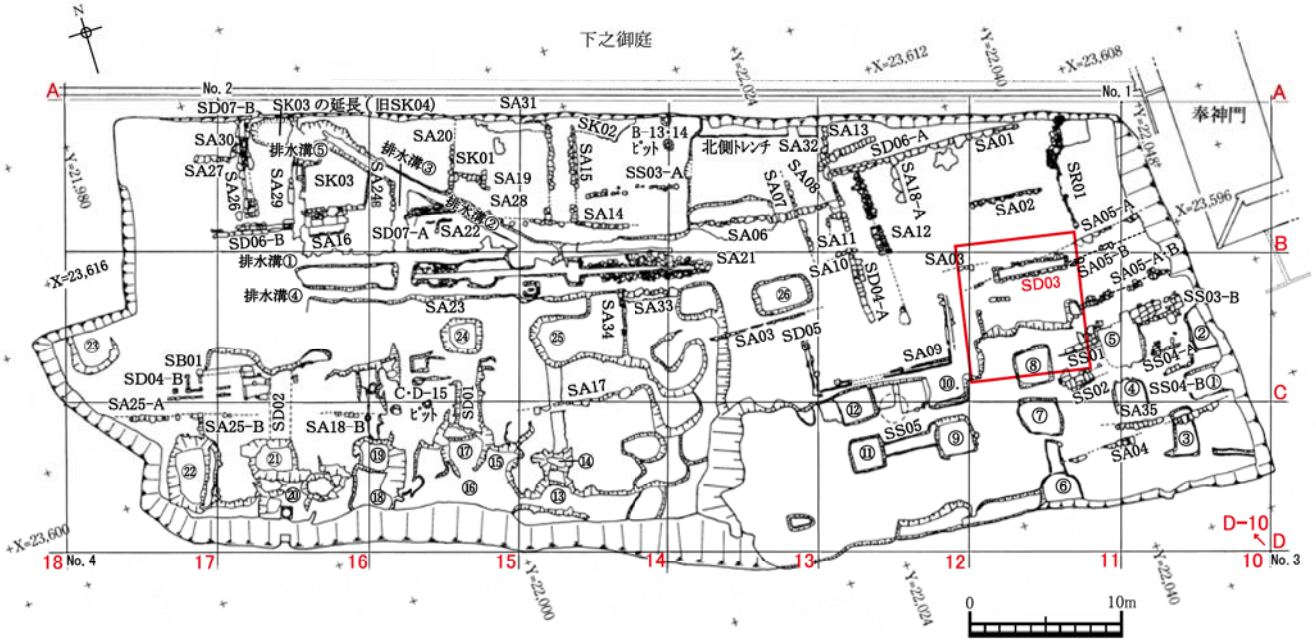
※C-11　SD03内観察用畦の層序については、Ⅱ期で説明。

第79図　B・C-11 便所：第Ⅰ期（石積みSA02、溝SD03）　平面及び断面

図版 106　上：B-11　SA02 ほかを南側上空より望む
　　下：同上　SA02　東より西側を望む

図版 107　上：B-11 SA02　北より南側を望む
　　下：同上 SA02　北東より南西側を望む

図版 108　上：B－11　SA02　北西より東南側を望む
　　下：同上　SA02　ﾄﾚﾝﾁ内を西より東側を望む

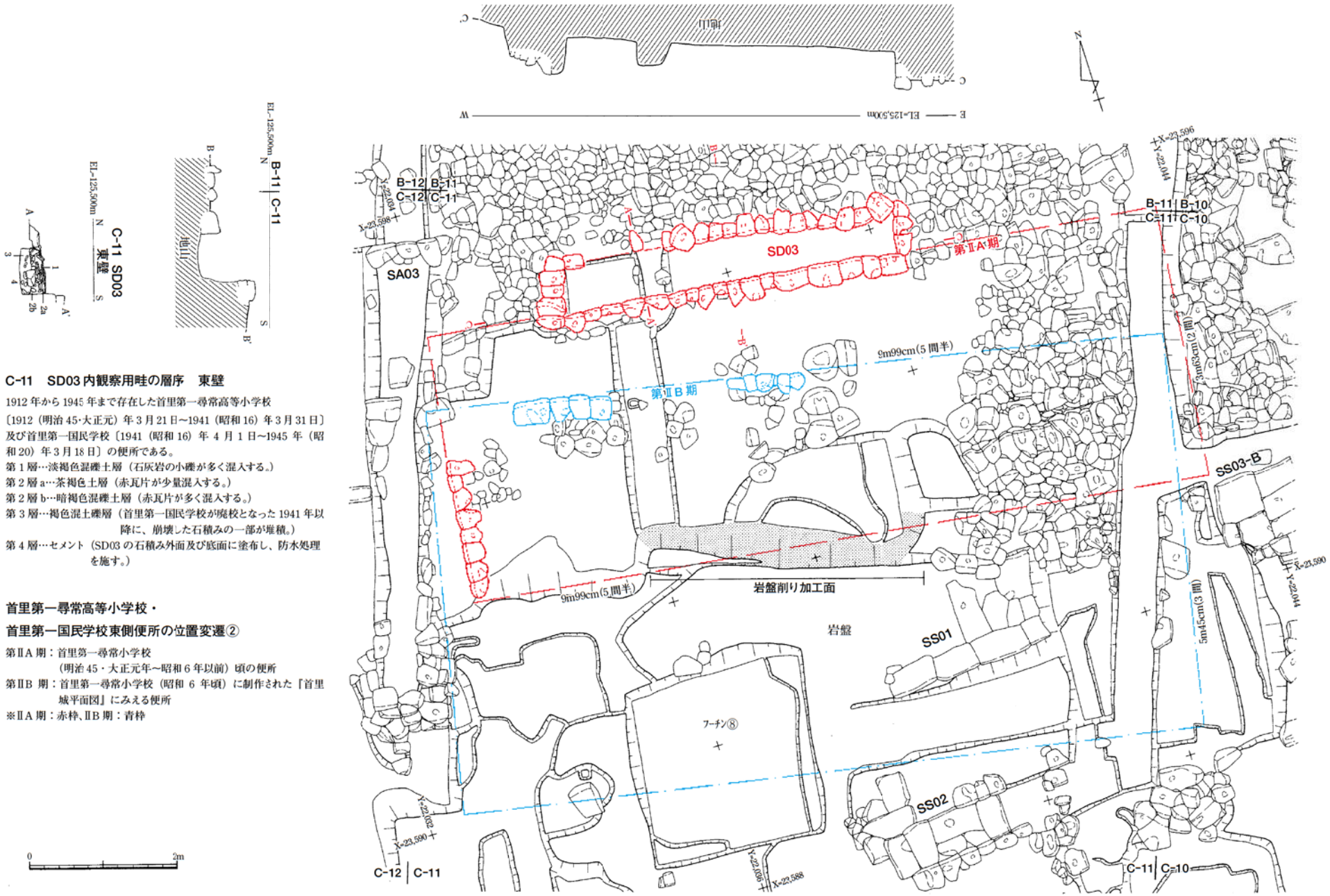


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 43 表　第Ⅵ期前半　SD03　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B・C－11 SD03 第71・80図	4m50cm 60cm 50cm	首里第一尋常高等小学校の便所の糞尿槽。当該期のSA02（第79図）の栗石を掘り下げて構築。床面及び内部の壁は漆喰にセメントを混合したものを塗布。漆喰を補強する為にセメントを混入させたものとみられる。縁石は小振りの切り石を用いていて目地に漆喰とセメントを用いたモルタルを塗布。床面よりガラス製の御弾（オハジキ）が多く出土している。他に大正10年製のニッケル五銭硬貨が出土している。当該遺構を中心に第Ⅰ期（大正元年～昭和20年）と第ⅡA期（大正元年～昭和6年以前）と区分した。SD03の南側にも便所とみられる建物の縁石が確認されたので第ⅡB期（昭和6年頃）とした。便所の規模は第ⅡA期が東西9m99cm（5間半）、南北3m63cm（2間）と推定した。次に第ⅡB期が東西9m99cm（5間半）、南北5m45cm（3間）と推定した。この第ⅡB期の便所が阪谷氏編集の「旧首里城図」に実測された便所（第70・72図）とみられる。	N94°　45′　W	小振りの切り石。 ―	15～46cm 14cm 13～33cm	当該期のSA02とほぼ同一方向。西隣りの試掘坑で第Ⅱ期のSA05－Aの外面の石積み（第30図）が検出されている状況などから当該遺構SD03の直下にSA05が存在する可能性が高い。昭和8（1933）年頃に阪谷良之進編集の「旧首里城図」（県立図書館所蔵）に本遺構が便所として描かれていて、「旧首里城図」の便所と検出された便所の位置関係で第ⅡB期と近接している。

前Ⅵ半期



C-11　SD03 内観察用畦の層序　東壁

1912 年から 1945 年まで存在した首里第一尋常高等小学校〔1912（明治 45･大正元）年 3 月 21 日～1941（昭和 16）年 3 月 31 日〕及び首里第一国民学校〔1941（昭和 16）年 4 月 1 日～1945 年（昭和 20）年 3 月 18 日〕の便所である。

第 1 層…淡褐色混礫土層（石灰岩の小礫が多く混入する。）
第 2 層 a…茶褐色土層（赤瓦片が少量混入する。）
第 2 層 b…暗褐色混礫土層（赤瓦片が多く混入する。）
第 3 層…褐色混土礫層（首里第一国民学校が廃校となった 1941 年以降に、崩壊した石積みの一部が堆積。）
第 4 層…セメント（SD03 の石積み外面及び底面に塗布し、防水処理を施す。）

首里第一尋常高等小学校・
首里第一国民学校東側便所の位置変遷②

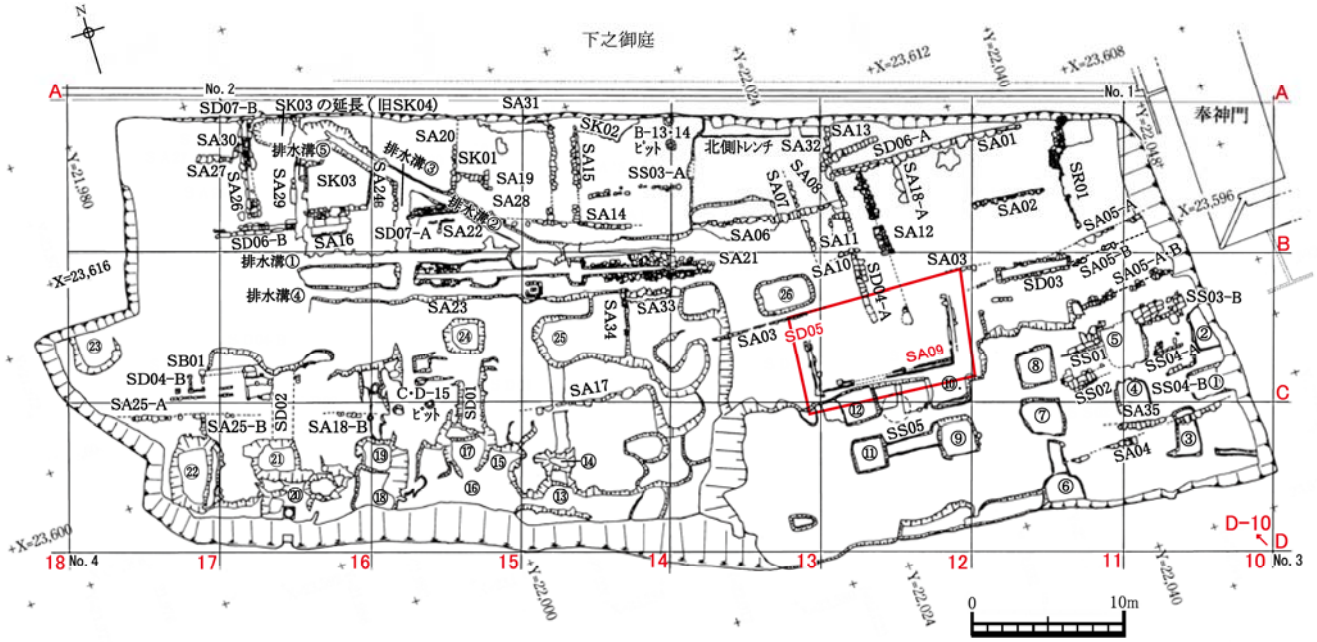
第ⅡA 期：首里第一尋常小学校（明治 45・大正元年～昭和 6 年以前）頃の便所
第ⅡB 期：首里第一尋常小学校（昭和 6 年頃）に制作された『首里城平面図』にみえる便所
※ⅡA 期：赤枠、ⅡB 期：青枠

第80図　B･C-11 便所：第Ⅱ期（溝SD03ほか）　平面及び断面・層序

図版 109　上：B･C－11　SD03 ほかを南側上空より望む
　　下：　同上　　SD03　東より西側を望む

図版 110　上：B･C－11 SD03　北より南側を望む
　　下：　同上　　SD03 の一部を北より南側を望む

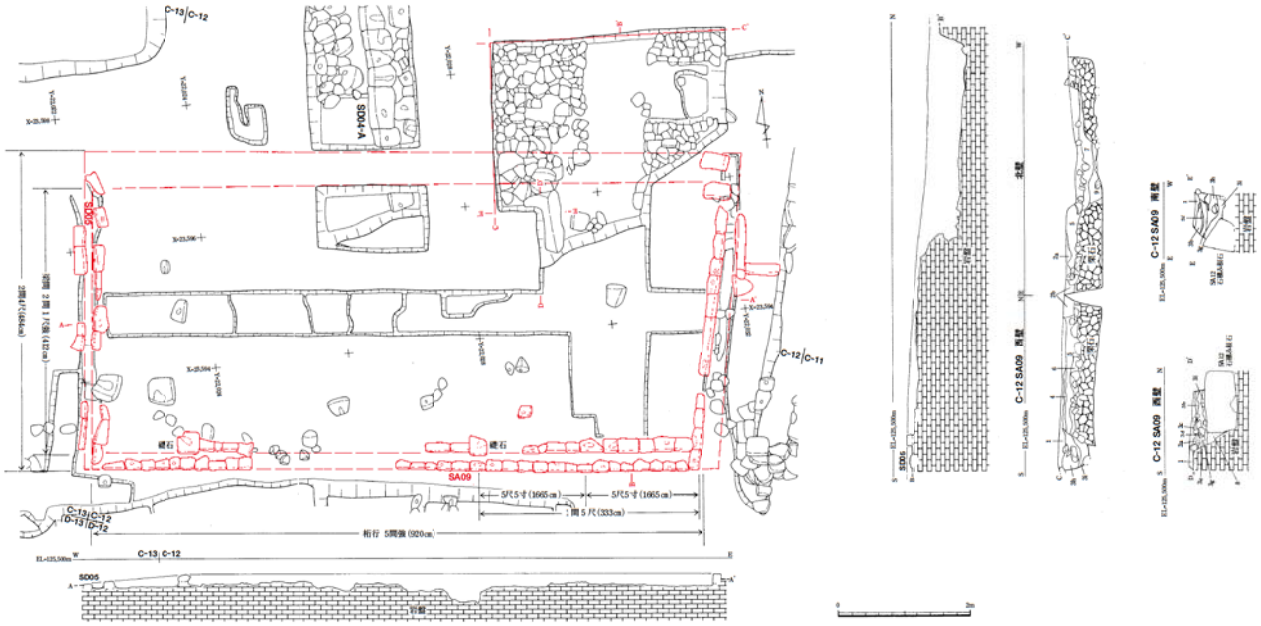
図版 111　上：B・C−11　SD03 内　西壁（東より）
　　下：　同上　SD03 内　東壁（西より）



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 44 表　第Ⅵ期前半　SA09、SD05　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C－12・13 SA09 第71・81図	9m18cm 4m30cm 8cm	昭和8年以降～昭和20年頃までに存在した建物。北側の一辺を欠くが東西方向に長い建物。造成土の上に建物の縁石と礎石、そして排水溝を設置する。礎石の間隔は80cmの間隔。縁石は石灰岩をレンガ様に丁寧に面取りした切り石を主に用いる。縁石周辺から板ガラスの破片が検出。床面の土盤から砲弾破片が検出される。	N83°　30′　W	レンガ様に成形した切り石。 —	16～40cm 8～14cm 13～20cm	建物SA09の西隣には排水溝SD05を付属する。昭和8年頃作製の「旧首里城図」には描かれていない。
C－13 SD05 第71・81図	3m88cm 16cm 深さ 10cm	昭和8年以降～昭和20年頃までに存在した建物に付属する排水溝。南北方向に途切れながら存在。排水溝は造成土の上を掘り抜いてからレンガ状に加工した切り石を設置。縁石及び溝の底板や溝内部に漆喰を塗付。	N6°　30′　E	レンガ様の切り石。 —	10～20cm 10cm 20～43cm	建物遺構SA09に付属する排水溝。



C-12・13　SA09 北側試掘壙（SA12石積み南側延長部）　層序

第1層… 淡茶色混礫土層（主に西壁に堆積がみられる。部分的に黄色土が混在する。）
第2層… 茶褐色混砂土層（間層。北壁のみ堆積する。）
第2層… 茶褐色混土礫層（間層。北西隅のみ堆積する。）
第3層… 黒褐色土層（間層。西壁のSA12根石上部に僅かに堆積する。細片化した棟瓦や小礫が混入する。）
第3層… 茶褐色土層（間層。小礫や砂が混入する。）
第3層… 淡褐色混砂土層（間層。西壁のSA12根石上部に堆積する。）
第3層… 淡茶色土層（間層。西壁のSA12根石上部に僅かに堆積する。）
第3層… 淡褐色混砂土層（間層。西壁のSA12根石上部の南端に堆積する。）
第3層… 黒褐色土層（間層。南壁にのみレンズ状に薄く堆積する。）
第3層… 茶褐色混礫土層（間層。棟瓦・瓦片・炭などが混入する。）
第3層… 茶褐色土層（間層。SA12根石裏込目石上部に堆積し、部分的にブロック状に黒褐色土層や茶色の土が混入する。小礫や瓦などを含む。）
第3層… 淡茶色混礫土層（間層。SA12根石や裏込目石の直上に堆積。）
第4層… 橙褐色土層（間層。西壁のみ堆積する。小礫が多く混入する。当試層からSA12石積み設置時に沿壁まで掘り下げた際の穴で、SA12石積みを再利用を目的に石積みを抜き取った穴とみられる。）
第5層… 淡茶色土層（西壁から北壁に堆積し、小礫を多く含む。）
第6層… 淡茶色混土礫層（西壁の栗石直上に堆積する。）
第7層… 黒褐色混礫土層（栗石直上に堆積し、主に北壁でみられる。）
第8層… 淡茶色土層（間層。SA12石積み根石と記盤の隙間に堆積し、砂が混入する。）
第9層… 黄褐色混礫土層（地山の赤土が造成により礫が混在か。）

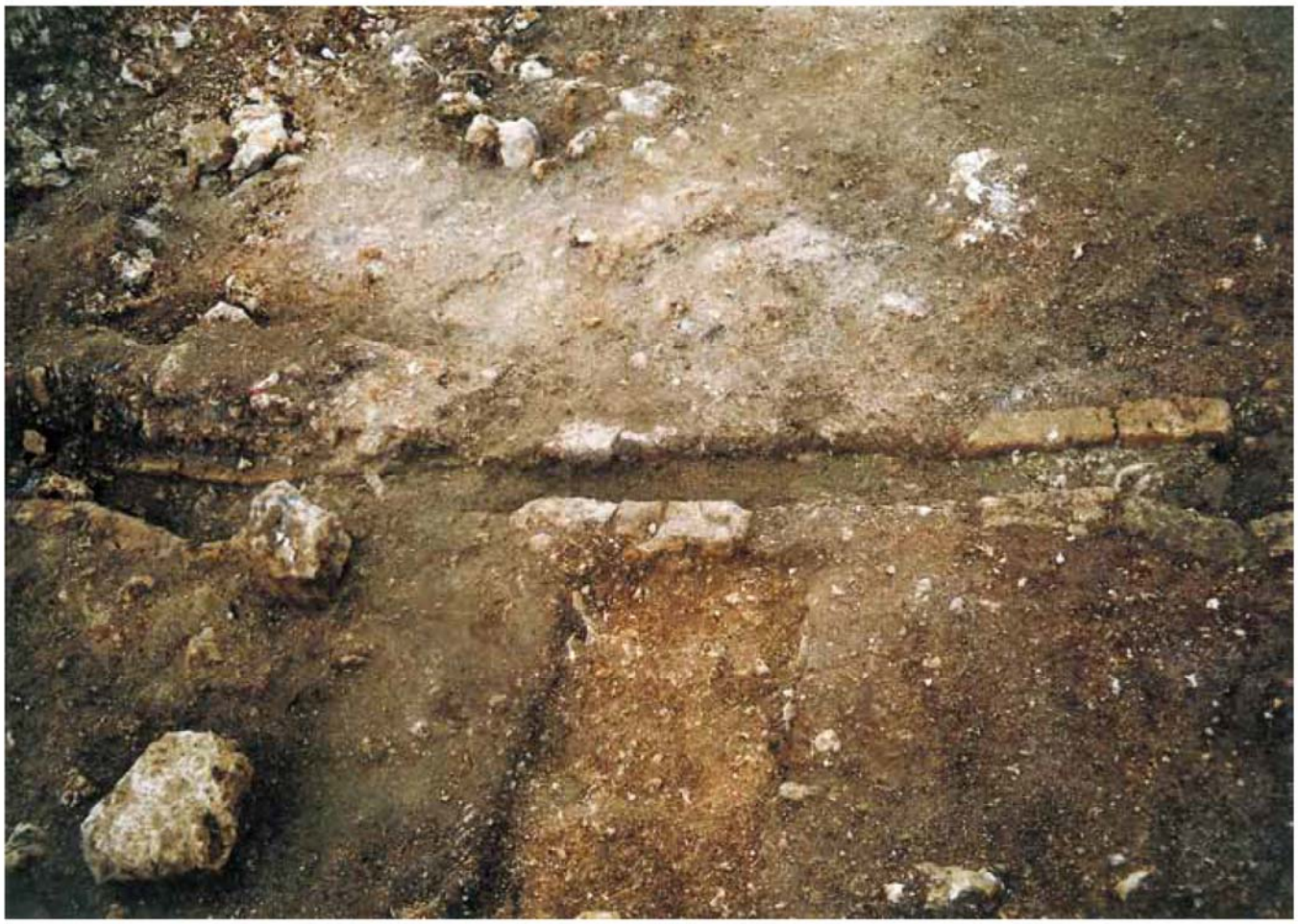
第81図　C-12・13 石積みSA09、排水溝SD05　平面及び層序

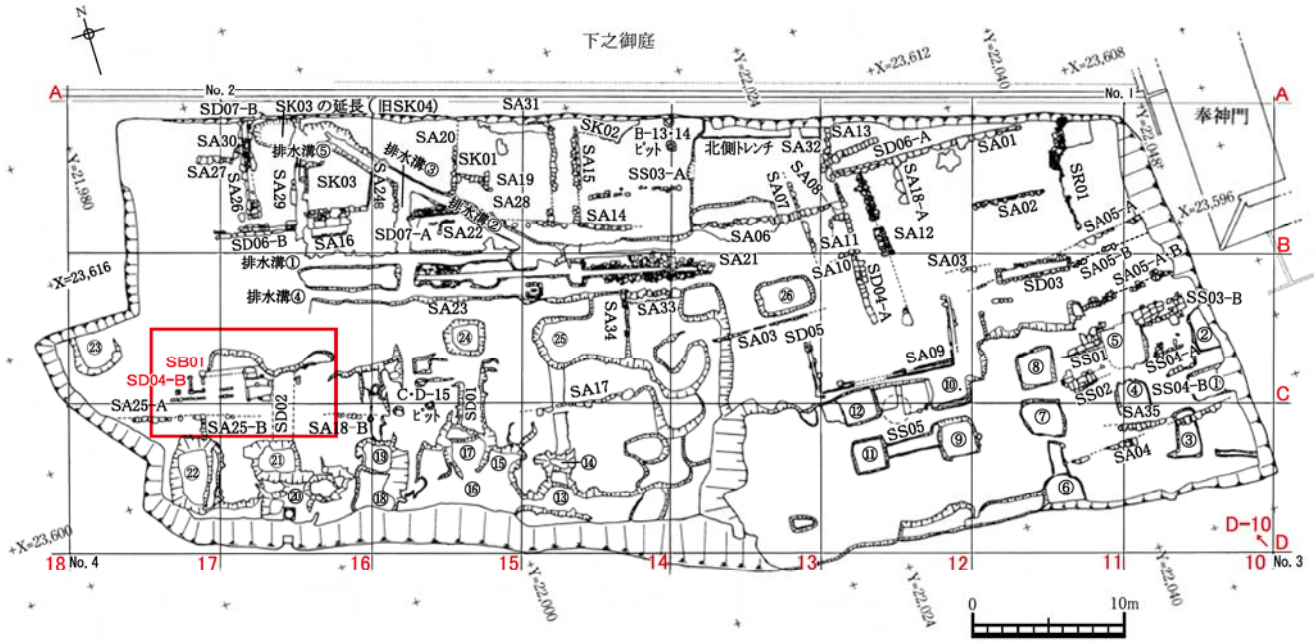
図版 112　上：C-12・13 SA09、SD05 を北側上空より望む
　　下：　同上　SA09　西壁（東より）

図版 113　上：C－12・13 SA09　南より北側を望む
　　下：　同上　SD05、SA09　南より北側を望む

図版 114　上：C－12・13 SA09　西より東側を望む
下：C－13 SD05　北より南側を望む

図版115 上段左：C-12・13 SA09、SD05 東より西側を望む、上段右：C-13 SD05 東より西側を望む
下段 ： 同上 SA09、SD05 東より西側を望む

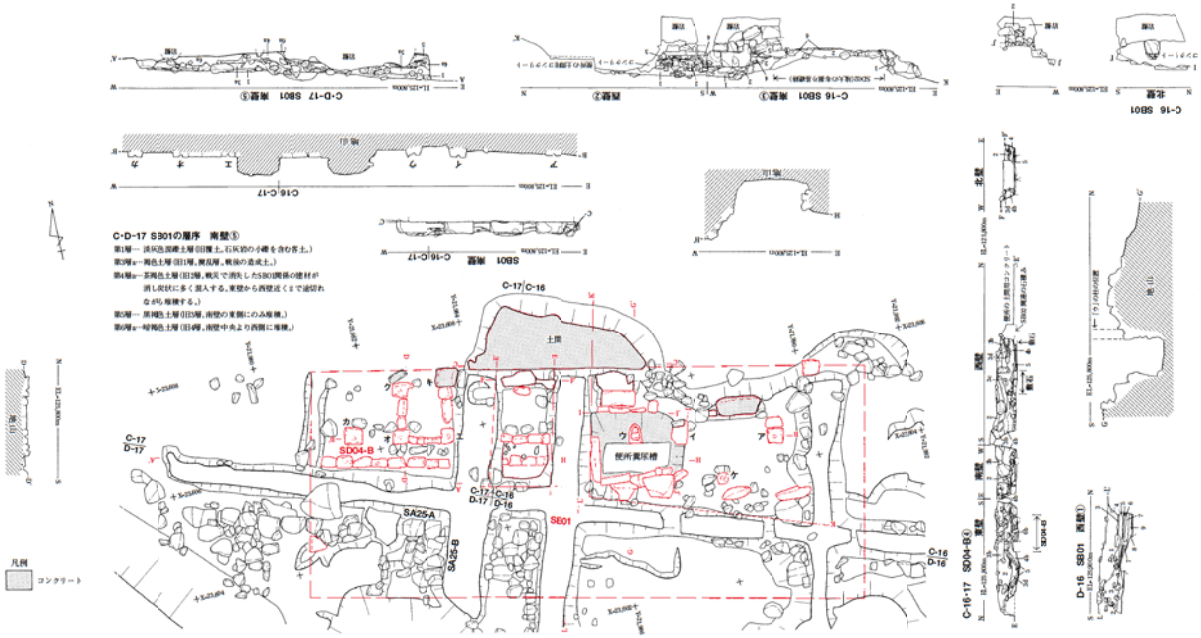




「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第45表　第Ⅵ期前半　SD04－B、SB01　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D－ 16・17 SB01 第71・82・83図	6m56cm 2m40cm —	首里第一小学校の便所。建物のサイズは第83図のとおり東西軸の長さ（桁行）が875cm（5間弱。復元による桁行1050cm。）、南北軸の長さ（梁行）が350cm（2間弱。復元による梁行4375cm。）であった。当該遺構の一部は、琉球王国時代の区画石積みを利用するが大半はレンガ状に加工した琉球石灰岩製の切り石を用いる。大正元年～昭和8年頃。	N77°　20′　W	切り石とレンガ状の切り石。 —	18～64cm — 16～44cm	昭和8（1933）年頃の阪谷良之進編集の「旧首里城図」（第70図）に描かれた便所そのものであり、ほぼ当該遺構と重なる（第72図）。
C・D－ 16・17 SD04－B 第71・82図	3m28cm 1m20cm —	首里第一小学校の便所内の小便用の溝。小便用の溝は東側にある糞尿槽に流れる。便所入口は北側にあり、土間はコーラル混じりの造成土の上にセメントを塗付。大正元年～昭和8年頃。	N77°　26′　W	切り石。 —	— — —	昭和8（1933）年頃の阪谷良之進編集の「旧首里城図」（第70図）にみえる便所とほぼ一致する。



C-D-17 SB01の層序　南壁⑤

第1層― 淡灰色混礫土層(旧攪土、石灰砕の小礫を含む客土。)
第2層a―褐色土層(旧1層、攪乱層、戦後の造成土。)
第4層a―茶褐色土層(旧2層、戦災で消失したSB01関係の建材が消し炭状に多く混入する。東壁から西壁近くまで途切れながら堆積する。)
第5層― 黒褐色土層(旧3層、南壁の東側にのみ堆積。)
第6層a―暗褐色土層(旧4層、南壁中央より西側に堆積。)

D-16　SB01の層序　西壁①

第1層― 黄褐色見土礫層(戦後造成のコーラル層、攪乱層)
第2層― 褐色混礫土層(　　〃　　、攪乱層)
第3層― 暗褐色土層(茶褐色土が混じっている。炭や陶器片などが含まれる。)
第4層― 黒褐色土層(グスク時代の遺物包含層)
第5層― 橙褐色混礫土層(層厚は2mm前後と薄く、途切れながら堆積する。)
第6層― 灰黒色土層(第7層を切るような形での堆積が見られる。)
第7層― 茶褐色混礫土層(上層の第6層の一部が本層に入り込んだ状態で堆積する。)
第8層― 明褐色混礫土層
第9層― 黄褐色混礫土層(地山の黄褐色土に礫が混在した状態にある。)

C-16　SB01の便所糞尿槽部分の層序　西壁②

第1層― 黄褐色見土礫層(戦後の造成用コーラル層、攪乱層)
第2層― 灰黒色瓦層(戦災で消失したSB01:便所の屋根瓦が割れて堆積した瓦屋りの層、関連層としてC-16　SD04-Bの第4層bがある。)
第3層― 赤褐色土層(C-16　SD04-Bの第4層b と同一層とみられる。)
第4層― 暗褐色土層(黒褐色土が混じっている。C-16　SD04-Bの第5層相当層と見られる。戦災直後に遺構直上に堆積したようである。)

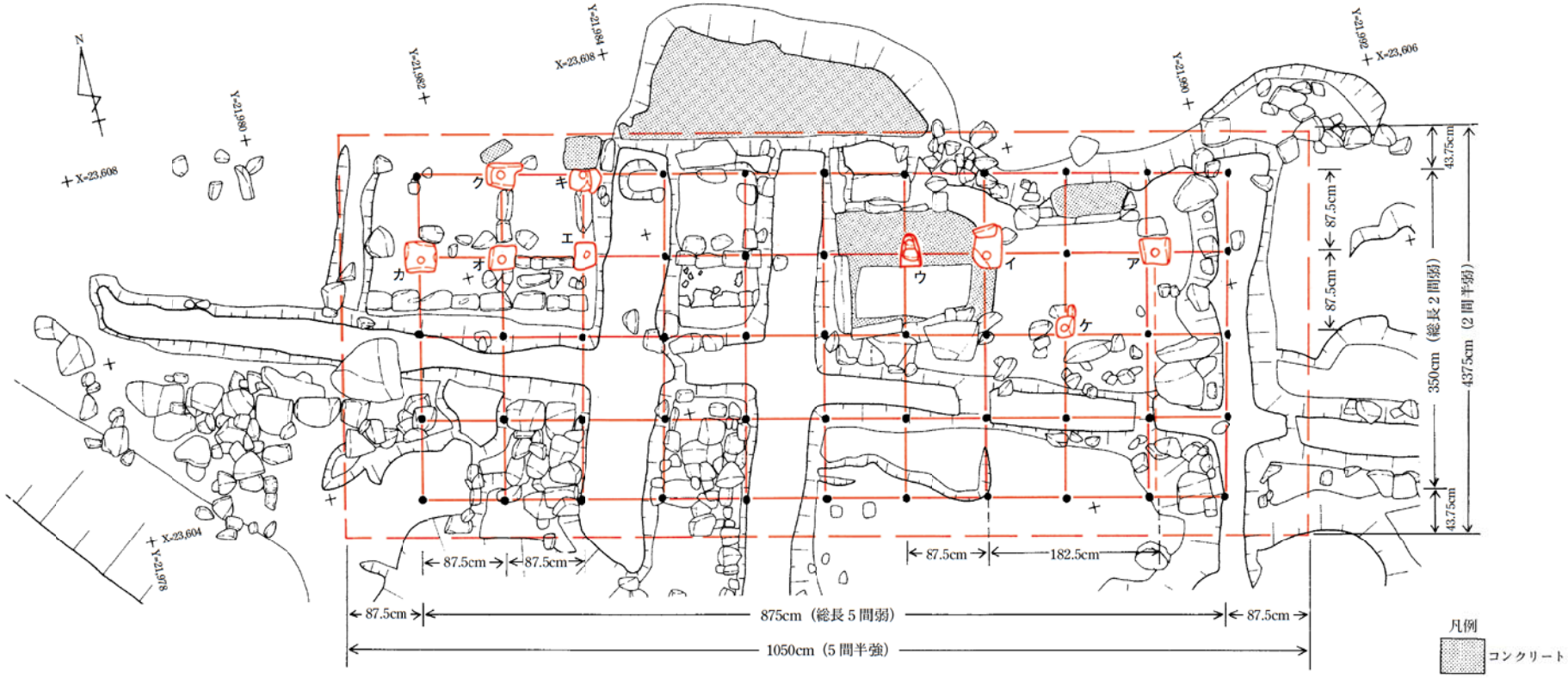
C-16　SB01の便所糞尿槽部分の層序　南壁③(関連層：C-16 西壁②)

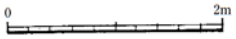
第1層― 暗黄色見土礫層(戦後の造成コーラル層、攪乱層で、東側と西側のみ堆積する。)
第2層― 淡灰色混土礫層(戦後の攪乱層、琉大時代の校舎基礎跡が溝状に南北方向に走っていた為、壁面中央で大きく窪んでいる。)
第3層― 暗褐色土層(D-16 西壁の第3層と同一層)
第4層― 黒褐色土層(D-16 西壁の第4層と同一層で、グスク時代の遺物包含層である。)
第5層― 橙褐色土層(D-16 西壁の第5層と同一層とみられるが、僅かにその堆積が切り石積みの目地の間から観察できる程度である。)
第6層― 茶褐色混礫土層(D-16 西壁の第7層と同一層で、壁面中央付近に途切れながら薄く堆積する。)

C-16・17　SD04-Bの層序　東壁～北壁④

第2層― 暗黄色混礫土層(旧1層、攪乱層、各壁面に途切れながら堆積する。)
第3層b―暗褐色混礫土層(旧2層c、北壁を除いて、東壁・南壁・西壁で途切れながら堆積する。東壁では第1層と層位が逆転する。)
第3層c―暗褐色礫層(間層、西壁のみ堆積する。)
第3層d―橙褐色土層(旧3層a、東壁・西壁・北壁に部分的な堆積がみられる。)
第4層b―赤褐色土層(旧3層b、戦災で消失したSB01:便所の屋根が混在する土層で、部分的に瓦屋りを形成する。)
第5層― 黒色土層(旧4層、戦災で消失したSB01関連の建築部材が消し炭となって混入する。)
第6層b―明褐色混礫土層(旧5層、南壁と西壁に途切れながら堆積する。)

第82図　C・D-16・17 建物SB01、排水溝SD04-B　平面及び断面・層序





第46表　C･D-16･17 SB01（便所）の規模
〔柱間：5間半（桁行10間桁行柱間寸法約半間等間）、2間半（梁間4間）・梁行柱間寸法約半間等間〕

柱間	サイズ（cm）	備考
ア・イ	182.5（≒2間）	正規間数1間との差、+7mm
イ・ウ	87.5（半間弱）	正規間数半間との差、-3.4cm
エ・オ	87.5（半間弱）	同上
オ・カ	87.5（半間弱）	同上
キ・ク	87.5（半間弱）	同上
エ・キ	87.5（半間弱）	同上
ク・オ	87.5（半間弱）	同上

※1間＝181.8cm　半間＝90.9cm

※残存する柱間ア～クまでの距離、792.5cm（4間半弱≒4.5間＝818.1cm）
正規間数 4.5 間との差 25.6cm

※長軸方向の柱間は5間（909.0cm）であるが、図上での実際の距離は5間で875.0cmを測る。その誤差は−34cmと小さくなっている。

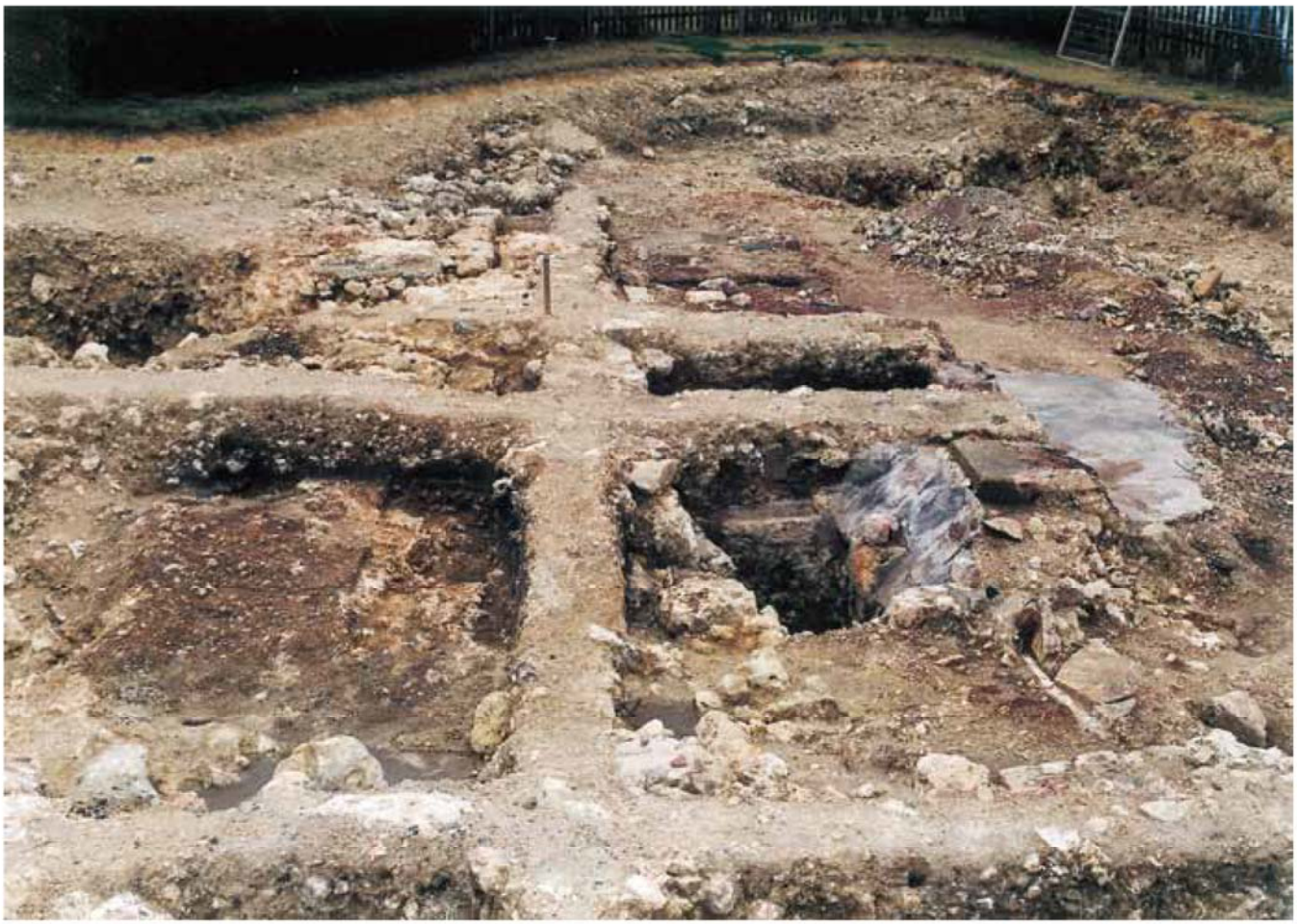
誤差の原因は、恐らく当時の建築設計図書上は柱間90.9cm（半間）で設計され、実際の施行では、柱間87.5cm（半間弱）で建築された。設計図書上と施行上との誤差は、−3.4cmと長さが短くなっている。単純に計算すると柱間87.5cm（半間弱）を2倍して1間とすると175cmとなる。これを正規の1間（181.8cm）から差し引くと−6.8cm短くなる。更に、−6.8cmを5倍にすると計算上は−34cmとなる。

実測図上の誤差−34cmと計算で得られた誤差−34cmは一致している。建築時の壁板材（幅35cm・長180cmと仮定）して置き換えると正面で1枚、裏面1枚の計2枚が間引かれていたことになる。

これらの誤差（−34cm）は、屋根葺きの板材（2間半で3～6枚）や屋瓦（明朝系丸瓦：長軸31.6cm、幅14.5cmのサイズで2間半となると15～30枚、同系平瓦：長軸25cm、幅22.3cmのサイズで2間半分で18～36枚）にも影響を与えるようである。間引かれた板材（壁板2枚、屋根板3～6枚）は5～6枚と屋瓦（丸瓦15～30枚、平瓦18～36枚）が最小で33枚、最大66枚分が間引かれたのかも知れない。或いは尺間単位での設けで施行されたため、板材や屋瓦の間引きはなかったかも知れない。

第83図　C･D-16･17 建物SB01（便所）の推定復元

図版 116　上：C・D－16・17　SB01、SD04－B を北側上空より望む
　　下：　同上　　SB01、SD04－B　北より南側を望む



図版 117　上：C・D－16・17　SB01、SD04－B　西より東側を望む
　　下：　　同上　　SB01、SD04－B　東より西側を望む

図版118　上段左：C・D-16・17 SB01、SD04-B　西側北壁（南より）、上段右：C-16 SB01、SD04-B　東側北壁（南より）
下段　：　同上　SB01、SD04-B　南より北側を望む

b．第Ⅵ期後半（昭和24年～昭和58年：1949年～1982年）・（第86図）

第Ⅵ期後半の遺構は琉球大学創設に向けての造成が着手された昭和24（1949）年以降から西原町の新キャンパスへの移転が終了した昭和57（1982）年までの33年間の時期を当該期に設定した。

この時期は、琉球大学校舎建設工事に伴う岩盤の削平や基礎工事をはじめに校舎などの施設の増築・改築および周辺整備がなされた。これに伴う建築物の基礎（石積みや裏込め石を含む）や植栽、そして送・排水管などの各種工事で地形や地下の改変（削平・掘削）がなされた。更に新キャンパスへの移転に向けて実施された校舎などの施設の撤去工事が実施された。これらの工事で地下にその痕跡を留めていたものを遺構として取り扱った。

発掘調査期間中において建物などの基礎跡及び石積みと植栽痕については、ある程度把握ができたが、送・排水管などについては、その用途や機能を判断することが困難な状況であった。その為、過去に実施された京の内地区より東側一帯の発掘調査に携わった発掘調査担当者や調査嘱託員および重機のオペレーターからの聞き取り情報と発掘調査現場での確認をいただいた（註17）。その聞き取りや現地確認の結果、東のアザナ一帯（巻首図版4・5、第84図）にあった水タンク（3基）の撤去工事で発見された送水管と京の内地区から発掘された送水管とは、同一の送水管との事であった。この送水管が東のアザナから京の内地区まで延びていることが発掘調査で確認（排水溝①から未撤去の送水管の出土や排水溝②の北壁に送水管の一部が残存）された。この送水管と同種のものが綾門大道跡（註18）や真珠道跡（註19）の発掘調査でも発見されている。

以上のような状況を踏まえて今回の報告に際し遺構の性格などを把握する目的で、第84図の校舎配置図と拡大した配置図や航空写真（第88図・図版119）を基本にして第86図の遺構図を重ね合わせて、第85・87図のような重ね図を作成した。

発掘調査の結果（第86図）や重ね図（第85・87図）の状況からも窺えるように校舎建物の基礎跡は発掘調査地区の南側に集中し、東南側が法文校舎の基礎、南西側は教育校舎の基礎とみられる。その他、調査区の北西側一帯には送水管など埋設管の溝跡（以下、「排水溝」と表記する。）が集中する。当時の植栽痕は、北壁沿いに3～4カ所確認できた。具体的に植栽の痕跡を示す穴が調査区の北東隅やＳＡ01の基壇中央縁石近くとＳＫ01（ＳＡ19・20、ＳＡ28）の北東隅近く、そして第Ⅳ期のＳＡ27・ＳＡ30（第50図）で確認されている。

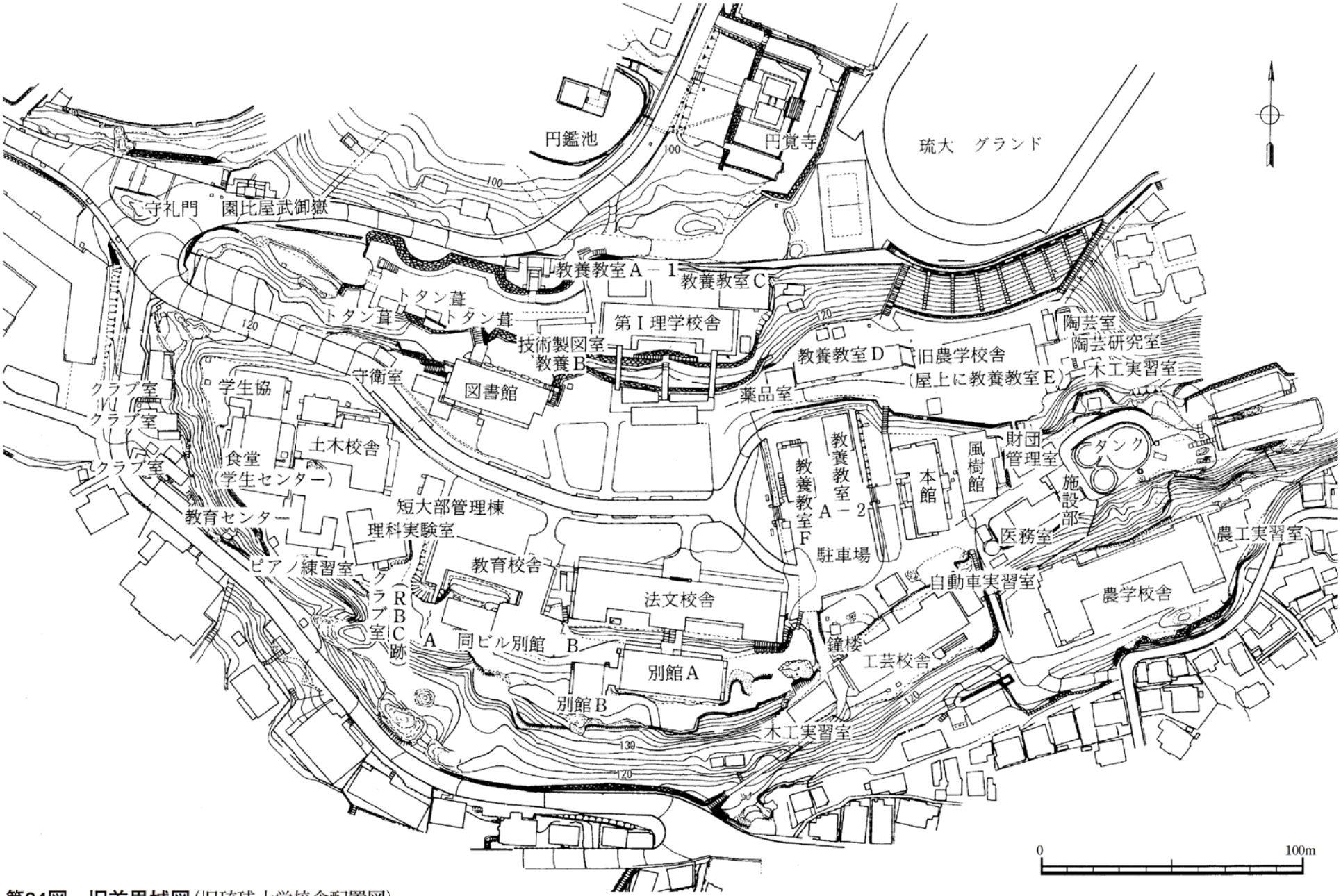
法文校舎の北側に東西に走る擁壁が切り石でもって構築されていたとの情報を聞き取り調査で入手できたので記録を残して大半を撤去した。琉大の擁壁石積みとみられるのは3基が確認されたので、便宜的に「ＳＡ03」及び「琉球大学石積み①・②」（第89～91図・第47表。図版120～122）に分けた。排水溝は発掘調査で確認された順に①～④の番号を冠し、排水溝①～排水溝④（第92・93図・第48表。図版123～126）と表記した。教育校舎の布掘り基礎は、ＳＤ01（第94図・第49表。図版127・128）、ＳＤ02（第95図・第49表。図版129）の2基が確認されている。その他、法文校舎から北側に抜ける道路直下の栗石が石列状に検出されたため、ＳＲ01（第96図・第49表。図版130）と名称を付した。調査区の南東側一帯に法文学校舎の基礎跡が等間隔で検出されている。基礎跡（以下、「フーチン」と表記）は一辺が250cm前後のもので床にコンクリートが流し敷かれていた。調査区南西側に教育校舎の基礎跡が同様に確認されている。基礎跡は、個別に検出された順に番号を付して「フーチン①」・「フーチン②」などと表記した。

註文献

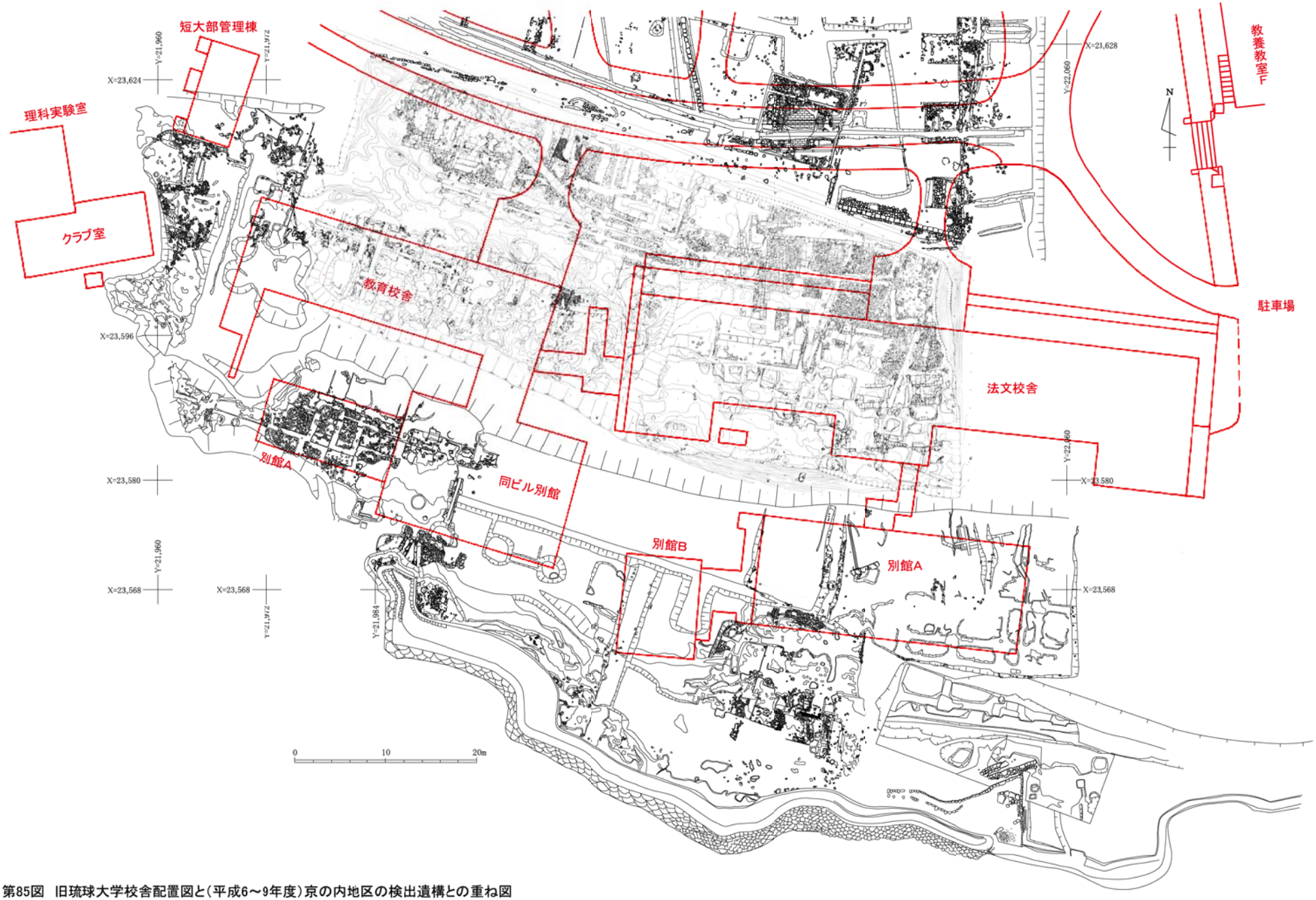
註17. 当時の史跡整備班長上原 静、埋蔵文化財調査嘱託員矢沢秀雄、京の内発掘調査の委託業者松竹 譲氏の教示による。

註18. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第13集『綾門大道跡－首里城跡守礼門周辺発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2003年3月。（平成10年度の発掘調査で調査担当者の金城亀信が確認。）

註19. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第51集『首里城跡・真珠道跡－首里城跡守礼門東側地区・真珠道跡起点及び周辺発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2009年3月。（平成19年度の発掘調査で調査担当の金城亀信が確認。検出直後に那覇市下水道課の職員に現場で確認してもらったところ当該水道管は、現在は使用されていない廃棄管であり、琉球政府時代のものではないかとの事であった）。



第84図　旧首里城図(旧琉球大学校舎配置図)



第85図　旧琉球大学校舎配置図と（平成6～9年度）京の内地区の検出遺構との重ね図

第Ⅵ期後半（昭和24年～昭和58年）
石積み SA03
溝 SD01、 SD02（琉大の布掘り基礎跡）
石列SR01
その他の排水溝①～④、建物基礎（フーチン）①～㉓
※フーチン①・④の南側にある③は第Ⅳ期の SA35と若干、平行する時期の崖地で石切り場跡か。

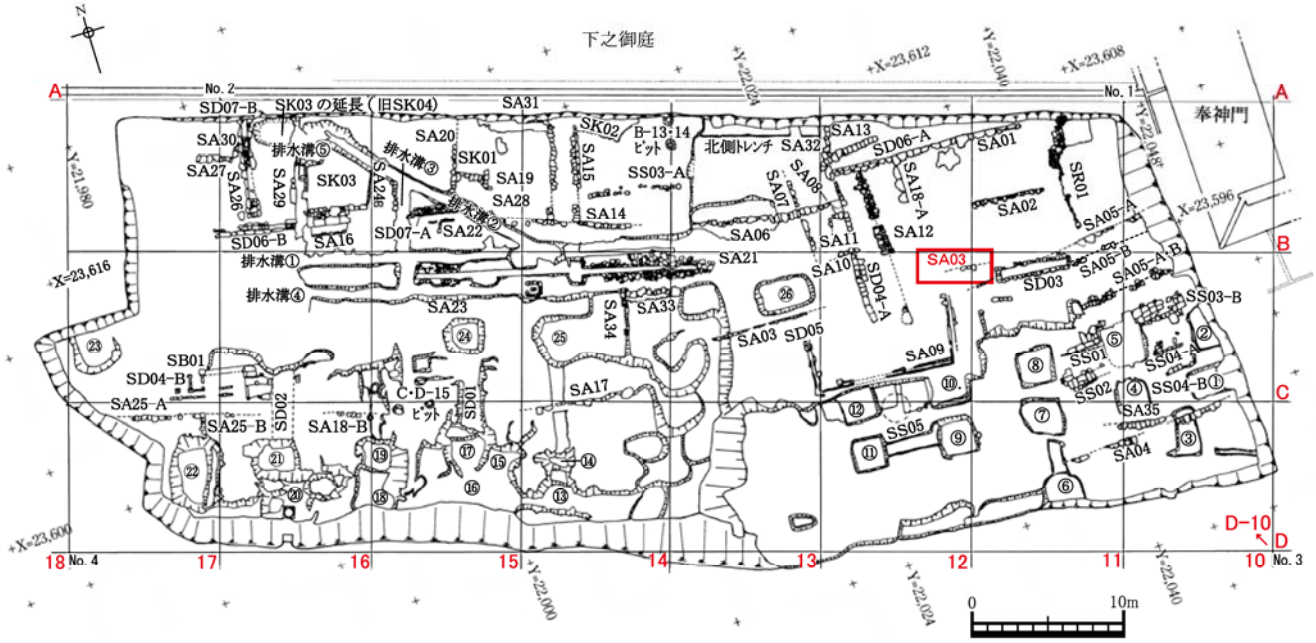
第86図　京の内北地区第Ⅵ期後半（昭和24年～昭和58年）遺構の推定復元

第87図　旧琉球大学校舎配置と(平成6年度)京の内地区の検出遺構との重ね図

第88図　旧首里城図(旧琉球大学校舎配置図)

図版119　1984年琉球大学校舎西側部の拡大　国土地理院撮影(OK84-Ⅸ C-12-8)

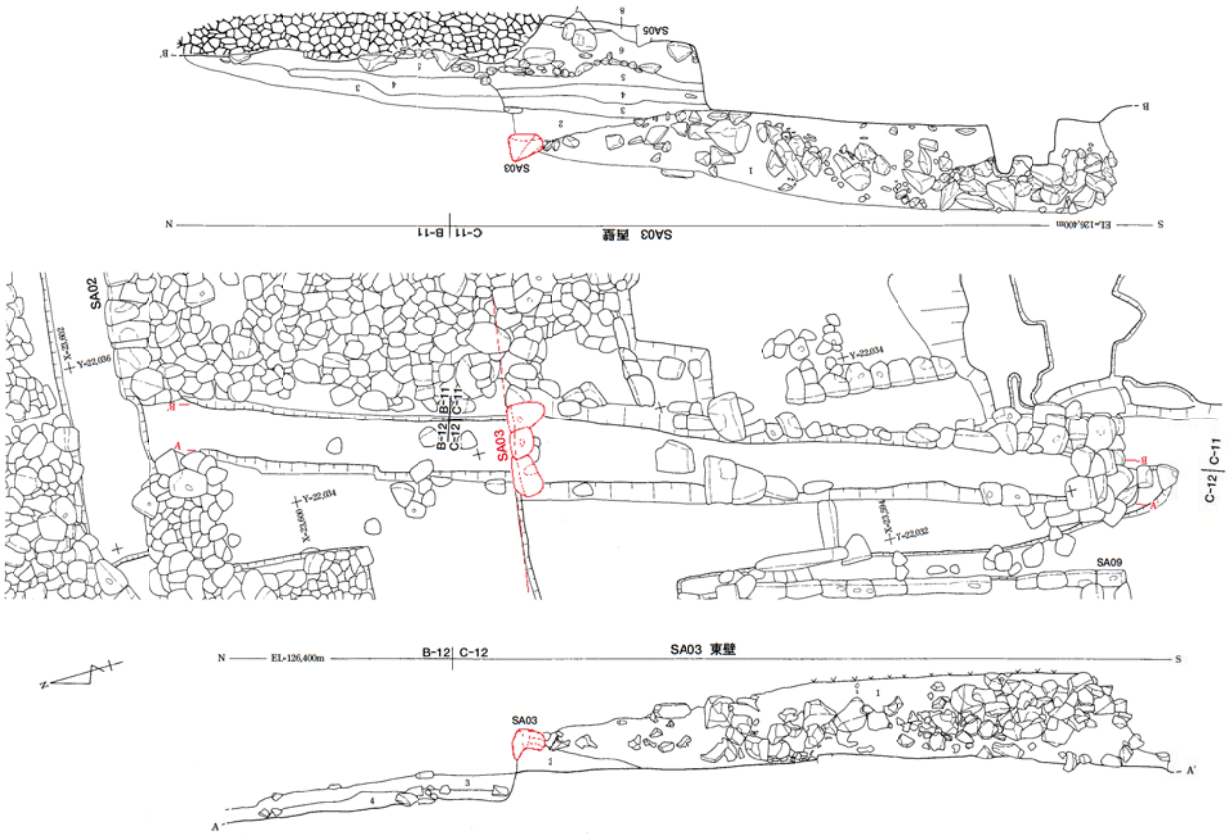
後Ⅵ半期



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 47 表　第Ⅵ期後半　SA03　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C－11・12 SA03 第86・ 89～91図	石積み① 検出直後 の長さ 21m00cm 幅40cm 高さ30cm。 石積み② 残存長 120cm　残 存幅26cm ～40cm 残存高 32cm。	琉球大学法文学部校舎前面にあった建物(第84～86図)と関係する北側の擁壁か。校舎の建物基礎(フーチング)の穴と平行するかのように東西方向に延びていた。聞き取り調査の結果、琉球大学建設時期の遺構であることが判明したので記録を取って除去。城内に在った切り石を擁壁として再度、使用しているようである。石積みは布積みで横目地がとおっている箇所もあった。便宜的に当該遺構の全面にあった石積みを「琉球大学　石積み①」とし、当該遺構(SA03)を「琉球大学　石積み②」と二つに分けた。昭和24(1950)年頃～昭和57(1982)年。	石積み① N8°　00′　W 石積み② N85°　30′　W	石積み① 切り石 — 石積み② 切り石 79°	石積み① — — — 石積み② 18～40cm 28～30cm 23～35cm	本遺構の下位からSA02の栗石やSD04－Aなどの遺構が検出された。SA03は造成土の上に設置。



C-11·12 SA03 層序

第１層…灰褐色混礫土層（攪乱層。公園整備及び琉大施設解体時に攪乱を受ける。）

第２層…淡灰色混土礫層（SA03 直下の造成土。琉大建設時の石積直下の造成土盤。）

第３層…灰茶色土層（琉大建設時の造成土）

第４層…灰白色混土礫層（　　〃　　）

第５層…褐色混礫土層（西壁の試掘壙内で確認された戦前の土盤。）

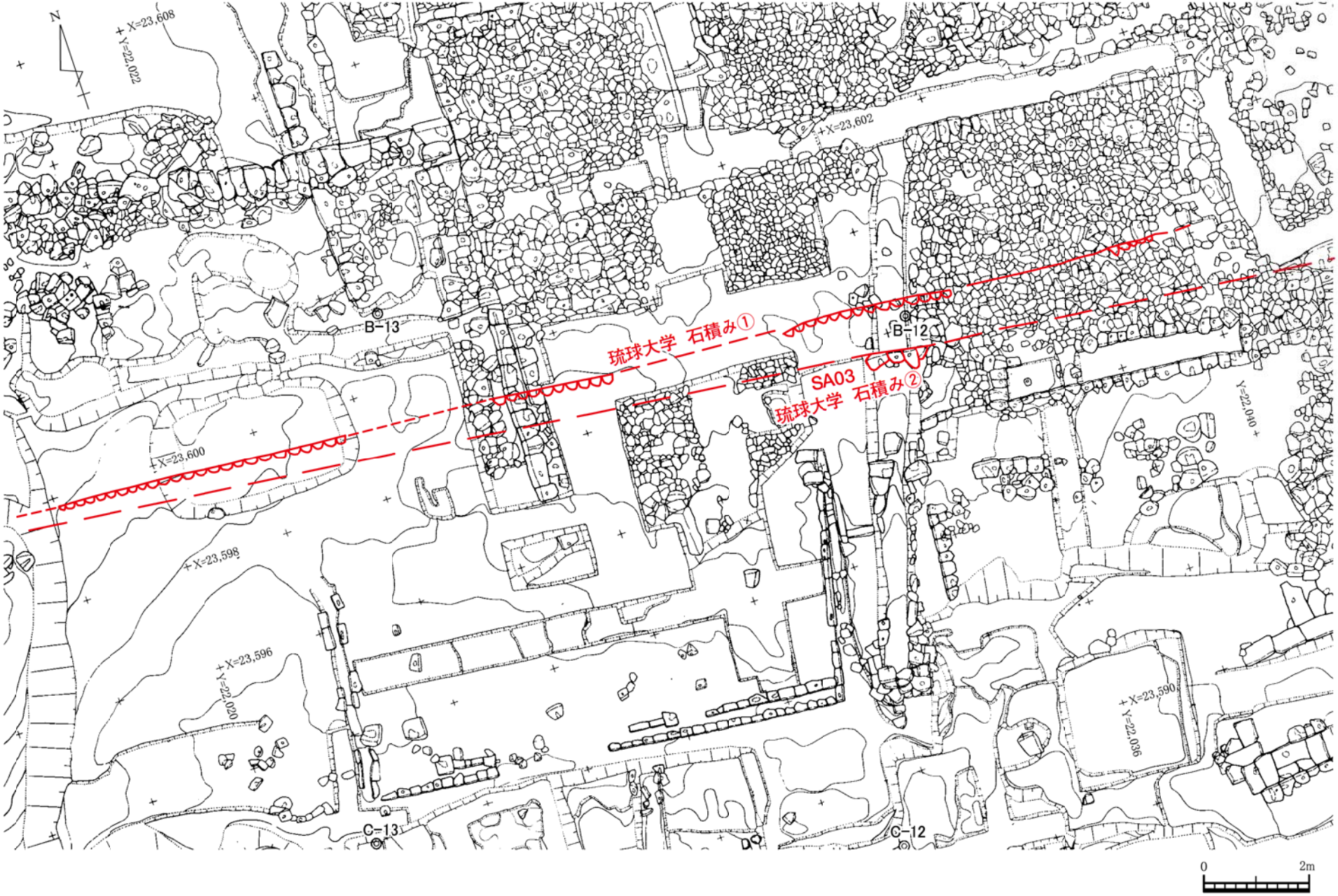
第６層…礫層（西壁の試掘壙内で確認された琉球王国時代に敷きならされた琉球石灰岩礫の裏込目石の層。）

第７層…暗灰色土層（西壁の試掘壙内で確認された間層で、部分的に炭が混入する。）

第８層…淡黄色土層（西壁の試掘壙内で確認される。）

0　2m

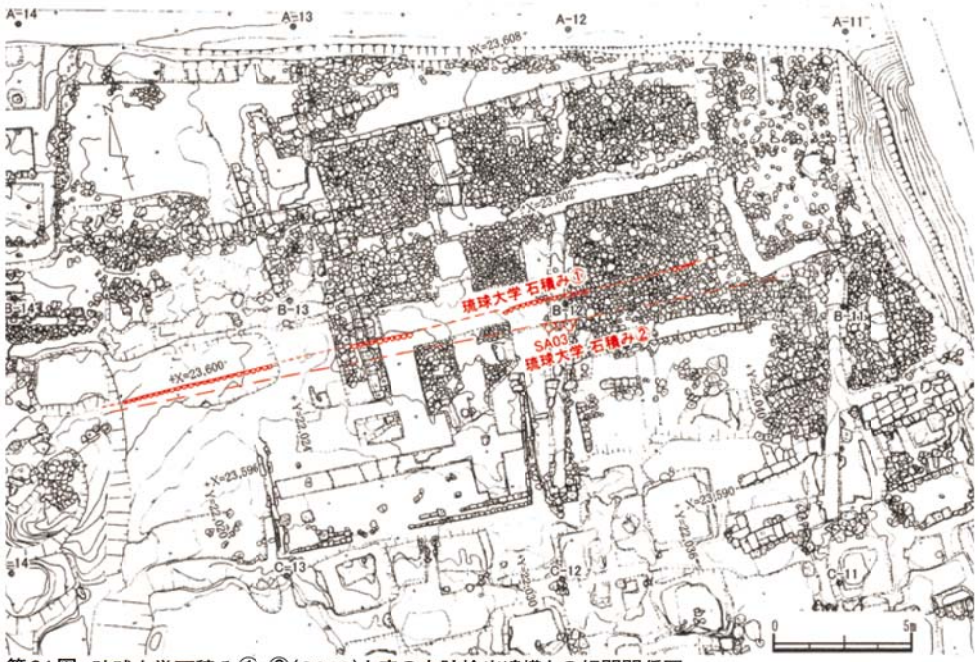
第89図　C-11·12 石積みSA03　平面及び層序



第90図　琉球大学石積み①・②(SA03)と京の内跡検出遺構との相関関係図

図版 120　上：C－11･12　SA03 を南側上空より望む
　　下：　同上　　SA03 ほかを南側上空より望む

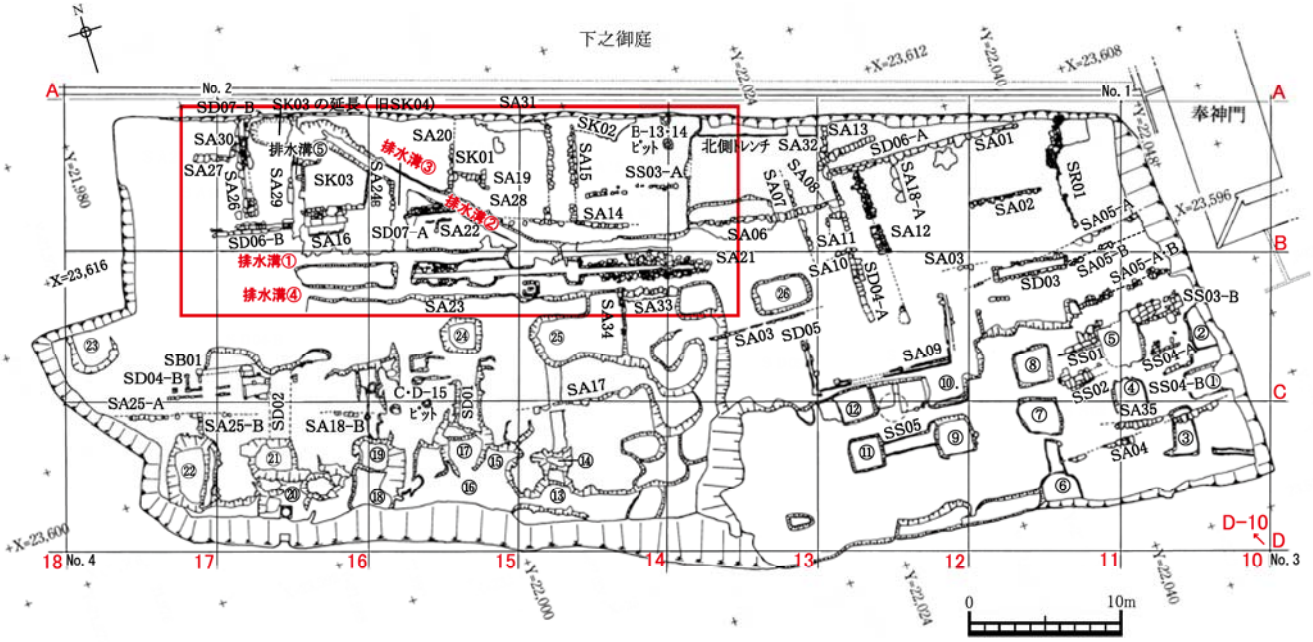
後Ⅵ半期



第91図　琉球大学石積み①・②(SA03)と京の内跡検出遺構との相関関係図

図版121　上右：C-11・12 SA03　南壁(北より)
下左：　同上　SA03ほかを南側上空より望む、下右：C-11・12 SA03　南壁(北より)

図版 122　上：C－11・12 SA03　北より南側を望む
　　下：　同上　SA03　東より西側を望む



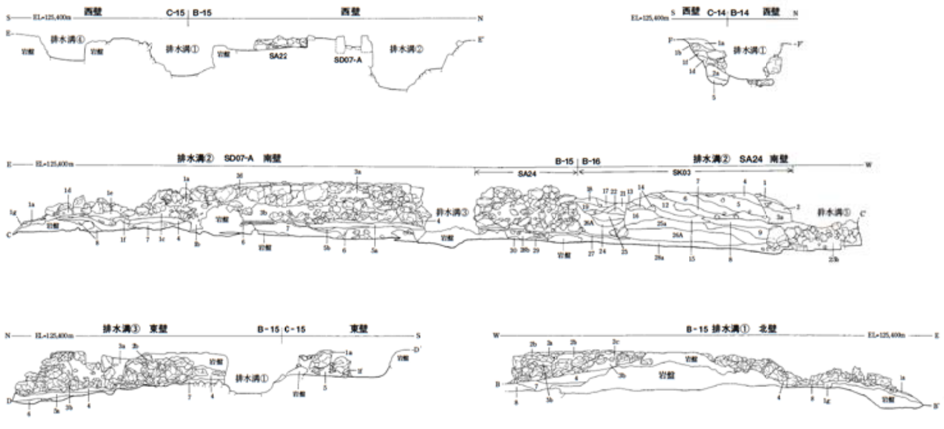
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

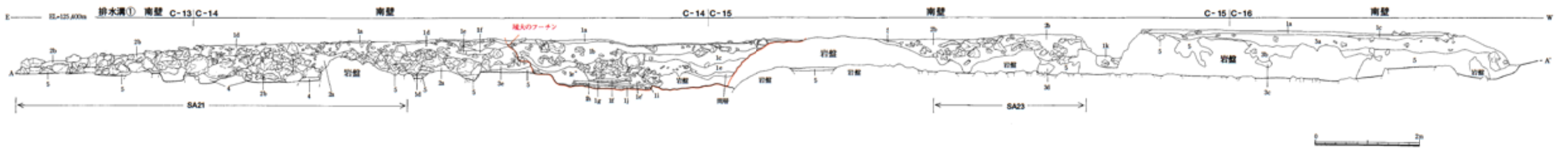
第48表　第Ⅵ期後半　排水溝①～④　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B・C－13～16 排水溝① 第86・92図	25m80cm 35～75cm 60～75cm	琉球大学の埋設送水管などの溝跡を総称して排水溝と仮称。当該排水溝埋設工事の際に第Ⅲ期のSA10（第33図）・SA33（第39図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅴ期のSA21・SA23（第58・64図）、SA06（第59図）を毀損。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N16°　00′　W	― ― ―	― ― ―	第Ⅲ期のSA10（第33図）・SA33（第39図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅴ期のSA21・SA23（第58・64図）、SA06（第59図）が関連する。
B－14～16 排水溝② 第86・92図	17m 60cm 100cm	〃　。当該排水溝埋設工事の際に第Ⅰ期のSK03（第20図）・SK03の延長（第21図）、第Ⅲ期のSK01（第44図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅵ期前半のSD07－A（第77図）を毀損。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N45°　00′　W	― ― ―	― ― ―	第Ⅰ期のSK03（第20図）・SK03の延長（第21図）、第Ⅲ期のSK01（第44図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅵ期前半のSD07－A（第77図）が関連する。
B－15 排水溝③ 第86・92図	4m65cm 80cm 85cm	〃　。当該排水溝埋設工事の際に第Ⅰ期のSA24（第19図）、第Ⅵ期前半のSD07－A（第77図）を毀損。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N21°　00′　E	― ― ―	― ― ―	第Ⅰ期のSA24（第19図）、第Ⅵ期前半のSD07－A（第77図）が関連する。
B・C－13～16 排水溝④ 第86・92図	27m50cm 140cm 80cm	〃　。当該排水溝は上記排水溝とほぼ並行して東西方向に延びている。C－14グリットの西側に「コ」の字状のレンガ積みでセメントで目地を埋めた排水マスが検出されている。第Ⅲ期のSA10（第33図）・SA33（第39図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅴ期のSA21・SA23（第58・64図）、SA06（第59図）を毀損。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N17°　00′　W	― ― ―	― ― ―	第Ⅲ期のSA10（第33図）・SA33（第39図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅴ期のSA21・SA23（第58・64図）、SA06（第59図）。

後Ⅵ半期

第92図 B・C-13～16 排水溝①～④ 平面





C-13～15 SA21・SA23(排水溝①)の層序　南壁

第1層a…茶褐色混礫土層（旧第1層。覆土でコーラルが混入。B-14の途中から西側に薄く堆積する。）
第1層b…灰褐色土層（C-14フーチンの東側に堆積する。）
第1層c…淡黄色土層（C-16で間層として堆積。）
第1層d…灰褐色混礫土層（旧第2層。C-13の西端から堆積が始まり、C-14のフーチンによって堆積が切れる。）
第1層e…黄褐色土層（戦後の攪乱によって生じた間層。C-14フーチンの東側にみられる。）
第1層f…茶褐色混礫土層（戦後の攪乱によって生じた間層。C-14のフーチンの東側にみられる。）
第2層a…灰黒色混礫土層（旧第3層。戦後の排水溝掘削時に破壊されたとみられるSA21の裏込目石。）
第2層b…灰褐色混礫土層（旧第2層。戦後の排水溝掘削時に破壊されたとみられるSA21の裏込目石。16世紀頃の遺物が混入。）
第3層a…黒褐色土層②(遺物包含層。炭以外に、青磁や中国産黒釉天目などが混入。)
第3層b…淡茶色混礫土層（間層。C-16東側の岩盤窪み内に堆積。グスク系土器やカンギクなどが混入。）
第3層c…灰褐色土層（間層。C-16東側の岩盤窪み内に堆積。）
第3層d…黒褐色土層③(間層。岩盤の窪みに堆積する。)
第3層e…灰褐色土層（間層の貝層で、僅かに堆積する。）
第4層…淡黄色土層（旧第4層。岩盤の落ち込み内に堆積した遺物包含層とみられ、炭が混入する。東側のC-14近くで部分的な堆積がみられる。）
第5層…黄褐色～赤褐色土層②(地山。旧第5層。C-15の中央付近にある岩盤西端では、排水溝①設定工事に伴い黒褐色土層③が、同層に間層として狭っている。)

C-14・15 琉大のフーチン内(攪乱部分)及び排水溝①内の層序

第1層a…茶褐色混礫土層（覆土・攪乱層。）
第1層b…灰褐色混礫土層
第1層c…灰黒色土層
第1層d…黄褐色混礫土層
第1層e…灰褐色混礫土層(上層：小礫と赤瓦は混入。)
第1層e'…　〃　（中層：3cm～25cm大の礫が多く混入。）
第1層e''…　〃　（下層：上層のeより黒味を帯びる。）
第1層f…灰色粘土層（シルト質泥岩の風化土。俗称クチャが堆積。）
第1層g…灰茶色粘土層（炭混じりの土層。）
第1層h…灰茶色混礫土層（小礫の混入した粘土層。）
第1層i…セメント（琉球大学建設時の建物などの基礎。）
第1層j…礫層（琉球大学建設時の建物などの基礎。基礎用の石材。）
第1層k…暗褐色混礫土層（排水溝③構築時の攪乱層。）

B-15 SD07-A　層序(排水溝①北壁、排水溝②南壁、排水溝③東壁)

第1層a…淡灰色混礫土層①(戦後の攪乱層。北壁及び南壁の東端と南壁中央寄りに僅かな堆積がみられる。)
第1層b…灰褐色土層（戦後の攪乱層。南壁の中央寄りに部分的な堆積がみられる。）
第1層c…淡灰色混礫土層②(　〃　。)
第1層d…淡褐色土層（戦後の攪乱層。南壁の東寄りに部分的な堆積がみられ、地山の赤褐色土と暗褐色土が混入する。）
第1層e…赤褐色土層①(戦後の攪乱層。南壁及び北壁の最下層で確認されている地山と同一層。)
第1層f…黒褐色土層①(戦後の攪乱層。間層で南壁にのみ僅かに堆積。)
第1層g…灰黒色混礫土層（戦後の攪乱層。第4層のプライマリーな層が攪乱され、小礫が多く混入。）
第2層a…淡灰色混礫土層③(遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。北壁の西寄りに僅かに堆積する。)
第2層b…黄褐色土層（SD07-Aの遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。北壁で部分的な堆積がみられ、東壁ではSD07-Aの南側縁石直下で僅かな堆積がみられる。）
第2層c…赤褐色土層②(SD07-Aの遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。戦時中に火熱を受け土色が変色する。赤瓦片や炭が混入する。北壁で部分的に堆積。)
第2層d…黄褐色土礫層（遺構上面と同一レベルにある往時の地表面。南壁の中央付近で僅かに堆積する。）
第3層a…灰褐色混礫土層（遺構直下の造成土。排水溝直下の造成土で、南壁と東壁のみに堆積。）
第3層b…淡灰色混礫土層③(SD07-A構築以前のSA22関連の造成土。北壁・東壁・南壁の各面で確認される。)
第4層…黒褐色土層②(北壁・東壁・南壁の各面で堆積。)
第5層a…茶褐色混礫土層（主に北壁の中央より西側に堆積し、東壁では北側に堆積する。）
第5層b…茶褐色土層（間層。南壁の西寄りに薄く堆積する。）
第6層…黒褐色土層③(間層。南壁の西側及び東壁に途切れながら堆積する。炭が多く混入する。)
第7層…赤褐色混礫土層（地山の赤褐色土が多く混入し、北壁・東壁・南壁の各面でみられる。）
第8層…赤褐色土層（南壁及び北壁で部分的に観察される。）

B-15・16 SA24　排水溝②の層序

第1層…暗褐色土層（赤土・礫・炭が混入）
第2層…　〃　第1層より黒味が強くなる。（赤土の塊と礫や炭が混入。）
第3層a…　〃　第2層より黒味がさらに強くなる。（赤土の塊に、シルトの塊が混入。礫が減少する。）
第3層b…灰黒色土層。炭混じりの粘土層。
第4層…茶褐色土層（第2・3層の暗褐色土層が混入する。炭が混入。）
第5層…黒褐色土層（赤土の塊が多く入る。炭混入。）赤土の塊は3cm～5cmと5mmが主である。
第6層…　〃　第5層より僅かに土色が薄くなる。赤土の塊が少なくなる。炭が混入する。赤土のサイズは5～10mm前後が主。
第7層…　〃　第6層より若干濃くなる。（赤土の塊が減少し、シルトの塊が入る。）礫や炭が混入してくる。赤土のサイズが2～5cm程度。
第8層…　〃　第5層と土色が近い。赤土の塊が多くなり、第5層よりも多い。炭が混入。赤土のサイズは5mmが主で2～4cmのものもある。
第9層…　〃　最も土色が濃くなる。炭が混入する。赤土の塊は減少し、赤土の塊は5mm前後。
第10層…黄褐色土層（灰茶色の土が混入する。炭はない。）
第11層…淡褐色土層（礫・炭が混入）
第12層…淡黄色土層。灰褐色土の塊は5mm～1cmが多く混入。礫・炭が僅かに混入。
第13層…　〃　土の粒子が細かくなる。灰褐色土の塊も4～5mmと細かくなる。第12層より土色はやや濃くなる。炭が僅かに混入。
第14層…　〃　第13層よりさらに粒子が2～3mmと細かくなる。灰褐色土も細かくなる。第13層より土色が濃くなる。炭が僅かに混入。
第15層…淡茶色土層。土色は第14層に近くなり、明るくなる。僅かに暗褐色土の塊が混入する。灰褐色の土の塊(5mm～1cm)が多く混入する。炭は僅かに入る。
第16層…淡黄色土層。第13・14層よりやや色が明るくなる。灰褐色の土の塊は5mm～1cmと第15層と同じ程度のサイズである。炭が僅かに混入。
第17層…明茶色土層。炭が僅かに混入。
第18層…　〃　淡茶色の土砂が混入する。
第19層…淡灰色土層。礫が多く、炭が僅かに混入する。
第20層…明茶色土層。第17層より土色は薄くなる。シルト質の粘土と黒色土層が混じり、塊となって混入する。
第21層…明黄色土層。第13・14層と第19層が混ざる。
第22層…黒褐色土層。炭混じり。
第23層…明茶色土層。第17層よりも土色は濃くなる。
第24層…明黄色土層。黄褐色の土の塊や灰褐色の土の塊が混入する。
第25層a…灰褐色土層。褐色の土が混入する。第16層よりやや明るい淡黄色土層。礫が僅かに混入する。炭が多く混入。
第25層b…石灰岩礫層。石の間に第9層の土砂が入り込んでいる。
第26層A…明黄色土層。褐色や灰褐色の土砂が混入する。焼けた小石が混入する。
第26層B…赤褐色混土礫層
第27層…灰褐色混礫土層。炭が僅かに混入。
第28層a…明茶色混土礫層。遺物を包含する層である。
第28層b…淡褐色混礫土層
第29層…黄褐色混土礫層
第30層…黄褐色土層。地山。

第93図　B・C-13～16　排水溝①～④　立面及び層序

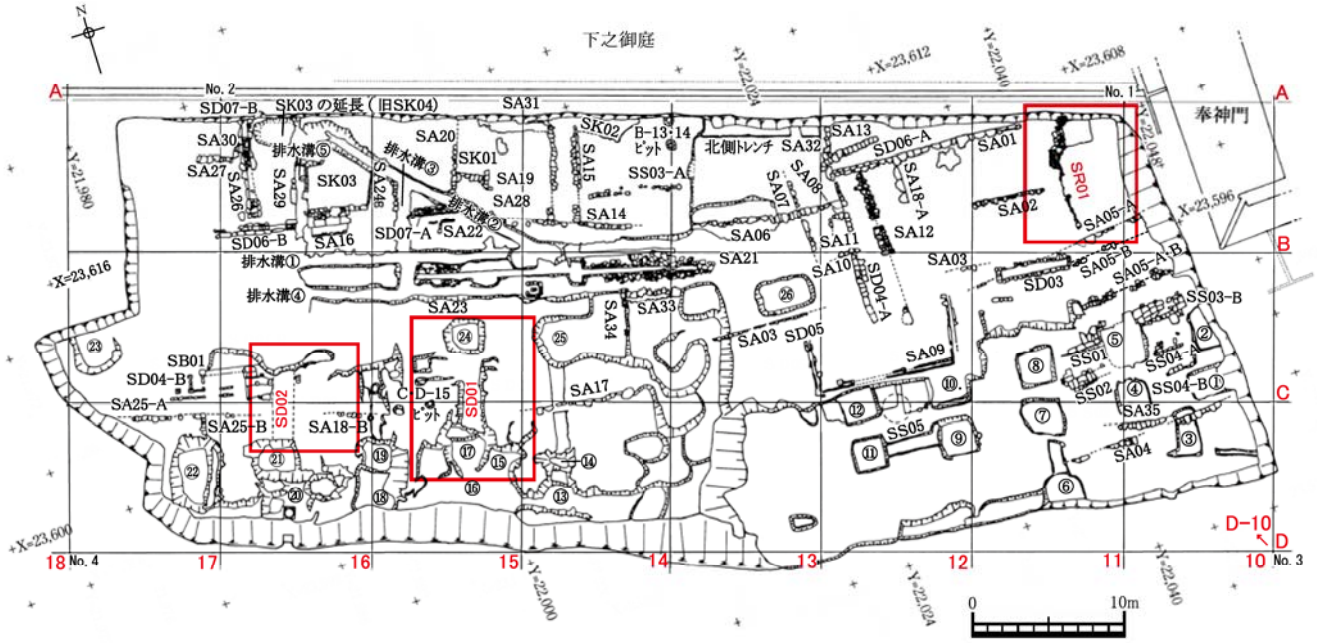
図版123 上：B･C-13･14 排水溝①（手前）の南壁と排水溝④（奥）の状況
下：B･C-15･16 排水溝①（手前）の南壁と排水溝④（奥）の状況

図版 124　左：B･C-13･14 排水溝①･④を南側上空より望む　右：B･C-13～16 排水溝①～④を東側上空より望む

図版 125　上・下：B・C－14・15 排水溝①～④を西側上空より望む

後Ⅵ
半期

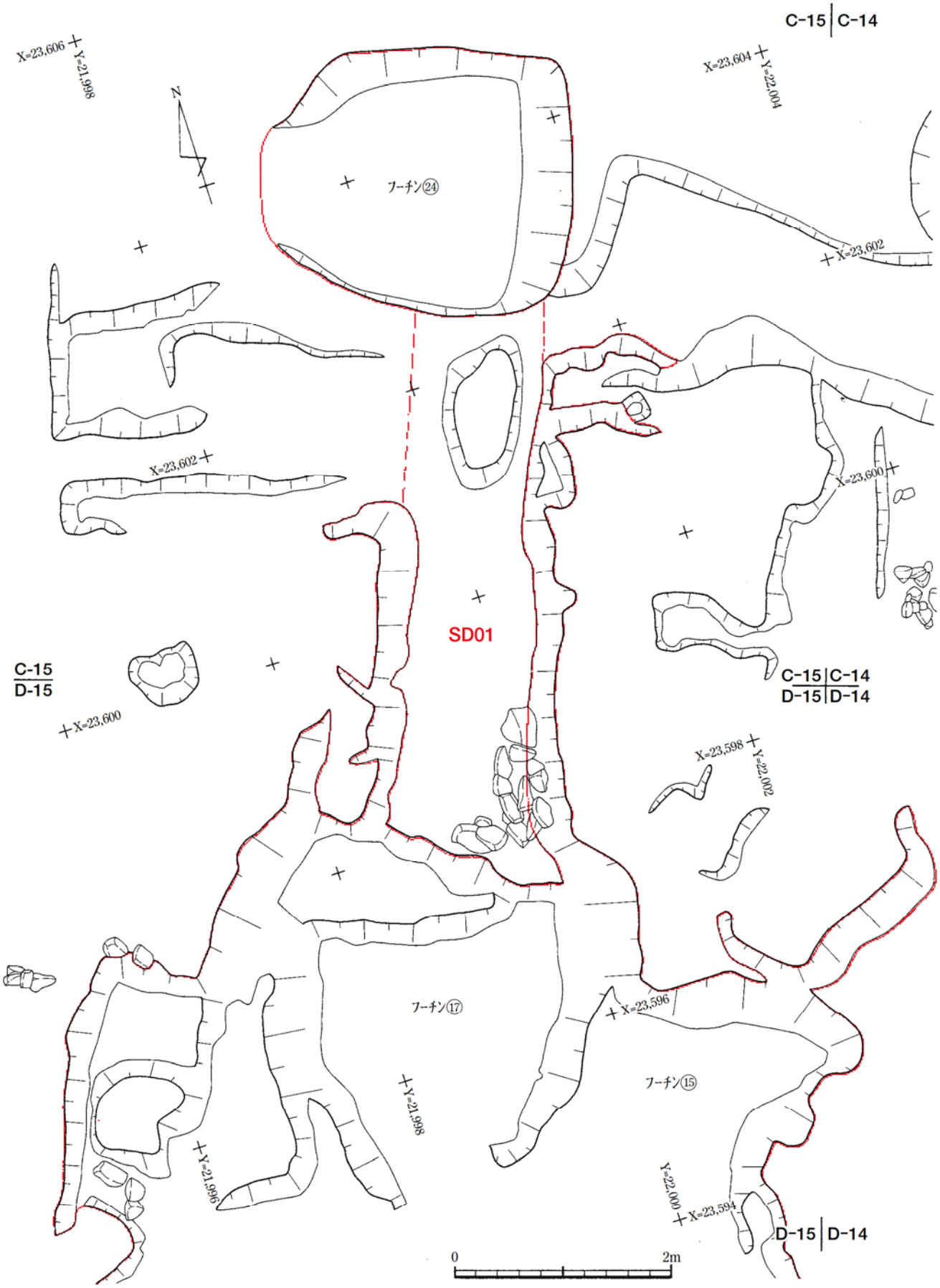
図版 126　上：B･C－15･16 排水溝①・②・④を西側上空より望む
下：B･C－13～16 排水溝①～④を西側上空より望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 49 表　第Ⅵ期後半　SD01、SD02、SR01　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D−15 SD01 第86・94図	5m00cm 1m80cm —	琉球大学教育校舎の布掘り基礎で両端のフーチング（略称：フーチン）に繋がっている。岩盤を南北方向に溝状に掘り下げる。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N24°　45′　E	— —	— — —	当該期のSD02とは平行ではなく若干ずれている事から判断すると校舎建て替えが2回程度存在する。
C・D−16 SD02 第86・95図	4m39cm 1m95cm —	琉球大学教育校舎の布掘り基礎で両端のフーチンに繋がっている。岩盤を南北方向に溝状に掘り下げる。一部造成土を掘り下げている。昭和24（1949）年～昭和57（1982）年。	N19°　15′　E	— —	— — —	当該遺構で第Ⅲ期のSA17（第35図）を毀損。当該期のSD01とは若干ずれている。当該期の遺構SD01との直線距離は12m前後であった。
B−11 SR01 第86・96図	7m10cm 4m04cm —	琉球王国時代に下之御庭と京の内を区画する石積みがあったが、この区画石積みを大正元（1912）年の首里第一小学校校舎建設時に取り崩したものと推定される。戦後、琉大造成時の際に崩れた石積みを道路の基礎や擁壁などの裏栗石として使用か。栗石の上に造成土を敷いてその上から統一性のないルーズな野面石を設置する。南北方向に延びるが中央で途切れている。大正元（1912）年～昭和57（1982）年。	N8°　35′　E	野面石。 —	未計測 — —	第Ⅵ期前半のSA02・SD03（第79図）の時期と平行か。昭和8（1933）年頃に阪谷良之進編集の「旧首里城図」（第72図）に当該遺構の位置は排水溝が通っているようであるが溝の縁石や底石は検出されていない。



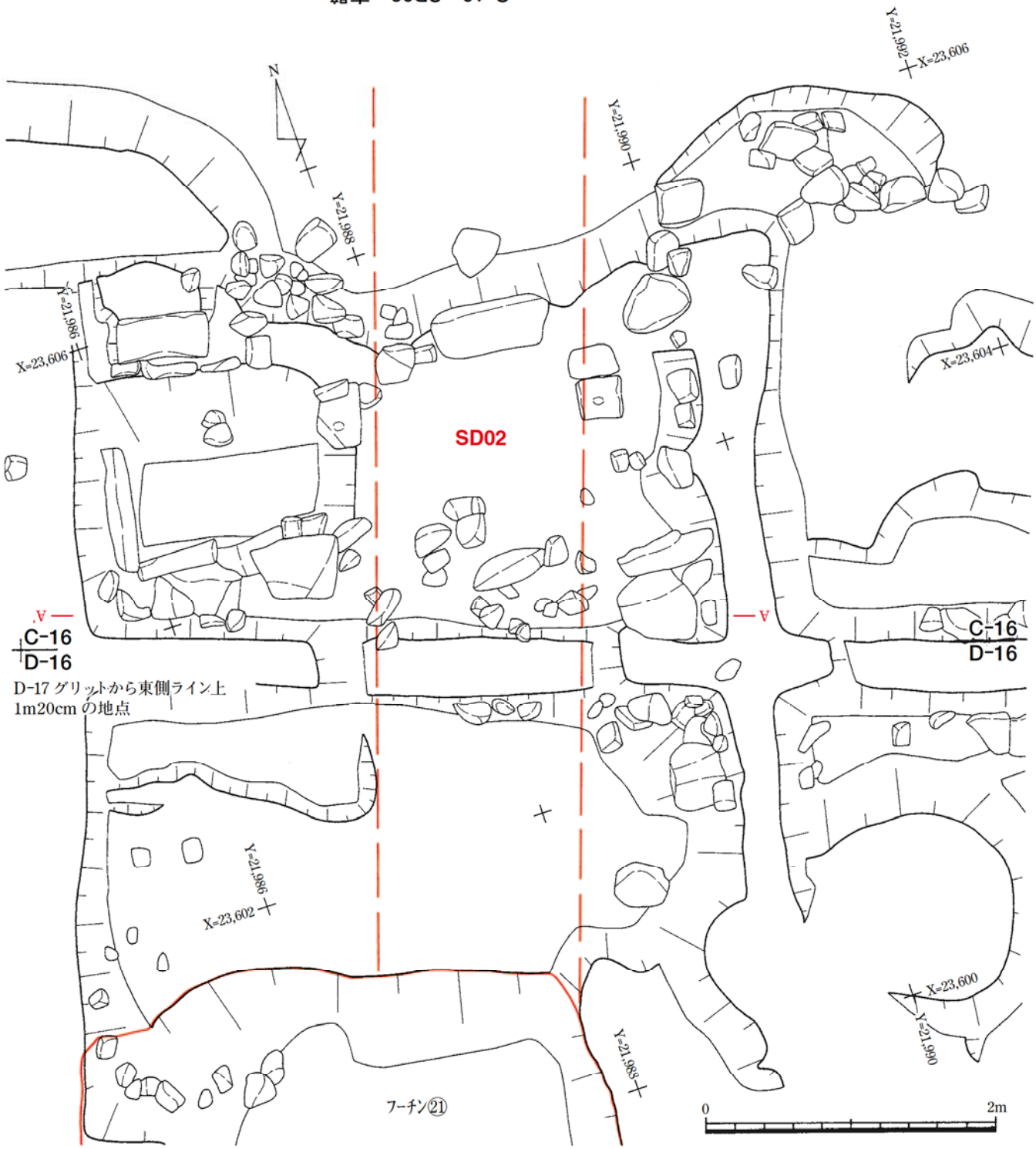
第94図 C・D-15 排水溝（琉大の布掘り基礎）SD01 平面

後Ⅵ半期

図版 127　上：C・D－15　SD01（写真下方の溝）を西側上空より望む
　　下：　同上　　SD01（写真中央より上の溝）を西より東側を望む

後Ⅵ半期

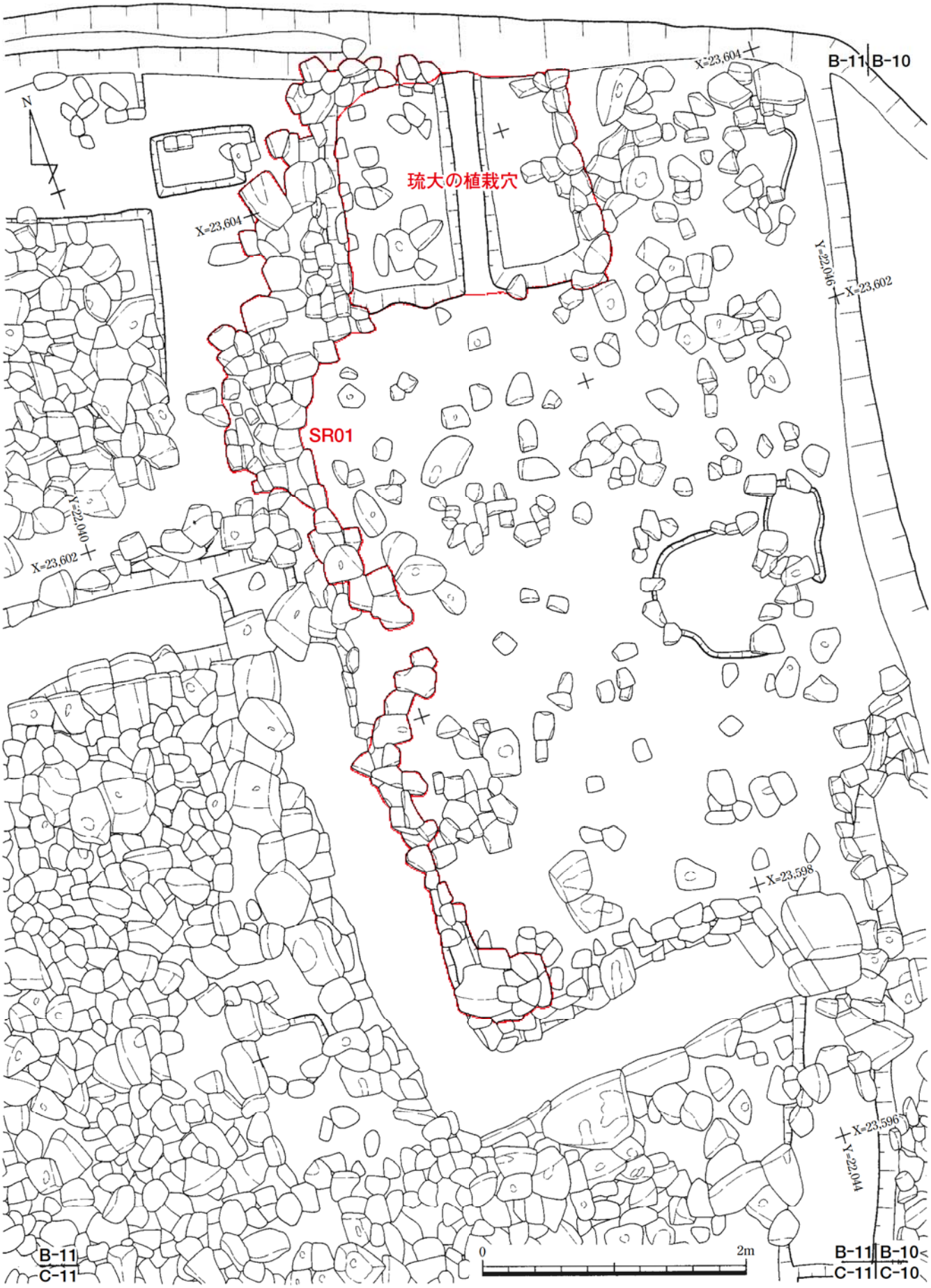
図版 128　上：C・D－15　SD01（写真右側の溝）を北より南側を望む
　　下：　同上　　SD01（写真中央付近の溝）を東より西側を望む



第95図 C・D-16 排水溝（琉大の布掘り基礎）SD02 平面・断面

後Ⅵ期

図版 129　上：C･D－16 SD02（写真中央より左のマンホールから手前に延びる溝）を北側上空より望む
下：　同上　SD02（写真中央畦の右側窪みが溝）を南より北側を望む



第96図　B-11 石列SR01　平面

後Ⅵ
半期

図版 130　上：B-11　SR01（写真中央の栗石溜り）を南側より望む
　　下：同上　SR01（写真手前から中央上部の栗石溜り）を北より南側を望む

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと
書　　名	首里城跡
副 書 名	京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）　平成６年度調査の遺構編
巻　　次	―
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 56 集
編著者名	金城亀信・瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・伊藤恵美利
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903－0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193－7　TEL　098－835－8751・8752
発行年月日	2011/3/30

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積 ㎡	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市	那覇市 47201		26° 12′ 31.32683″	127° 43′ 18.24229″			
	しゅりとうのくらちょう 首里当蔵町3丁目			26° 12′ 32.15599″	127° 43′ 18.93019″	1994.11.21～	2,000	国営首里城公園整備事業
	きんじょうちょう ・金城町1丁目		―	26° 12′ 32.35347″	127° 43′ 20.97267″	1995.3.28		
				26° 12′ 32.97711″	127° 43′ 20.97684″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	祭祀空間	中世・近世	倉庫跡、区画石積み、御嶽、磚敷き、土壙	金属製品（鎧の小札・鞐・鎖帷子・釘・鎹・銭貨等）、ガラス製品（小玉）、中国産（青磁・白磁・青花・褐釉陶器等）、中世陶器、カムィ焼須恵器など。	1459 年の火災により焼失した倉庫跡が発掘された。この倉庫より陶磁器類を主体とする一括資料が得られた。陶磁器類の整理・分類の結果、推定で 1,162 個体を数えた。これらの出土品の中から平成 12 年6月 27 日付けで「沖縄県首里城京の内出土陶磁器 518 点附一、金属製品一括附一、ガラス玉一括」が考古資料の部で国の重要文化財に指定された。前回は、重要文化財の中で未報告であった金属製品及びガラス玉の一括資料と新たに重要文化財の陶磁器との接合資料を報告した。今回は、平成６年度調査で検出された遺構のみを報告する。
	学校施設など	近・現代	建物跡、排水溝、石積み	本土産陶器、沖縄産（土器・瓦質土器・坩堝・壁材・石製品・骨製品等）、釘など。	

要　約	昭和 61 年度に首里城公園計画区内約 18ha の内、首里城内郭の約４ha が国営公園区域として整備することが閣議決定された。復元整備に伴う遺構確認調査は、昭和 63 年度から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受けて、南殿・北殿・御庭地区などの遺構確認調査を実施し、平成４年度に首里城正殿・南殿・北殿などが復元整備され一部が開園した。未整備地区であった「京の内」地区の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料を得る目的で平成６年度から平成９年度までの四カ年間に亘って発掘調査を実施した。その内、報告（平成６年度調査の国の重要文化財が出土した土壙 SK01 及び石積み SA33･34）済を除く、平成６年度調査の全ての遺構について報告をおこなう。出土遺物については、次回に報告をおこなう予定である。

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第56集

首　里　城　跡

—京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）—
平成6年度調査の遺構編

発 行 年　平成23（2011）年3月30日

発　　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒903－0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193－7
TEL 098（835）8751・8752

印　　刷　有限会社　サン印刷
〒901－1111
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098（889）3679㈹

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2011 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。